早稲田大学文研考古誌

潮航

第 39 号
2021年2月

[巻頭言]

この特別な1年に寄せて　高橋龍三郎

[論　　文]

「新崎式土器」の再検討
—遺構・層位的事例に着目して—　飯塚真人

エジプト先王朝時代における硬質土器の研究
—上エジプト出土の彩文土器と波状把手付土器の再検討—　伊藤結華

[研究ノート]

浮線文土器群における文様モチーフの分類と系統についての雑感
—千葉県域出土の精製土器を対象に—　関根有一朗

エジプト第１中間期から中王国時代における木製模型研究
—食糧供物儀礼を示す２次元資料との比較研究の可能性—　宮崎澪菜

再利用された中王国時代に起源をもつテーベ西岸の岩窟墓について
アブデルアール・アハメド

[調 査 報 告]

2020年度神奈川県川崎市橘樹郡家跡の三次元測量・GPR調査
高橋　亘、関根有一朗、呉　心怡、李　承叡、宮崎澪菜、
横山未来、石井友菜、田邊凌基、伊藤結華、山内将輝

[文研考古談話会2020年度活動報告]

早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

溯　航

早稲田大学文研考古誌

第 39 号

巻頭言　この特別な１年に寄せて ..... 高橋龍三郎（１）

論　　文

「新崎式土器の再検討」　—遺構・層位的事例に着目して— ..... 飯塚真人（３）

エジプト先王朝時代における硬質土器の研究

—上エジプト出土の彩文土器と波状把手付土器の再検討— ..... 伊藤結華（31）

研究ノート

浮線文土器群における文様モチーフの分類と系統についての雑感

—千葉県域出土の精製土器を対象に— ..... 関根有一朗（49）

エジプト第１中間期から中王国時代における木製模型研究

—食糧供物儀礼を示す２次元資料との比較研究の可能性— ..... 宮崎澪菜（59）

再利用された中王国時代に起源をもつテーベ西岸の岩窟墓について

..... アブデルアール・アハメド（69）

調 査 報 告

2020年度神奈川県川崎市橘樹郡家跡の三次元測量・GPR調査

..... 高橋　亘、関根有一朗、呉　心怡、李　承叡、宮崎澪菜、
横山未来、石井友菜、田邊凌基、伊藤結華、山内将輝（75）

文研考古談話会2020年度活動報告 ..... （89）

溯航　第39号　1頁　2021年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

この特別な1年に寄せて

高橋龍三郎

今、2020年の暮れを締めくくるにあたり、この1年を振り返る言葉を探してみた。「感染」、「禍」、「劣化」、「人災」、「社会的距離」、「密」、「Go to」等々、あまり良い言葉がみつからない。世界中が「新型コロナウィルス」に翻弄された1年であった。景気や経済の後退をはじめ諸事に停滞感が満ち、充足感は失われ安心安全の達成は望むべくもなかった。春先まで社会的モットーであった「絆」という言葉は、人と人の接触に疑いが向けられ、社会的距離が喧伝されるようになると、途端に分断的な響きに変わった。本来の意味とは裏腹に敬遠されがちであったように思える。そういえば「社会的分断」もこの1年を特徴的に表す言葉だ。

気分は丁度10年前、あの3.11の東日本大震災の時に近い。あの時は大学の機能が麻痺し、ただ無力感が全体を支配した。卒業式、入学式は中止され、大学暦の節目が取り除かれてしまい、無限軌道のように回っているだけの1年であったように思う。ただ、学生たちの交流や接触は損なわれなかったと記憶する。だから今回とは全く事情が異なる。

今年、考古学の卒論や修論、博士論文を書いた人は、この特別な1年をどう振り返るだろうか。手持ちの資料や書籍だけで論文が書けるわけはない。多くは図書館、資料館、博物館、埋蔵文化財センターの資料に頼らざるを得ない状況に変わりはないのに、大多数の施設は閉館や利用制限に追い込まれたままだ。考古学研究室も同様であった。このような中で執筆のモチベーションを持ち続けることは困難である。大変な1年であったに違いない。

そのような事情を考えると、この度『溯航』第39号を刊行することの意義は頗る大きいのではないだろうか。6本の原稿の執筆者の皆さんの地道で文字通り「奮闘」の努力に対して敬意を表し、教員として感謝の気持ちを伝えたい。

私たち教員は研究、教育、社会連携など大学が担う使命をどこまで果たせただろうか。コロナに押しつぶされて「劣化」しなかったろうか。今年は4月から教場授業が中止され、すべてオンラインに切り替わった。教員は春期、秋期の科目コンテンツを製作することに汲々とし、結果疲労困憊したのではないだろうか。余力をもって研究に邁進できたか、と自らに問えば空疎な答えが返ってくる。大学院生諸君も慣れない準備に追われて大変だったに違いない。

このような日常では、社会的サーヴィスの低下は免れえない。2021年も覚悟はしている。私たちはどこかに突破口を開かねば、この隘路に嵌ったまま遅い流れの中で窒息してしまうだろう。いやいや世界的な感染症なのだから、あえて抵抗するのは止めておこう、病災が収まるまで、時の流れに身を任せてみよう、という気持ちも一方にあるだろう。

このような通常ならざる日々にこそ、私たちの胆力が試されるのであろう。やはり我慢し頑張るしかあるまい。

ふと、本棚に目をやると、A. カミュの『ペスト』が眼に止まった。40年ほど前に、北アフリカの旧石器資料を見るために、アル・フスタート遺跡の現場を終えてからアルジェリアのオランという港湾都市を1人で訪れた。偶然この文庫本1冊を携えてオランの博物館を訪ねたことを思い出す。オランを舞台に1人の医師がペストの蔓延という絶望的な危機の中での獅子奮迅の格闘を描いたものだ。どこか今日の状況と重なる。銀色のブックカバーは擦れてカビ臭くなってしまったが、内容は斬新であったように記憶している。

皆さんの地道でひたむきな努力が10年後、20年後、30年後に見事に開花することを祈ります。

論文

溯航　第39号　3-30頁　2021年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

「新崎式土器」の再検討

-遺構・層位的事例に着目して-

飯塚真人

要旨

縄文時代中期初頭から前葉にかけて、北陸を中心に新崎式土器と称される土器群が盛行した。新崎式は、口縁部に蓮華状文を巡らせる、頸部に無文帯を設ける、胴下半部にB字状文や入り組み文といった縦位区画文を描出する点などが特徴として挙げられるが、これらのうち縦位区画文の流儀は中部高地の狢沢式期より勝坂式土器圏に流入し、藤内Ⅰ式期以降に勝坂式の１タイプとして定着するパネル文土器の祖形となる。一方で、新崎式期には中部高地の土器群の諸要素が比較的安定して出現するようになる。しかし、現行の新崎Ⅰ・Ⅱ式という細分編年は、中部高地の編年と比して目が粗く、影響関係を検討する上での編年の壁が生じていることは否めない。そのため、本稿では中部高地の編年に対応し得るような新崎式の細分案を提示できるのではないかと考え、Ⅰ式を古段階（a式）・新段階（b式）の２段階に、Ⅱ式を古段階（a式）・中段階（b式）・新段階（c式）の計５段階に細別した。また、それまでの北陸の編年案の検討は型式学的検討に大きく拠っていたが、本稿においては遺構・層位的事例に着目して変遷を追った。

キーワード：縄文時代中期、北陸、新崎式土器、五領ヶ台式土器、パネル文土器

はじめに

北陸の中期初頭から前葉の土器群である新崎式は、中部高地においては、狢沢式・新道式期になると勝坂式土器群に強い影響を及ぼすようになり、結果として勝坂式土器に「パネル文土器」と称される一群を成立させるに至る[(1)]。その一方で、新崎式期末には新道式・藤内Ⅰ式に特徴的な、口縁部に半楕円形＋三角形区画文を有する土器など、勝坂式の諸要素を持つものが安定して出現するようになる。よって、新崎式の編年をおさえておくことは、パネル文土器の成立をめぐる問題だけではなく、中部高地と北陸の交渉関係を検討する上でも重要となろう。しかし、現行の新崎式の細分編年―新崎Ⅰ・Ⅱ式―を中部高地の編年と対比すると、Ⅰ式は五領ヶ台Ⅱ式古段階・新段階、Ⅱ式は狢沢式、新道式、藤内Ⅰ式の３段階に跨る型式となっており、目が粗いことは否定できない。この所謂編年の壁を乗り越えない限りは、より詳細な社会交流の在り方を復元するのは難しいと言っても過言ではないだろう。そのため、本稿では両者の交流関係を模索する第一歩として、中部高地の編年に対応し得るような新崎式の細分案を提示することを目的とする。

北陸の縄文時代中期前葉から中葉にかけての編年・細分案については、凡そ1970年代まで長らく着地点が見出されなかった。それは、当地域における一括廃棄の可能性のある土器の出土事例が少なかったために、型式学的検討に偏重せざるを得なかったこと、また、遺構出土の事例が確認されたとしても概報での報告のみであり、正式な発掘調査報告書が刊行されないケースが多く、研究者間で出土事例に基づいた客観的な分類・編年観が共有されなかったことに起因しよう。しかし、編年案が固まりつつあり、論戦が一応の落ち着きを見せ始めた1980年代以降に、同時性を窺わせるような出土事例が相次いで報告され、遺構や層位に基づいた編年を再検討することのできる環境が整いつつある。ところが、そうした事例に着目した研究は決して多いとは言えない。そのため、本稿ではそれまでの型式学的検討という観点ではなく、遺構・層位的出土事例という新しい切り口から、従来の編年観を再検討することを試みる。ただ、遺構・層位的出土事例が増加してきたとはいえ、中部高地・西関東の勝坂式土器圏のように、住居址の重複事例が豊富ではなく、床面一括出土の土器群にも未だ恵まれているとは言えない状況である。それゆえ、現段階での遺構・層位的事例を基盤としたうえで、包含層出土の土器なども検討の対象とし、器形の分類や文様の変遷を考えていきたい。また、編年の再検討に当たっては、先述の理由から、中部高地での事例を念頭に置いて再検討を進めていきたい。

1．先行研究

新崎式の編年研究は、現在に至るまで凡そ３段階に分けることができよう。本項では先行研究を段階ごとに追いながら、課題を探っていく。

第１段階　「新崎式」の認識

北陸の編年体系が整備され始めたのは、関東地方の諸型式よりも遅く、戦後になってから活発化した。その嚆矢となったのが、1952・1953年の九学会連合による能登調査である。この調査で、先史文化担当班の班長であった山内清男氏によって北陸の中期初頭として「新崎式」が抽出された。この調査の成果については、1955年に刊行された『能登―自然・文化・社会―』の中で高堀勝喜氏が報告しており、1952年の時点では、新崎式は仮称の域を出なかったが、翌53年の調査や、1954年の堀松貝塚の調査等でその性格がはっきりしてきたと述べている。

1954年、石川県金沢市古府遺跡の第一次調査の報告（石川考古学研究会 1954）の中で、分類された土器のうち、第一類に能登調査で示された新崎式があてられた。また、関東との対比として、新崎式を五領台（ママ）併行、上山田式を勝坂併行、「古府式」を加曽利E古式併行、串田新式を加曽利E新併行としている。

第２段階　「新崎式」の細分の活発化

調査事例の増加から、新崎式の型式内容が複雑化し、従来の新崎式は五領ヶ台式併行期の所産であるという見方に矛盾が生じるようになった。特に、新崎式の範疇に含まれていた三角形連続刺突文が勝坂式（新道式）との関連が指摘されるようになり、それを解決するために、新崎式を古・新の２段階の変遷をたどるものとしてとらえようとする動きが出てくる。

1970年、高堀氏は『七尾市史』の中で、上山田式から新崎式との過渡期的様相をもつ土器を抜き出す形で「上山田古式」の呼称を用いた (七尾市教育委員会 1970）。しかし、1972年に刊行された『富山県史考古編』においては、執筆者である小島俊彰氏が、上山田古式は新崎式の中から抽出されたものであるととらえたため、新崎式・上山田式の移行期の土器群をめぐって高堀氏と小島氏の見解に相違が生じた。

1976年には、沼田啓太郎氏によって石川県金沢市大桑中平遺跡の報告がなされた（石川考古学研究会 1976）。この際の報告資料から、新保式から新崎式への過渡期の様相の一端を窺い知ることができるが、出土地点などの情報は明らかではなく、且つ遺物の報告が殆ど細片によるものであるなど、簡単な報告であるため（一部資料については『鹿島町徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』の中で実測図として報告されている）、大桑中平遺跡の遺構・層位レベルでの再検討は難しいものと言わざるを得ない。

1977年、『砺波市厳照寺遺跡緊急調査概要』が刊行された。本遺跡は新崎Ⅰ・Ⅱ式期を通して営まれており、また遺構単位で遺物が検出されているため、編年案を検討する上では重要な遺跡であるが、概報のため出土地点の情報が乏しいということは否めず、正式な発掘調査報告書の刊行が待たれるところである。この概報の中で、神保孝造氏は、出土土器をⅠ・Ⅱ・Ⅲ期の３期に区分を行ない、それに基づいて厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式を提唱した（富山県教育委員会 1977）。しかし、神保氏は遺構と土器群の関係を考慮して３期に区分したとしているが、その明確な根拠が示されておらず、また、型式内容の説明が詳しくなされているとは言えないことから、北陸においてこの細分呼称・基準が研究者間で定着することはなかった。

同年、石川県かほく市上山田貝塚の報告書『上山田貝塚』が刊行された。当貝塚では新崎式から上山田式の移行期の良好な資料群が検出されているが、一括出土事例や層位的事例が確認されたとしながらも、出土地点などについての言及はなく、あくまで型式分類に基づく編年案を提示するに留まっている。小島氏はこの中で新崎式をⅠ・Ⅱ式と、上山田古式に相当する型式として新崎Ⅲ式を設定する細分案を提示している（宇ノ気町教育委員会 1977）。

1983年には、南久和氏が『北陸の縄文時代中期の編年について』を発表し、同氏が1976年に提示した「同一器面内同居異種文様」というセリエーション的検討作業をベースに、また1983年に報告がなされた石川県鹿島郡中能登町徳前C遺跡の資料もその検討対象に加え、中期前葉から中葉の土器型式として新保式、徳前C式[(2)]、新崎Ⅰ・Ⅱ式、上山田Ⅰ・Ⅱ式を豊富な図版と共に提示した。この「同一器面内同居異種文様」の検討や細分は当時有効性のあるものとして高堀氏をはじめ研究者間に支持され、現行の編年のベースになったものと思われる。但し、その後の資料の集積に伴って、氏が新崎Ⅰ式とⅡ式の有無をもって区分基準とする楔形刻目文が、新崎Ⅰ式とそれに併行する北信の深沢式[(3)]において確認できることや、六反田南遺跡の事例や加藤三千雄氏の指摘（加藤 2008）に挙げられるように、新崎Ⅱ式期においても楔形刻目文を有さない一群が存在することから、一様にその概念に当てはまるものではないのである。そのため、大まかな流れとしては氏の編年は有効であると思われるが、遺構単位の出土事例や層位的事例を参照しな

がら用いるべき編年体系であるということは念頭に置いておきたい。

以上のことから指摘し得る本段階の問題点としては、

・一括資料が少なかったがゆえに、型式学的検討に偏らざるを得なかったこと。

・厳照寺遺跡や古府遺跡をはじめ、一括事例があったとしても概報のみの報告であったり、出土位置が明確に示されていなかったりと、遺構・層位的出土事例という客観的事実に基づいた検討がなされる環境になかったこと。

が挙げられよう。そのため、編年研究はさながら「百家争鳴」の相を呈していた。しかし、南氏の研究に拠る「新崎Ⅰ・Ⅱ式」という概念が提示されて以降は、それが広く研究者間に受け入れられたことによって、論戦は落ち着きをみせていった。ただ、解決を図った南氏の研究もまた、本段階の例に漏れず型式学的検討であることは確認しておきたい。

第３段階　遺構・層位的事例に基づいた研究の萌芽

新崎式の細分が南氏の示した「Ⅰ・Ⅱ式」に着地点が見出されて以降、石川県小松市念仏林遺跡などで、遺構一括事例が相次いで検出された。それをふまえて布尾和久氏は、津南シンポジウムⅢで、一括資料に着目した編年案の再検討を行なう（布尾 2007）。ただ、氏の編年案は、氏自身も述べているように新崎式の終末期を上山田式の一部に含めているが、氏の提示している土器群は、文様構成の弛緩がみられたとしても、新崎式の施文規則である口縁部横位、胴部縦位という構成は依然として保持されているように思われる。そのため、新崎式の終末を上山田式に組み入れるという氏の編年には、一概には賛成し難い。そして、2018年には新潟県糸魚川市六反田南遺跡で、新崎式・上山田式期の同時廃棄を窺わせる事例が多数検出された。当該遺跡の報告書中においては、そうした成果や、共伴する中部高地や東北地方の、所謂異系統土器との対比をベースに、新崎式をⅠ、Ⅱa、Ⅱb、Ⅲ式の４段階に細分する案が提示された（新潟県教育委員会 2018）。しかし、中部高地の北陸系土器に目を転じると、その対応関係については慎重にならざるを得ない[4]。

２．研究の視座

本稿では、新崎式の編年案の再検討を行なう。それは、筆者が今後分析を進める勝坂式土器のパネル文土器の成立に新崎式が大きく関わっており、それでは新崎式とはいったい何なのか、どういった変遷を辿っているのか、また中部高地の編年とどのような対応関係を有するのかを、筆者自身が把握しておくべきであると考えたためである。よって、本論はパネル文土器の淵源を探る上での前段階としての位置づけである。なお、中部高地との編年対比とそれに基づく細分案の提示は、六反田南遺跡の報告書中においても行なわれているが、先述の理由から慎重な姿勢を取りたい。新崎式の編年を、実際の資料的・伴出事例によってクロスチェックしながら細分するという作業は、パネル文土器の成立をめぐる問題だけでなく、北陸と中部高地の交流関係―どの時期に交流が活発化し、その背景には何が横たわっているのか、など―を考えていく上で重要な位置を占めると思われる。そうした趣旨から、編年案を検討するにあたっては中部高地での事例を念頭に置きながら議論を行なっていく。

また、新崎式の細分は、研究史の項で確認したように、編年研究が活発化した1970年代から1980年代にかけては、遺構・層位的出土事例の少なさに加え、そうした事例が確認されたとしても概報のみの報告に帰結していたため、主観的ともいえる型式学的検討に偏重せざるを得なかった。ゆえに研究者間に見解の相違が生じ、共通理解がなされなかった経緯を持つ。しかし、近年では六反田南遺跡など同時性を示唆する資料群が増加したため、遺構・層位レベルでの、ある意味客観的な細分案を検討できる環境が整いつつある。しかし、そうした検討は布尾氏の研究（布尾 2007）や、六反田南遺跡の報告書における分析がみられる程度であり、低調であることは否めない。そのため、本稿での新崎式の細分にあたっては、遺構・層位的事例に重点を置いた、ある種客観的な編年案が提示できればと考えている。

３．遺構・層位的事例に基いた編年試論

新崎式は、現在Ⅰ・Ⅱ式に細分されているが、さらなる細分の可能性も考えられ、本章ではⅠ式を古段階（a式）と新段階（b式）の２段階に、Ⅱ式を古段階（a式）、中段階（b式）、新段階（c式）の３段階に細別し、新崎式を全５段階に細分する案を提示したい。本稿では紙数の関係から遺構・層位的事例を中心に新崎式の編年を検討することとし、各時期の文様構成の比較検討や系統分析等は別稿にて検討する予定である。また、この後述べる逆位彫刻蓮華文[5]正位彫刻蓮華文[6]、有抉蓮華文[7]刻印蓮華文A種・B種[8]については第１図「蓮華状文」を、本稿で扱う遺跡の位置については、第２図「本稿で扱う遺跡」を参照願いたい。なお、検討にあたっては中部高地の土器群も援用するため、本稿では、中期初頭の土器群は五領ヶ台Ⅰ・Ⅱ式の呼称を、中

期前葉から中葉にかけての土器群については、「狢沢式→新道式→藤内Ⅰ・Ⅱ式→井戸尻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式」の、いわゆる「井戸尻編年」の細分呼称をそれぞれ用いることとする。

新崎Ⅰa式

本段階は、かつて「大桑・中平式」や「徳前C式」等と称され、新保式と新崎式をつなぐ土器群として認識されていた土器群である。当該期の資料は石川県鹿島郡中能登町徳前C遺跡包含層出土土器（石川県教育委員会1983）や、石川県金沢市大桑中平遺跡出土土器（沼田1976）などが該当するが、徳前C遺跡の包含層は湧水により層位・出土状況の把握に困難を極めたとしており、一方の大桑中平遺跡はその報告において出土位置などが示されておらず、またその他の遺跡で出土が確認されていたとしても層位的紐づけが十分ではない土器群である。本段階とⅠb式との時間差は、長野県諏訪郡原村に所在する大石遺跡と富山県富山市に位置する長山遺跡での事例から指摘できよう。大石遺跡は五領ヶ台式期～新道式期を主体とする遺跡だが、このうち土壙201では、徳前C遺跡出土土器群の多くにみられる、横帯区画内に条線地文（いわゆる軌軸文）と三角形陰刻文、円文を組合わせた土器片が五領ヶ台Ⅱ式の古段階（第３図：１）に伴っている（第３図：２）。これに対し、長山遺跡土器集中区で出土している、半隆起線で描出するタイプの蓮華状文を有する土器（筆者の言う新崎Ⅰb式）が第22号住居址から五領ヶ台Ⅱ式新段階（第４図：８−12）と共に出土している（第４図：13・14）。

一方の北陸では、後述するように長山遺跡において新崎Ⅰb式と五領ヶ台Ⅱc式が伴う（第４図：15・16）。これらのことをふまえると、徳前C遺跡や大桑中平遺跡の出土土器群は五領ヶ台Ⅱ式古段階に併行し、新崎Ⅰb式は五領ヶ台式新段階に併行する土器群であることが指摘できよう。ただ、本段階の資料は遺構・層位単位など、まとまった出土事例に恵まれていないため、当該期に属すると思われる土器群のうち、大石遺跡土壙201出土土器片にみられる三角形陰刻文＋円文をもつ土器群を抽出し、今後の系統分析等においてもこれらを予察として検討の対象とすることとする。

新保式との線引きについては、新崎式期通しての特徴と言っても過言ではない、口縁部・頸部無文帯の出現としたい。しかし、第４図７のように頸部無文帯を有さないタイプも残存し、その後の口縁部のみに文様帯をもつ土器群につながっていくものと思われる。また、この時期まで第３図３のような、胴中部で分帯するものもみられる。これは五領ヶ台式期にもみられる手法である。文様要素としては、先ほど述べたような、条線地文に三角形陰刻文と円文を組合わせる文様やB字状文などが挙げられる。

蓮華状文は、半截竹管を逆U字状に動かして描出した蓮華状文（第４図13・14・16）と、本稿では示せていないが、逆位彫刻蓮華文とみられる。このうち後者は、条線地文＋三角形陰刻文＋円文と同様に前期末葉以来の三角形陰刻文に始源をもつものとみられ、後述するⅠb式期の正位彫刻蓮華文は、五領ヶ台式の手法に由来するものであると思われる。

地文は木目状撚糸文のほか、単節斜縄文の縦位施文のものがみられる。また、第３図３のようにB字状文などの縦位区画文を胴部全面に施すものの地文には木目状撚糸文が採用されないが、このことは縦位区画文が円筒下層d式の流れを汲むものではないことを示唆しているものと思われる。その点については新崎Ⅰb式の項で若干の検討を加える。

器形は、口縁部がやや外反し、頸部ですぼまり、胴部が緩やかに膨らみ、底部に向かってすぼまっていくというもの（第３図３・第４図６）、口縁部が内弯し、胴部でやや膨らむもの（第３図４）、朝顔形の器形を呈するもの（第４図５・７）が確認できる。

以上、大石遺跡で出土した土器と共通する、条線地文に三角形陰刻文と円文を組合わせた文様を有する土器の概観を述べたが、遺構出土事例が少ない今日においては、詳細はここまでしか言及できない。

新崎Ⅰb式

当該期の基準資料は、富山県富山市長山遺跡遺物集中地点出土土器（第４図：15−第７図：39）、石川県鳳珠郡能登町真脇遺跡I区第17層出土土器（第７図：40・41）である。長山遺跡遺物集中地点の２層からは、中部高地の五領ヶ台Ⅱ式新段階に伴う中期前葉の土器群が多量に出土した。前期の福浦上層式・円筒下層d式系統の土器８点と、中期末葉（岩峅野式）の土器が１点確認されている他は、他の時期の資料が混在しないことや、報告書の所見で、２層は上下に分かれるものの時期差はないとされていることから、２層出土土器群はほぼ同時期資料と思われる。この前期と中期末葉の資料の来歴についても、調査区北東側部分に遺物の散布や袋状ピットが確認されており、住居跡の存在が想定されるため、２層が埋まりつつある時に、そうした居住区の新しい占拠者達によるかたづけによって投棄されたものと考えられる（八尾町教育委員会 1985）。よって、２層出土資料は同時期資料とみなして大過はなさそうである。真脇遺跡I区第17層は、新崎式期の単純層とみられている。本層

出土土器群は、層位的出土事例に恵まれない北陸においては貴重な層位的紐づけをもったものである。しかし、廃棄単位などに検討の余地があり、それによって帰属時期が多少変わることは想定されるため、他の遺跡出土土器の文様構成などとの共通性を念頭に置いて、この段階の資料としての位置付けを行なっていく。

口縁部や頸部には執拗なまでに半隆起線を多段に重ねるものが目立つが、Ⅱa式期以降のように２、３条しか重ねないものも存在する。器形は、口縁が外反し、頸部でややすぼまり、胴中部がやや張ったのちに底部に向かってすぼまるというものが多く、口縁部がやや内弯し、頸部で括れ、そのまま底部へとつながっていくもののほか（第５図：17）、口縁部がやや内弯し、頸部でややすぼまり、胴部が緩やかに膨らむという器形のもの（第５図：20・22・23・24）、波状口縁を呈するもの（第６図：28・第７図37・38）、朝顔形を呈するもの（第６図：29）がある。蓮華状文は、半隆起線で描出された蓮華状文（第４図：13・14・16、第５図：22）と、正位彫刻蓮華文である（第５図：27・第６図：32・34・35）。正位彫刻蓮華文は、Ⅰa式期までの逆位彫刻蓮華文とは系譜を異にするものと思われる。長山遺跡２層においては、五領ヶ台Ⅱ式期新段階から狢沢式期にみられる、口縁部に連続して垂下させた沈線の先端を抉り取る技法を採用している土器（第５図：21）と正位彫刻蓮華文を有する土器が併存しており（第５図：27・第６図：32・34・35）、また五領ヶ台Ⅱ式新段階の土器そのものも出土していることから（第４図：15）、正位彫刻蓮華文は五領ヶ台式の手法を前提として成立したものと思われる。口縁部に充填される文様としては、蓮華状文の他に縦位の集合沈線文が見受けられ、この点についても五領ヶ台式との連関性が看取される。ただ、Ⅰa式期は逆位、Ⅰb式期は正位と違いは見られるものの、半截竹管を用いない、彫刻手法によるものであることは特筆しておきたい。

また、新崎Ⅰ式とⅡ式を区分するメルクマールとなる、無文帯や区画文の縁辺にキザミをもつ土器群が同一層から出土しているが、寺内隆夫氏が提唱した、五領ヶ台Ⅱ式併行期の北信地域の地方型式である深沢式土器（寺内 2006）には、口縁部横帯区画部に一部キザミを有するものが存在しており、その由来や出現期の問題については検討を要する。しかし、新崎Ⅱa式期以降は頸部無文帯のキザミなど、土器の要素として普遍的かつ安定的に認められるようになるため、無文帯のキザミ手法の定着をもってⅠ式とⅡ式を区別するのは妥当であるように思われる。さらに言えば、筆者が新崎Ⅱc式期の画期としている綾杉状文が施される土器も確認できるが（第５図：26・第７図：39）、この場合の綾杉状文は、他に多くみられる交互刺突文が横流れになって発生した（第７図：39の１・２）バリエーションの一つとして捉えられよう。交互刺突文も、五領ヶ台式の主要な要素の一つであることから、この点に関しても五領ヶ台式の影響関係が窺われる。

胴部文様は、縦位回転の単節縄文や、前期末葉の朝日下層式以来の木目状撚糸文、横位の結節縄文（第６図：30）が確認できる。縦位区画文が施される場合には、幅が狭く、細かく区画される。また、区画文内に縦位の沈線を垂下させることも特徴である。このほか、区画文内に格子目文を有するものもある。結節縄文、格子目文に関しては五領ヶ台式に頻繁に用いられる技法であり、それについても五領ヶ台式との関連を視野に入れておく必要があろう。縦位区画文について、より踏み込んだことを言えば、そのルーツを五領ヶ台式に辿ることができるかもしれない。五領ヶ台式期には、縦位区画文が施文される一群が存在する。縦位区画文が五領ヶ台式に由来するものだとしたら（木目状撚糸文を地文とした、器面全体に縦位区画文を施す土器が殆ど存在しないことからも、縦位区画文が円筒下層d式や新保式の伝統の中から成立したものではないことが窺えるだろうが）、新保式から新崎式への変化期は、北陸が東北地方（木目状撚糸文は、東北地方北部の円筒下層d式の影響と考えられている）の影響よりも中部高地の影響が強くなった時期として考えることができるかもしれない。そしてそれが北陸での有孔鍔付土器の出現へとつながり、新崎式後半のキャタピラ文が施文される土器群の波及へとつながり、ゆくゆくは北陸と中部高地は型式圏こそ違うものの、さながら一つの「文化圏」を構成するようになるというのは想像が過ぎるだろうか。ただ、検討が不十分な現段階では、この段階は、中部高地の五領ヶ台式の影響を強く受けた時期であるということを指摘するに留めておきたい。

新崎Ⅱa式

当該期の基準資料は、富山県砺波市厳照寺遺跡第11号穴出土の土器（第８図：42～44）、石川県真脇遺跡I区第17層出土の土器（第８図：45～第９図：53）である。厳照寺遺跡第11号穴は、新崎Ⅰb式から新崎Ⅱc式期の資料が確認されているが、概報（富山県教育委員会 1977）において出土状況に関する説明がないため、それぞれの時期の一括資料とみなせるかどうかは不明である。真脇遺跡I区第17層は新崎Ⅱa～Ⅱc式期の資料に充実をみせる。

新崎Ⅰ式期との画期は頸部無文帯にキザミが施される

ようになる点だが、キザミが施されない一群も系統として新崎Ⅱa式以降残存する。この頸部無文帯キザミはⅡa式以降の土器群には安定して、ほぼ普遍的にみられるようになることから、新崎Ⅰ式とⅡ式を分ける明確な画期として捉えて問題はなさそうだが、前述したように、寺内氏が提唱した深沢式土器に、口縁部横帯区画部に一部キザミを有するものが存在している他、長山遺跡２層出土土器の新崎Ⅰb式期のものに僅かにみられるため、繰り返すようではあるが頸部無文帯のキザミの始源については一考を要する。

蓮華状文について、この時期においては、沈線を引いた後にそれをつなぐようにして半截竹管を押捺した、刻印蓮華文Ａ種が主として施されるが、正位彫刻蓮華文も依然として施されるものと思われる[9]。また、遺構出土事例は確認されていないが、有抉蓮華文も、半截竹管を使用していることから本段階のものとし、正位彫刻蓮華文から刻印蓮華文の過渡期的様相として捉えたい[10]。こうした蓮華状文は花弁の長さが短い傾向にあり、造作も丁寧である。当該期においてはまだ蓮華状文と口縁の刺突文が共存することはない。また、この段階の特徴として、横帯の渦巻を持つ連弧文が出現する点も挙げられる（第８図：42・第９図：48・52）。Ｂ字状文・入り組み文は新崎Ⅰb式期に比べるとやや幅広になるものの、縦方向に整然と垂下する。口縁部突起はなだらかな「α」字状を呈するもの（第８図：42・43・第９図：53）と、横「U」字状を呈するもの（第８図：47・第９図：49）があり、第８図：44・ 46や第９図：50・51などの「入」字状のものについては後者のバリエーションとみられる。器面は単節縄文を施す場合が多いが、第８図：44のように区画文内に格子目文を充填するものも存在する。

深鉢の器形は、多くは口縁部が緩く外反し、頸部で軽く括れ、胴部でゆるやかに膨らみ、底部に向かってすぼまるというものだが、第９図：51や52のように朝顔形の器形を呈するものも存在する。また、同図52のように波状口縁となる個体もある。

なお、南久和氏による編年（南 1985ほか）では、第８図43の資料は新崎Ⅰ式期の所産としているが、同遺構出土の第８図42と比較しても、口縁部突起やB字状文の形態、そして分帯の在り方を比較しても明確な差は認められず、同時期のものとみなして良さそうである。

新崎Ⅱb式

当該期の基準資料は、富山県厳照寺遺跡第11号穴（第９図：54・55)、石川県真脇遺跡I区第17層（第９図：56・第10図：57）、新潟県糸魚川市六反田南遺跡32F17（第10図：58−60）、富山県中新川郡上市町永代遺跡SI11（第10図：61−63）の資料である。六反田南遺跡32Ｆ17出土資料は、包含層からの出土であるものの、報告書（新潟県教育委員会 2018）において同時廃棄の可能性が指摘されている土器群である。永代遺跡SI11は、SI13と、当該期の所産である第10図：63と新崎Ⅱc式期の所産である第11図：74を共有することから、SI11とSI13では同時期に投棄活動が行なわれていたものとみられる。ただ、住居址の時期については若干の差があるものと思われ、SI11からは狢沢式併行の土器が、SI13からは新道式併行の土器がそれぞれ出土しており、SI11の方がやや早く廃絶したものと推測される。

新崎Ⅱa式との画期は、斜行隆帯の出現である。Ⅱa式期までは隆帯はおしなべて縦方向に垂下していたが、当該期になると、隆帯が口縁部から斜めに垂下し、そのまま横方向に伸びて頸部文様帯と胴部文様帯を分帯するというものが出現するようになる。この斜行隆帯の在り方は、東京都八王子市楢原遺跡出土の縦位区画文土器とも類似するものである（第14図：108）。

そしてそれまでは蓮華状文を有さないタイプの口縁にのみ施されていたＣ字形刺突文が垂下隆帯上にも施されるようになることも一つの画期とみなされよう。隆帯の斜行化に伴って、縦位の隆線によって明確に規定されていたＢ字状文や入り組み文も弛緩が見え始め、隣接する区画文がつながって、第９図：54や第10図：59・63のようにクランク状の区画となるものも現れる。同図58は、分帯が明確で、かつ胴上半部のｈ字状隆帯が新崎Ⅰa式期のような形状を呈するが、頸部無文帯を2段重ねるなど、それまでの規制から逸脱していることから本段階に位置付けた。同図59も、分帯が明確な点を考えると新崎Ⅱa式の範疇に含まれそうではあるが、垂下隆帯が斜行こそしないものの、縦位区画文が幅広化し、且つ流れるようなクランク状を呈していることから、当該期の所産であるとみられる。

蓮華状文については、正位彫刻蓮華文・有抉蓮華文は影をひそめ、刻印蓮華文が主流になり、新崎Ⅱa式期以来の刻印蓮華文Ａ種に加えて、ランダムに細沈線を描出した後に半截竹管を押捺していく刻印蓮華文Ｂ種が出現する。これは一種の手抜きの方向性と思われる。当該期においてはまだ蓮華状文と口縁の刺突文は共存せず、棲み分けがなされている。口縁部突起は、新崎Ⅰa式期に引き続きなだらかな「α」字状を呈するものや、「入」字状を呈するものがある。このほか、垂下隆帯が口縁に突出するものもみられるようになる（第９図：56・第10図：62）。

器形は、前段階の口縁部がやや外反し、丸みを帯びた

胴部が底部に向かってすぼまっていくという器形が主体を占めるが、第９図：55のように朝顔形を呈するものや、第９図：56や第10図：62のように、口縁部がやや内弯するものも存在する。

新崎Ⅱc式

当該期の基準資料は、富山県厳照寺遺跡第４号住居跡内ピット11（第11図：64–67)、石川県真脇遺跡Ⅰ区第17層（第11図：68–73）、富山県永代遺跡SI11（第11図：74–75）、新潟県六反田南遺跡32G8（第12図：76–78）、33F11（第12図：79–81）、33G16（第12図：82–86）、35F17（第13図：87–95）、33F17(第13図：96・97)、石川県小松市念仏林遺跡1号住居址中層・下層（第13図：98–101）と床面出土（第14図：102・103）の資料、石川県七尾市赤浦遺跡南斜面落ち込み遺構出土（第14図：104–107）の資料である。厳照寺遺跡第４号住居跡内ピット11からは４個体が出土している（第11図：64–67）。報告資料に出土状況の記述等なく不明だが、住居跡内ピットからの出土ということから、おそらく住居の廃絶後に一括して投棄されたものなのではないかと思われる。よって、その出土位置などに一考を要するが、本稿では出土した遺構の性格から、同時に投棄されたものとして取り扱うことにする。六反田南遺跡については、前述の通り、報告書の中で同時廃棄の可能性が指摘されている土器群である。念仏林遺跡1号住居跡の中層・下層出土資料は、下層出土の土器の一部が中層からも出土しているため、中層・下層の土器は同時期の所産とみられる。住居址床面資料については、共時性がある程度担保されていると考え、且つ文様構成などから当該期に帰属する同時期資料とした。赤浦遺跡南斜面落ち込み遺構については、遺構とみなす明確な痕跡等は得られなかったとしているものの、斜面に急角度をもって切り込んでいる点から人工的掘り込みとして判断されている。そして、大量・集中・偏在的な土器包含状況から人為的意思・行為の結果生じた土器存在形態を示し、また集落直近の斜面凹地から出土することから一括廃棄とみなされている（七尾市教育委員会 1977）。ただ、この土器集中箇所は攪乱が著しく、また一括廃棄とされているが、出土土器を俯瞰すると若干の時間幅が存在するとみられ、一括性は担保されていないとするのが妥当なように思われる。よって、本遺構（報告書で「人工的掘り込み」としているため、遺構とよぶことにする）出土土器群は慎重に取り扱うこととし、他の遺跡出土の土器と文様構成・形態的特徴の共通点などを念頭に置きながら当該期の資料として扱っていきたい。

新崎Ⅱc式の画期は、綾杉状文、襷状の斜行区画文、区画文内縁辺のキザミの出現である。綾杉状文は隆帯上に刺突文として施されることが多いが、第11図：73・第13図：98・第14図：107などのように区画文内に描出されることもある。なお、中部高地における綾杉状文の出現は藤内Ⅰ式新段階で、北陸においてそれに対応する時期としては、綾杉状文が依然として顕著に施文される上山田Ⅰ式古段階である。そして、隆帯上のC字状のキザミは、Ⅱb式期に比べ、間隔が狭まる。襷状の斜行区画文（第14図：104・107）は、新崎Ⅱb式期に始まった垂下隆帯の斜行化に伴って無文帯や区画文が斜めに、横位に流れる現象がさらに進んで成立したものとみられる。このほか、第11図：71のように、胴部に加えて口縁部にも区画文を配するようになるものが出現するのもこの段階である。

また、キザミは、その施す対象が横位無文帯のみならず区画文内にまで拡大される。この手法については新崎Ⅰb式期に一部で見られるが、その後あまり定着せず、新崎Ⅱc式期になって広がりを見せ始める。なお、中部高地においては区画文内の縁辺にキザミを施す手法は新道式期から藤内Ⅰ式期までみられる。六反田南遺跡には藤内Ⅰ式か、それに併行する時期の、いわゆるパネル文土器が確認されており（第13図：89）、この土器の区画文内の縁辺にもキザミが施されている。この資料は、新崎Ⅱc式期の土器と同時廃棄された可能性が指摘されていることから、藤内Ⅰ式は新崎Ⅱc式に一部併行するものと思われる。

襷状の斜行区画文は次段階の上山田Ⅰ式期にも引き続きみられる手法だが、斜行区画文は渦巻状を呈するようになるため、当該期のそれとは区別される。また、新崎Ⅱc式と上山田Ⅰ式の画期として、斜行隆帯の先端が新崎Ⅱc式期においては鉤状になるのに対し、上山田Ⅰ式期には蕨手状を呈するものが多くなる点も挙げられよう（第１図「斜行隆帯先端の処理」)。

蓮華状文は、刻印蓮華文A種はほとんどみられなくなり、沈線をランダムに描出したのちに半截竹管を押捺する、刻印蓮華文Ｂ種が大半を占めるようになり、造作も粗くなる（第12図：77・79・第13図：91）。また、それまで明確に棲み分けがなされていた口縁の刺突文と蓮華状文が同一器面において共存するようになるが（第12図：79、第13図：91・99）、同一器面に存在しないものもまた残存する（第11図：73、第12図：77、第13図：96、第14図：102・104）。

区画文内充填手法としては、正位の格子目文のほかに、第14図：102のような斜格子目文や、第12図：79や84、86、第13図：87などのような平行条線も施される。なお、棚畑遺跡第119号住居址出土の藤内Ⅰ式古段階の

パネル文土器には、刻印蓮華文B種が施され、また蓮華状文と口縁部の刺突文が共存しており、かつそうしたキザミが密に施されているため（第14図：109）、藤内Ⅰ式古段階と新崎Ⅱc式の併行関係が窺われる。

厳照寺遺跡第４号住居跡内ピット11出土の第11図：64は、新崎Ⅱa・b式期との明確な差異が見出せないが、第11図：67の浅鉢の、三角陰刻文を互い違いに配し、器形が「く」の字状を呈する点が六反田南遺跡33Ｆ11出土の第12図：81と共通し、この資料が口縁部キザミと蓮華状文が同居する第12図：79と共伴していることから、ピット11の４点の資料は新崎Ⅱc式期に帰属するものと考えられる。この遺構からは第11図：65・66のような、半楕円形＋三角形区画文を口縁部に巡らせ、ペン先状工具による刺突文を施し、区画隆帯に沿ってキャタピラ文（北陸でいう連続刺突沈文）がおかれる、中部高地系の土器が出土している。これらの特徴は、中部高地の新道式期・藤内Ⅰ式期に顕著にみられるものであり、また第11図：65の資料が、新道式古段階のような、きっちりとした半楕円形＋三角形区画文ではなく、それよりも弛緩した、新道式新段階から藤内Ⅰ式期のような様相を呈することから、こうした中部高地系の土器はそれに近しい時期の所産とみられる。なお、半楕円形＋三角形区画文を有する土器の胴下半部は、第11図：65のように縄文施文のみの場合が大半であり、第11図：66のような構成はイレギュラーである。これは器面を横帯に分割する勝坂式の文様構成のうち、口縁部横帯区画、胴部縦位区画という新崎式の施文規則に合致する口縁部の半楕円形＋三角形区画文のみを受容した、いわば文様の取捨選択の結果であると推測される。

このほか、第12図：78などの粗製土器にみられる縄文の原体の側面圧痕文を頸部に巡らせる手法は、第12図：82のような、大木７b式系土器にみられる縄文原体側面圧痕文土器に着想を得たものと思われる。

器形は、新崎式に一般的な、口縁部がやや外反し、丸みを帯びた胴部が底部に向かってすぼまっていくという器形が依然として主体を占めるが、キャリパー形を呈するもの、朝顔形を呈するものも増加する印象を受ける。また、大波状口縁を有するものも増加する。朝顔形の器形は上山田式期によくみられる器形であるため、その増加は上山田式の前兆的要素ととらえることができよう。このほか、第13図：87のように台形波状口縁を有するものも存在する。

４．考察

①新崎式土器の細分について

分析を進める中で、前段階の要素が次段階にかなり引き継がれている様子が看取された。先学が指摘しているように、新崎Ⅱ式以降も頸部にキザミが施されないものも存在するほか、新崎Ⅱb式期以降においても、それ以前のように垂下隆帯が整然と配されるものも存在する。つまり、古い要素が、ノイズとしてではなく脈々と残存しており、それが1970年代の型式学的検討による編年案の模索をより難航させたのではないか。そのため、蓮華状文や無文帯キザミ手法、斜行隆帯といった、個別の文様要素や文様構成にのみ注目して変遷を捉えようとするのはいささか危険なのである。文様要素と文様構成をセットで捉えて初めて理解のできる土器群であるといえよう。

また、徳前C遺跡や長山遺跡、赤浦遺跡や六反田南遺跡などの事例から、恐らく関東などとは異なり、住居址や土壙に廃棄するのではなく[11]、集落外に廃棄域があり、そこへ投棄するというのがスタンダードな廃棄形態だったのだろう。よって、今後も遺構一括事例が順調に蓄積されていくというのは望み薄なのかもしれない。そのため、遺構・層位的紐づけをもった土器群と相互に参照しながら、どの時期に帰属すべき資料なのかを見極めていく姿勢が重要になってくると思われる。

廃棄形態については、六反田南遺跡の事例が示すように、ブロック投棄の可能性が考え得る。遺構・層位一括資料が少なかったとしても、そうした視座に立って出土状況を分析すれば、「一括資料」として認識できそうな資料群を検出できるのではないだろうか。これらを基に、一括資料の情報を常にアップデートし、かつ型式学的な検討も併用するという両輪の検討方法がなされていくべきであろう。

②異系統土器について

新崎式は広範な分布域を持つ土器である。北は東北地方日本海沿岸部、東・南は中部高地、西は琵琶湖沿岸といった具合である（加藤 2008）。しかし、それだけ分布域が広く、その分多くの他地域の土器群と接触していることが予想されるのに関わらず、移入される異系統土器の要素は極めて限定的で、大木７b式の、縄文原体側面圧痕文の要素が若干取り容れられている程度で、大半は三角形＋楕円形区画文といった中部高地由来のものである。こうした要素を持つ土器の出土事例からすれば、最も両者の交流が盛んだったのは、中期前葉の新崎Ⅱ式・狢沢―藤内Ⅰ式期であったようだ。なぜ新崎式の集団は他でもなく中部高地の集団と緊密な関係を結んでいたのか。その問題は今後取り組むべき課題であるが、それを考える上でも、今回の細分案の提示は有意義なもの

となろう。

おわりに

本稿では、中部高地の編年に対応し得るような細分編年案の検討と、遺構・層位的事例を基に細分案を検討するという２つの観点から、新崎式土器を５段階に細分した。端的にまとめると、新崎Ⅰa式は頸部無文帯の出現、条線地文＋三角形陰刻文＋円文と逆位彫刻蓮華文を特徴とし、Ⅰb式は正位彫刻蓮華文、多条半隆起線、幅狭の縦位区画文を文様要素とする段階、Ⅱa式期は刻印蓮華文A種・有抉蓮華文、頸部無文帯キザミ手法の定着、Ⅱb式期は斜行隆帯の出現と刻印蓮華文B種の出現、縦位区画文のクランク化、Ⅱc式期は襷状の斜行区画文と隆帯上綾杉状キザミの出現、区画文内縁辺にキザミを施す手法が定着する段階という変遷案となる。

今回の検討では、遺構・層位的出土事例に着目して分析した結果、新崎Ⅰ・Ⅱ式を、ある程度のまとまりをもって細分できたのと同時に、それに伴う異系統土器の存在も浮き彫りにできたように思う。次回以降はより新崎式期の土器組成や異系統土器との関連性を整理・探索し、当該期の人の流れや社会の動きに迫っていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、早稲田大学文学学術院の高橋龍三郎教授、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の金子直行氏、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所の町田賢一氏、早稲田大学大学院文学研究科考古談話会諸氏に貴重なご意見を賜った。また、資料調査にあたっては、松井広信氏はじめとする富山県埋蔵文化財センターの皆様のご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

註

（１）本稿においては、中部高地の中期前葉から中葉にかけての土器群を指す呼称として「勝坂式」と「狢沢式・新道式・藤内Ⅰ式」の語を用いているが、「勝坂式」は狢沢式・新道式・藤内Ⅰ式・井戸尻Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式という細別型式を包括する型式名という意味合いで用いている。

（２）この中には、氏が1976年に「北陸の縄文時代中期前葉の編年に関する一試論」（南 1985：123−138に収録）において提示した「中平式」も含まれるものと思われる。

（３）寺内隆夫氏の指摘に拠る（寺内 2006a・2006b・2006c・2006d）。

（４）本註に関しては、一部本稿の主旨とは逸れることから、以下に記す番号は、記述の対象とする遺物が掲載されている報告書の図版番号を用いることとする。

藤内Ⅰ式は、眼鏡状突起を有し、キャタピラ文脇に間隔が開き気味なペン先状工具による刺突文が施されたり、それの簡略形とみられる蛇行沈線文が同一器面に共存する古段階と、大きく文様構成は変わらないものの、ペン先状工具による刺突文が完全に蛇行沈線に置き換わった新段階の２変遷を辿るものと思われる。これに伴うパネル文土器を概観すると、古段階には蓮華状文、新崎Ⅱc式に通じるような文様構成や、キャリパー形を呈するものが（例：棚畑遺跡第119号住居址・151号住居址、原町農業高校前遺跡第22号住居跡など）、新段階には上山田Ⅰ式に特徴的な、区分けされた隆帯を有するものが伴う（例：長野県諏訪郡富士見町藤内遺跡32号住居跡（富士見町教育委員会2011）の15と30※１など）。隆帯を区分けするという手法は、上山田Ⅰ式古段階に特徴的な手法である（六反田南遺跡31Gの416や33Fの624など）。こうした区分け隆帯を有する土器のパネル文の在り方を見ると、縦位に区画しようとする意図が明確に看て取れ、うねる隆帯の空隙を埋めるような、嵌め込み文的様相の強い藤内Ⅱ式期のパネル文とは異なることが分かる。また、藤内Ⅰ式新段階のパネル文土器は区画文を描出する半隆起線が比較的平滑なのに対し、藤内Ⅱ式期のそれはむっちりとして、半ば肉彫り的な様相を呈することも指摘できよう。

以上のことから、筆者は上山田Ⅰ式古段階に併行する土器群は藤内Ⅰ式新段階であると考えており、上山田Ⅰ式古段階と藤内Ⅱ式が併行関係にあるとする案には賛成できない。なお、筆者はパネル文土器以外の藤内Ⅱ式は、前段階と比べて文様帯及び文様構成が崩れたり、モチーフが大型化するような段階として捉えている。藤内Ⅱ式のパネル文土器は、山梨県甲州市・笛吹市釈迦堂遺跡塚越北A地区SB−10※２などで良好な資料群が確認されている。

※１：藤内遺跡第32号住居跡の15と30は明確な共伴関係にある。

※２：本住居址では、キャタピラ文脇の装飾が蛇行沈線文のみの抽象文土器が検出されているが（報告書中９・31）、藤内遺跡第32号住居跡出土の抽象文土器（報告書中30）よりもかなり形骸化が進み、所謂「サンショウウオ文」を形成しなくなっている。このことからも、SB10が藤内Ⅰ式新段階よりも新しい時期のもの、すなわち藤内Ⅱ式期のものであることが指摘できよう。

（５）第１図を参照のこと。

（６）第１図を参照のこと。

（７）南久和1976「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『北陸の縄文時代中期の編年』（南 1985所収）における定義とは異なる。第１図参照のこと。

（８）本稿の「刻印蓮華文A種・B種」は、南氏のいう刻印蓮華文を私見で細別したものである。第１図を参照のこと。

（９）本稿は遺構・層位的出土の資料のみの掲載のため、図版として示すことが出来ていないが、厳照寺遺跡（富山県教育委員会 1977）のp13の１（第３地点グリッド出土）がこれにあたる。本資料は、蓮華状文の在り方が、新崎Ｉb式期の様相というよりも、刻印蓮華文A種に近いものであることから、本段階のものとして位置付けた。

(10)（９）と同様の主旨から、本稿では掲載していないが、愛本新遺跡第３地点のもの（宇奈月町教育委員会 1971：11の２段目左から１番目の資料）などがそれにあたる。

(11)「廃屋葬」や墓壙における副葬品が遺構内出土資料の来歴である可能性も否定できない。

引用文献

石川県教育委員会 1970『古府遺跡』同県教育委員会

石川県立埋蔵文化財センター 1983『徳前C遺跡調査報告（Ⅳ）』同県立埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター 1986『徳前C遺跡調査報告（Ⅱ・Ⅲ）』同県立埋蔵文化財センター

石川県立埋蔵文化財センター 1999『能美丘陵東遺跡群Ⅳ』同県立埋蔵文化財センター

石川考古学研究会 1954「金沢市古府遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第6号 同研究会

今村啓爾 2010「五領ヶ台式土器の編年」『土器から見る縄文人の生態』 同成社

宇ノ気町教育委員会ほか 1977『上山田貝塚』同町教育委員会

宇奈月町教育委員会 1971『愛本新遺跡調査概要』宇奈月町教育委員会

数野雅彦 1986「北陸系土器研究序説」『山梨考古学論集Ｉ』山梨県考古学協会

加藤三千雄 1988「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観３　中期Ⅱ』小学館

加藤三千雄 2008「新保・新崎式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

金沢市教育委員会ほか 1974『金沢市古府遺跡』同市教育委員会

上市町教育委員会 1985『富山県上市町永代遺跡緊急発掘調査概要』同市教育委員会

九学会連合能登調査委員会 1955『能登―自然・文化・社会―』平凡社

小島俊彰 1974「北陸の縄文時代中期の編年―戦後の研究史と現状―」『大境』第５号　富山考古学会

小松市教育委員会 1988『念仏林遺跡』同市教育委員会

佐藤達夫ほか 1976「勝坂式成立の問題点」『北奥古代文化』第８号 北奥古代文化研究会

高橋　保 1989「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第４号 新潟考古学談話会

棚畑遺跡発掘調査団 1990『棚畑』茅野市教育委員会

寺内隆夫 2006a「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（１）」『長野県考古学会誌』111号 長野県考古学会

寺内隆夫 2006b「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（２）」『長野県考古学会誌』113号 長野県考古学会

寺内隆夫 2006c「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（３）」『長野県考古学会誌』115号 長野県考古学会

寺内隆夫 2006d「飯山市・深沢遺跡出土土器研究の現状（４）」『長野県考古学会誌』116号 長野県考古学会

寺﨑裕助 2009「新潟県における新崎式系土器」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会

東京府編 1932「楢原石器時代住居遺蹟」『東京府史蹟保存物調査報告書』第10冊 東京府

富山県 1972『富山県史　考古編』同県

富山県教育委員会 1977『砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』同県教育委員会

富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003『勅使塚古墳・永代遺跡・安居窯跡群・中山中遺跡発掘調査報告』同埋蔵文化財調査事務所

中島町史編集委員会 1966『石川県中島町史(資料編)』同町役場

中山真治 1995「パネル文土器の系譜」『東京考古』第13号 東京考古談話会

長野県埋蔵文化財センター 2005『聖石遺跡・長峯遺跡・（別田沢遺跡）』同県埋蔵文化財センター

長野県中央道遺跡調査会 1976『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市・原村その１　富士見町その２―』日本道路公団名古屋建設局ほか

長野県立歴史館 2017『進化する縄文土器～流れるもようと区画もよう』同県立歴史館

七尾市史編纂専門委員会 1970『七尾市史 資料編』第四巻 同市役所
新潟県教育委員会 2018『六反田南遺跡VI』同県教育委員会
布尾和史 2007「北陸地方　新崎式・上山田式」『火焔土器前夜』資料集 信濃川火焔街道連携協議会
沼田啓太郎 1976「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会々誌』第19号 石川考古学研究
七尾市教育委員会 1977『赤浦遺跡』同市教育員会
能都町教育委員会 1986『真脇遺跡』同町教育委員会
富士見町教育委員会 2011『藤内』同町教育委員会
婦中町教育委員会 2000『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告』同町教育委員会
南　久和 1976「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『北陸の縄文時代中期の編年』 転形書房
南　久和 1985『北陸の縄文時代中期の編年』 転形書房
八尾町教育委員会 1985『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』同町教育委員会
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 2020『水木田遺跡と縄文時代中期前半の山形』同資料館
山梨県教育委員会 1986『釈迦堂Ⅰ』同県教育委員会
山梨県教育委員会 2005『原町農業高校前遺跡（第２次）』同県教育委員会
山本典幸 2016「基調報告１：五領ヶ台式」『シンポジウム 縄文研究の地平―新地平編年の再構築―発表要旨』縄文研究の地平グループセツルメント研究会

図表出典一覧

第１図　筆者作成
第２図　地理院地図（色別標高図・白地図）を基に筆者作成
第３図
　１：長野県中央道遺跡調査会 1976 第214図
　２：長野県中央道遺跡調査会 1976 第258図
　３：石川県立埋蔵文化財センター 1986 p.59・60
　４：石川県立埋蔵文化財センター 1986 p.52
第４図
　５：石川県立埋蔵文化財センター 1983 p.32
　６：石川県立埋蔵文化財センター 1983 p.33
　７：富山県教育委員会 1977 p. 9
　８-14：長野県中央道遺跡調査会 1976 第140図
　15：八尾町教育委員会 1985 p.29
　16：八尾町教育委員会 1985 p.22
第５図
　17-19：八尾町教育委員会 1985 p.19
　20-24：八尾町教育委員会 1985 p.20
　25-27：八尾町教育委員会 1985 p.29
第６図
　28・29：八尾町教育委員会 1985 p.29
　30：八尾町教育委員会 1985 p.19
　31：八尾町教育委員会 1985 p.23
　32：八尾町教育委員会 1985 p.25
　33：八尾町教育委員会 1985 p.23
　34・35：八尾町教育委員会 1985 p.25
第７図
　36-38：八尾町教育委員会 1985 p.25
　39：八尾町教育委員会 1985 図版11
　　※写真提供：富山県埋蔵文化財センター
　40・41：能都町教育委員会 1986 p.113
第８図
　42・43：富山県教育委員会 1977 p.12
　44：富山県教育委員会 1977 p.14
　45・46：能都町教育委員会 1986 p.113
　47：能都町教育委員会 1986 p.114
第９図
　48・49：能都町教育委員会 1986 p.114
　50：能都町教育委員会 1986 p.116
　51：能都町教育委員会 1986 p.113
　52：能都町教育委員会 1986 p.116
　53：能都町教育委員会 1986 p.115
　54：富山県教育委員会 1977 p.15
　55：富山県教育委員会 1977 p.13
　56：能都町教育委員会 1986 p.115
第10図
　57・58：能都町教育委員会 1986 p.116
　59-61：新潟県教育委員会 2018 図版114
　62・63：富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003 p.31
第11図
　64-68：富山県教育委員会 1977 p.13
　69：能都町教育委員会 1986 p.114
　70・71：能都町教育委員会 1986 p.115
　72・73：能都町教育委員会 1986 p.116
　74・75：富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003 p.31
第12図
　76：新潟県教育委員会 2018 図版116
　77：新潟県教育委員会 2018 図版117
　78：新潟県教育委員会 2018 図版116
　79-81：新潟県教育委員会 2018 図版172
　82：新潟県教育委員会 2018 図版130
　83-86：新潟県教育委員会 2018 図版131

第13図
87：新潟県教育委員会 2018 図版132
88：新潟県教育委員会 2018 図版133
89：新潟県教育委員会 2018 図版132
90-95：新潟県教育委員会 2018 図版133
96：新潟県教育委員会 2018 図版149
97：新潟県教育委員会 2018 図版153
98-100：小松市教育委員会 1988 p.43
101：小松市教育委員会 1988 p.60
第14図
102：小松市教育委員会 1988 p.41
103：小松市教育委員会 1988 p.43
104：七尾市教育委員会 1977 p.66
105・106：七尾市教育委員会 1977 p.67
107：七尾市教育委員会 1977 第49図
108：東京府編 1932 p.23
109：棚畑遺跡発掘調査団 1990 p.325

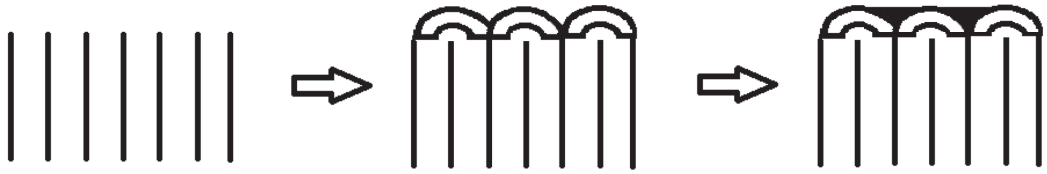
※図表は全て報告書発行機関の許可を得て転載している。

≪蓮華状文≫

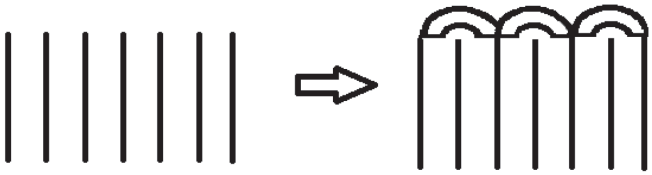
・逆位彫刻蓮華文：沈線（条線）描出→沈線（条線）下端を抉り取る

・正位彫刻蓮華文：沈線描出→沈線間を三角形に抉り取る

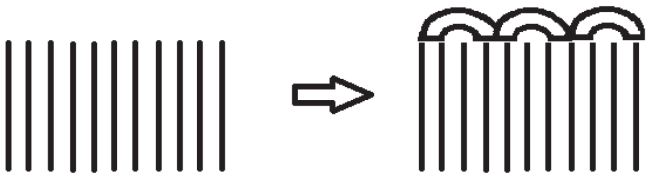
・有抉蓮華文：沈線描出→半截竹管の押捺→竹管文の間を三角形に抉り取る



・刻印蓮華文Ａ種：沈線描出→半截竹管の押捺



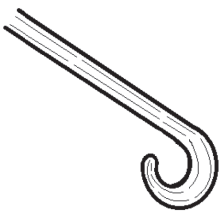
・刻印蓮華文Ｂ種：ランダムに沈線描出→半截竹管の押捺



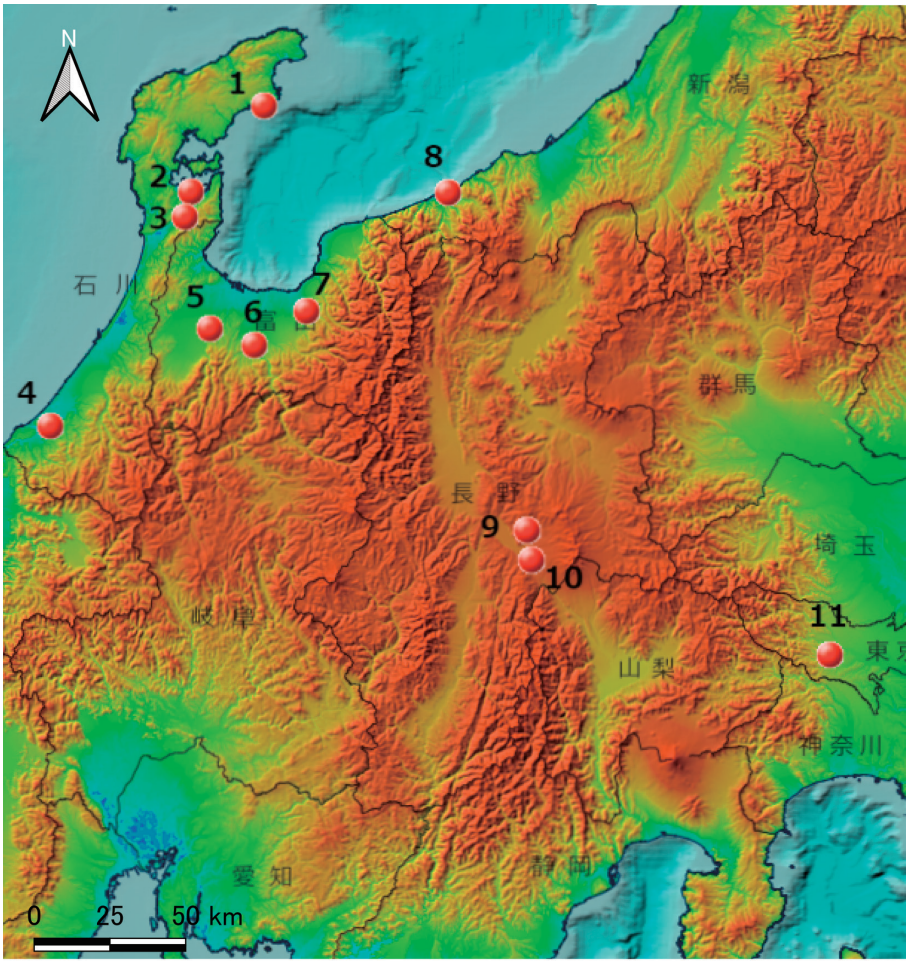
≪斜行隆帯先端の処理≫

・新崎Ⅱｂ・ｃ式期

・上山田Ⅰ式期



第１図　蓮華状文・斜行隆帯先端の処理



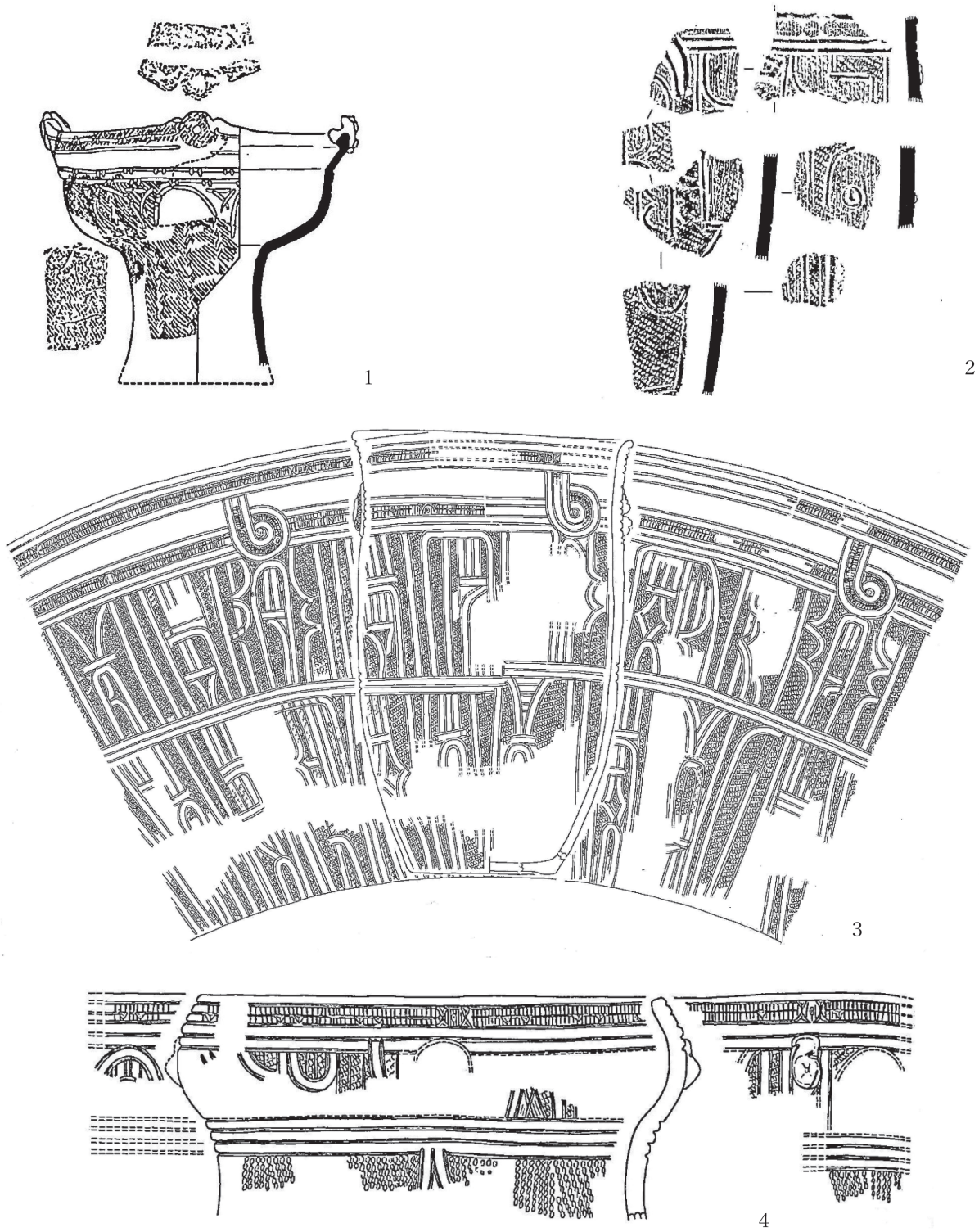
（地理院地図を基に筆者作成）

遺跡番号	遺跡名	主たる時期(縄文時代／大別のみ)	備考
1	真脇遺跡	前期末葉～晩期末葉	貝層を伴う
2	赤浦遺跡	中期前葉～中葉	貝層を伴う、中部高地系土器
3	徳前C遺跡	中期初頭～前葉	包含層
4	念仏林遺跡	中期前葉	集落跡、中部高地系土器
5	厳照寺遺跡	中期前葉	集落跡、中部高地系土器
6	長山遺跡	中期初頭	包含層、中部高地系土器
7	永代遺跡	中期前葉～中葉	集落跡、中部高地系土器
8	六反田南遺跡	中期前葉～中葉	集落跡・包含層、中部高地系土器
9	棚畑遺跡	中期前葉～後葉	集落跡、北陸系土器
10	大石遺跡	前期前葉～中期前葉	集落跡、北陸系土器
11	楢原遺跡	中期前葉	集落跡、北陸系土器

第２図　本稿で扱う遺跡

≪図版≫※縮尺不同

新崎Ⅰa式

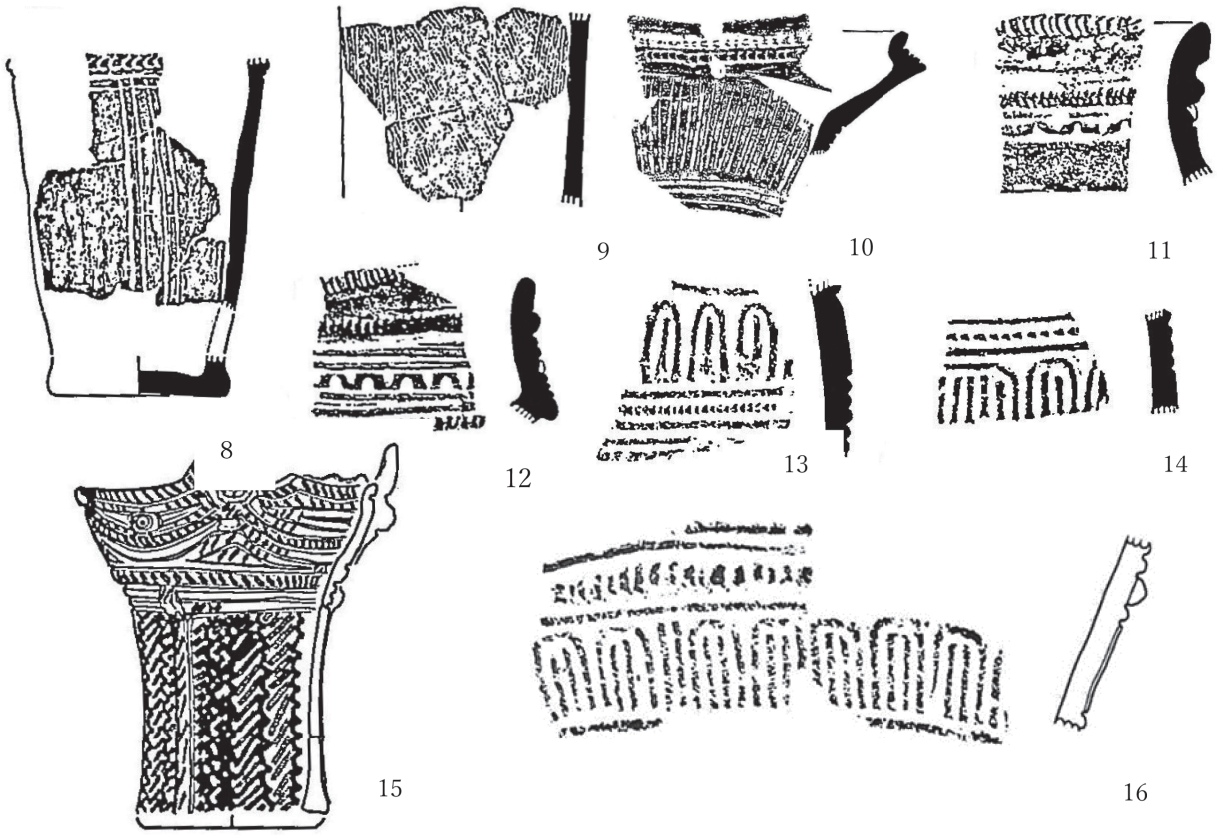


1・2：長野県諏訪郡原村　大石遺跡　土壙201（1は五領ヶ台Ⅱ式古段階）

3・4：石川県鹿島郡中能登町　徳前C遺跡　包含層

第3図　新崎Ⅰa式

新崎Ⅰb式

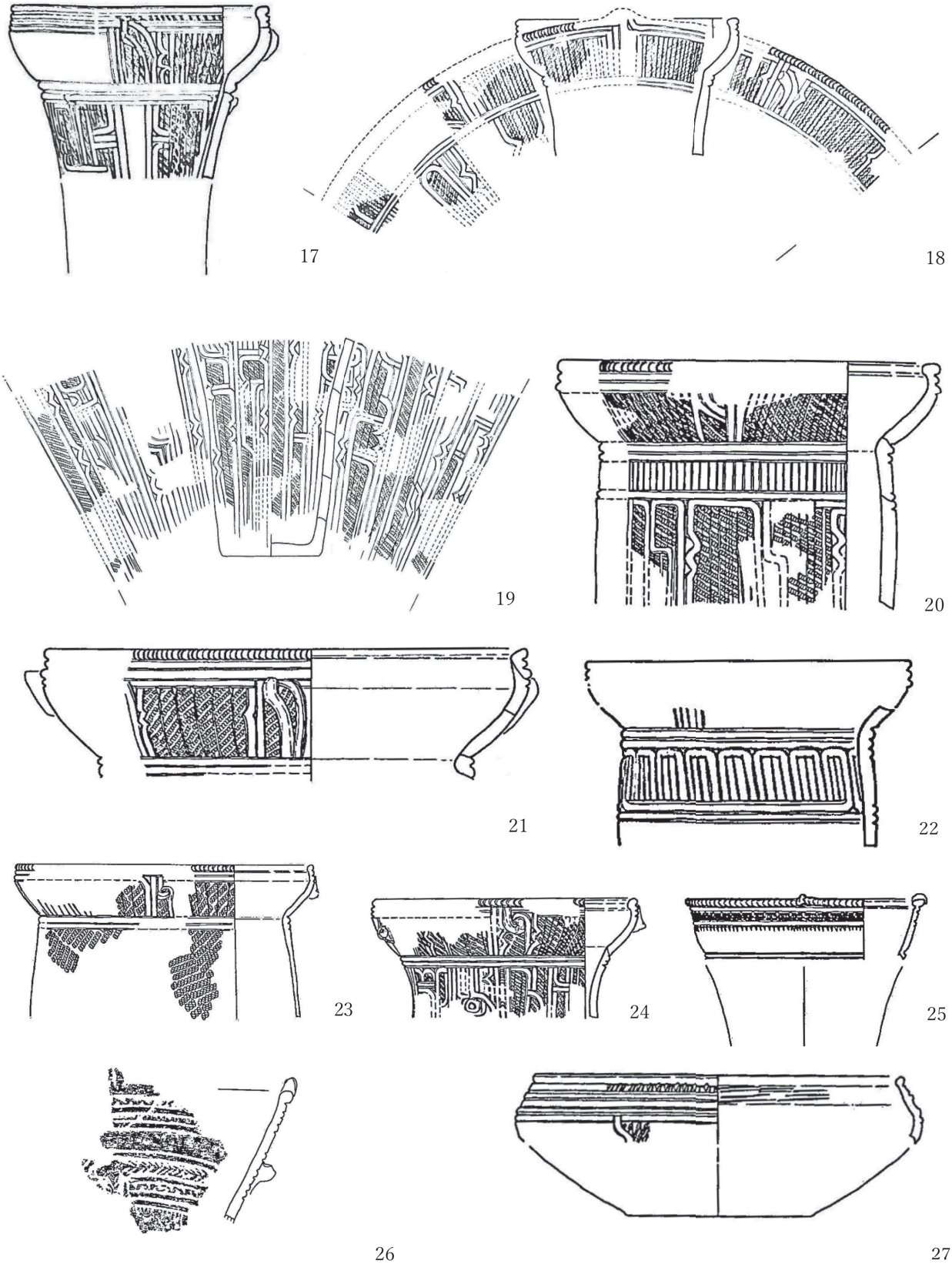


5・6：徳前C遺跡　包含層　7：富山県砺波市　厳照寺遺跡　第11号穴付近

8～14：大石遺跡　第22号住居址（8～12は五領ヶ台Ⅱ式新段階）

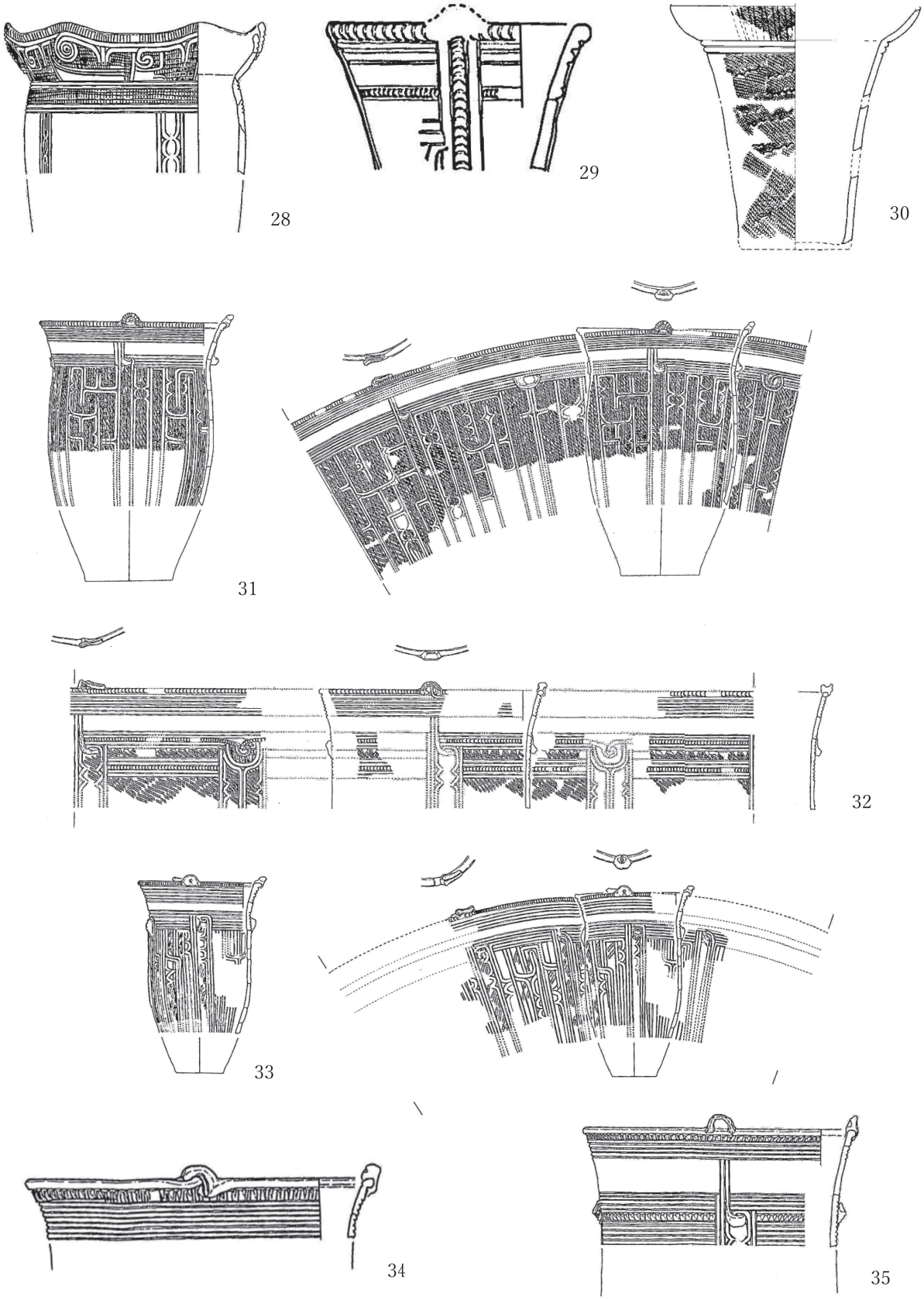
15・16：富山県富山市　長山遺跡　2層（15は五領ヶ台Ⅱ式新段階）

第4図　新崎Ⅰa式・新崎Ⅰb式



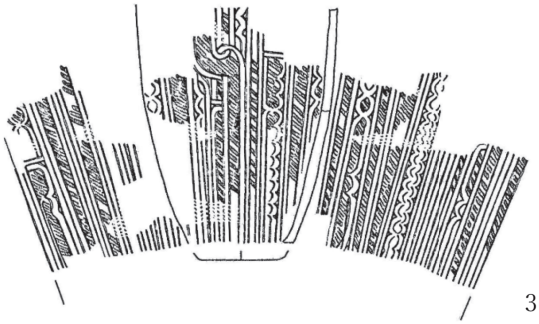
17～27：長山遺跡　2層

第5図　新崎Ⅰb式

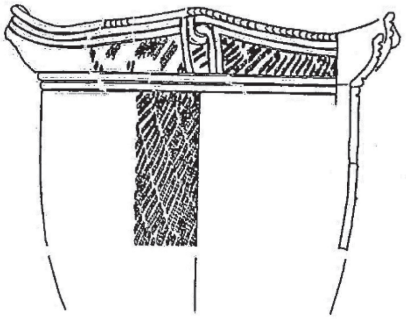


28～35：長山遺跡　２層

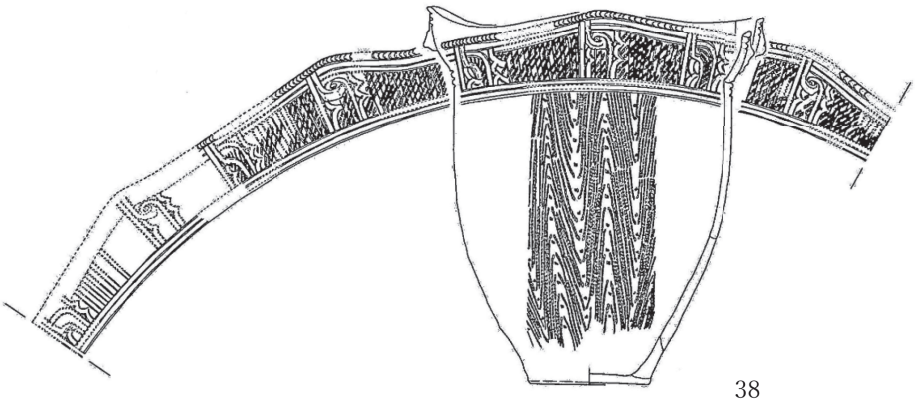
第６図　新崎Ⅰｂ式



36



37

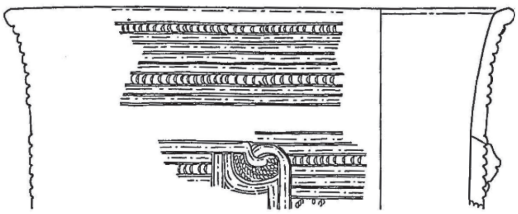


38

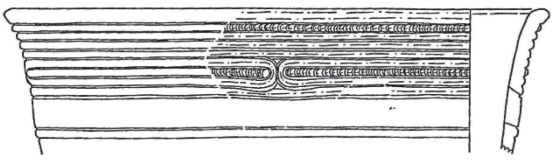
←39-1

←39-2

39



40

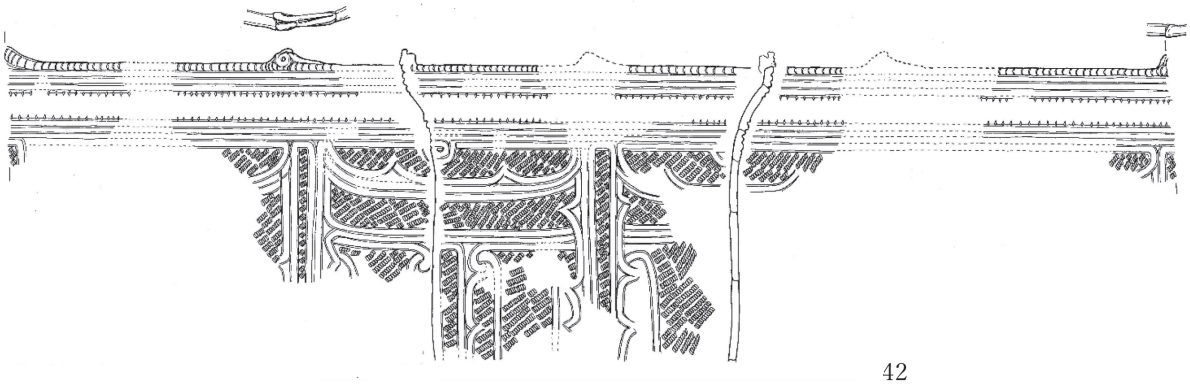


41

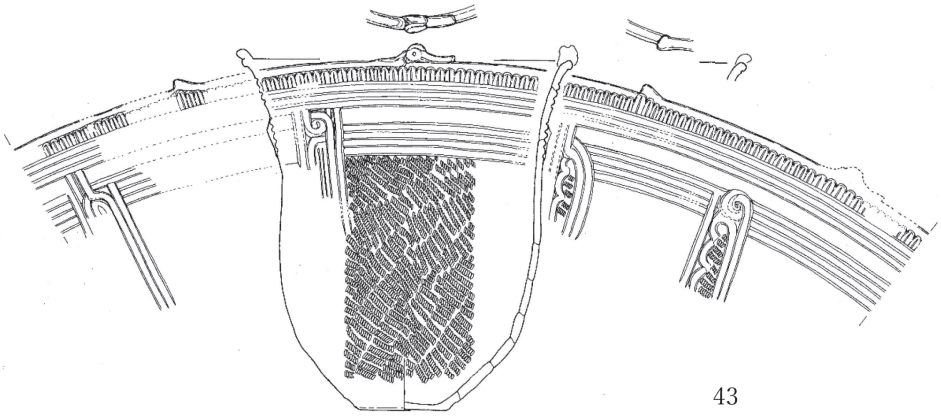
36～39：長山遺跡　2 層　　40・41：石川県鳳珠郡能登町　真脇遺跡　Ⅰ区第 17 層

第 7 図　新崎Ⅰb 式

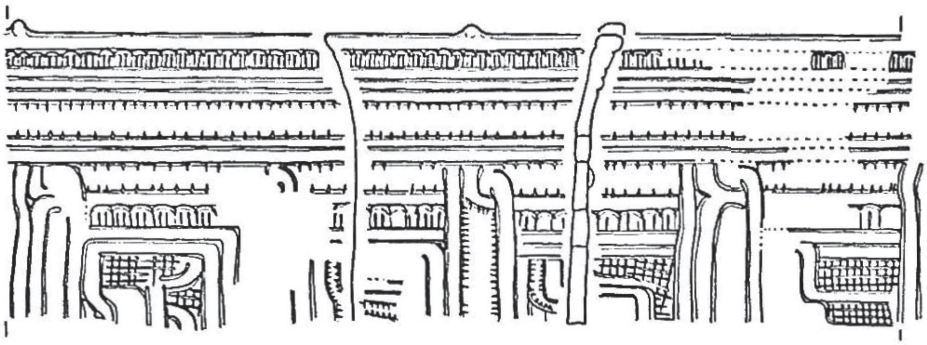
新崎Ⅱａ式



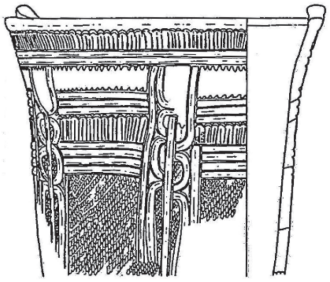
42



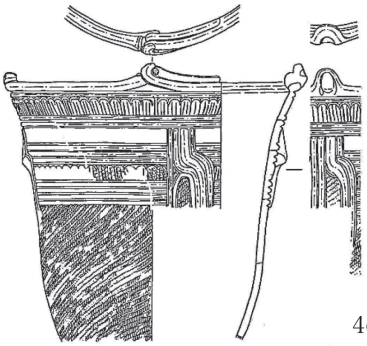
43



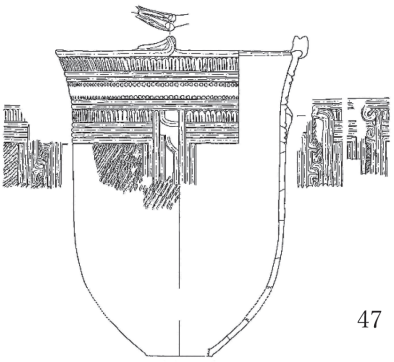
44



45



46

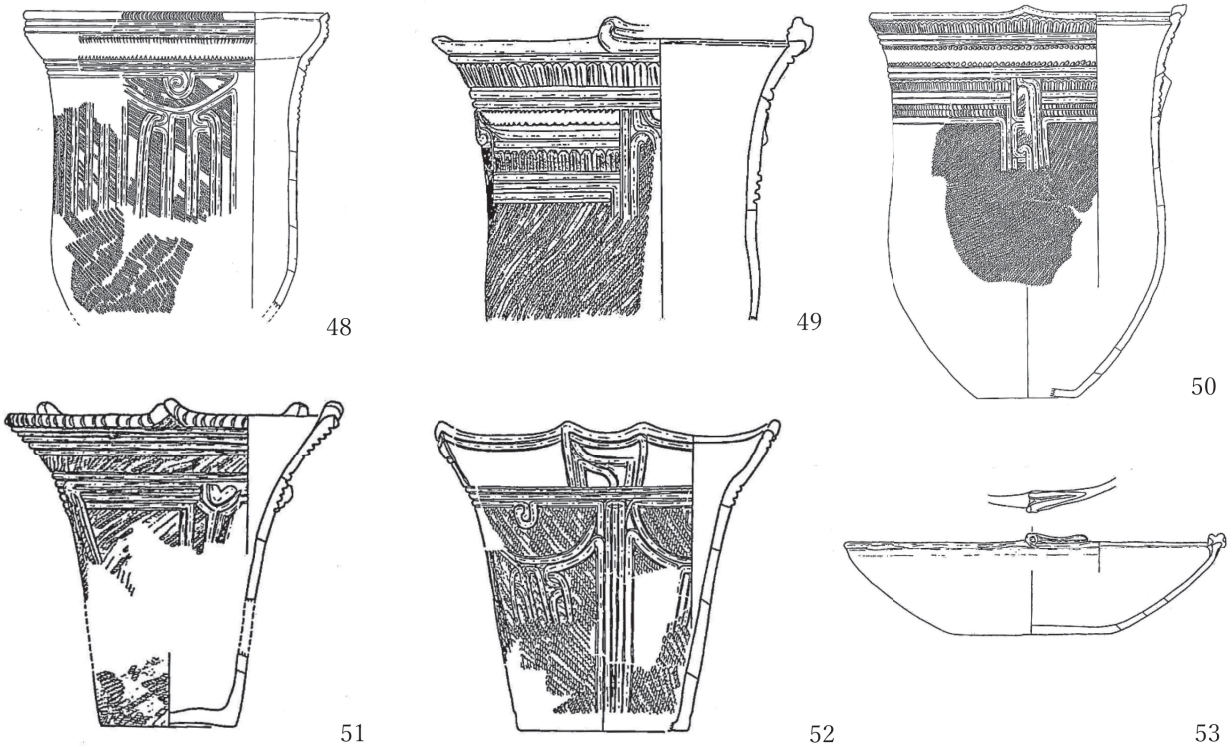


47

42～44：厳照寺遺跡　第 11 号穴

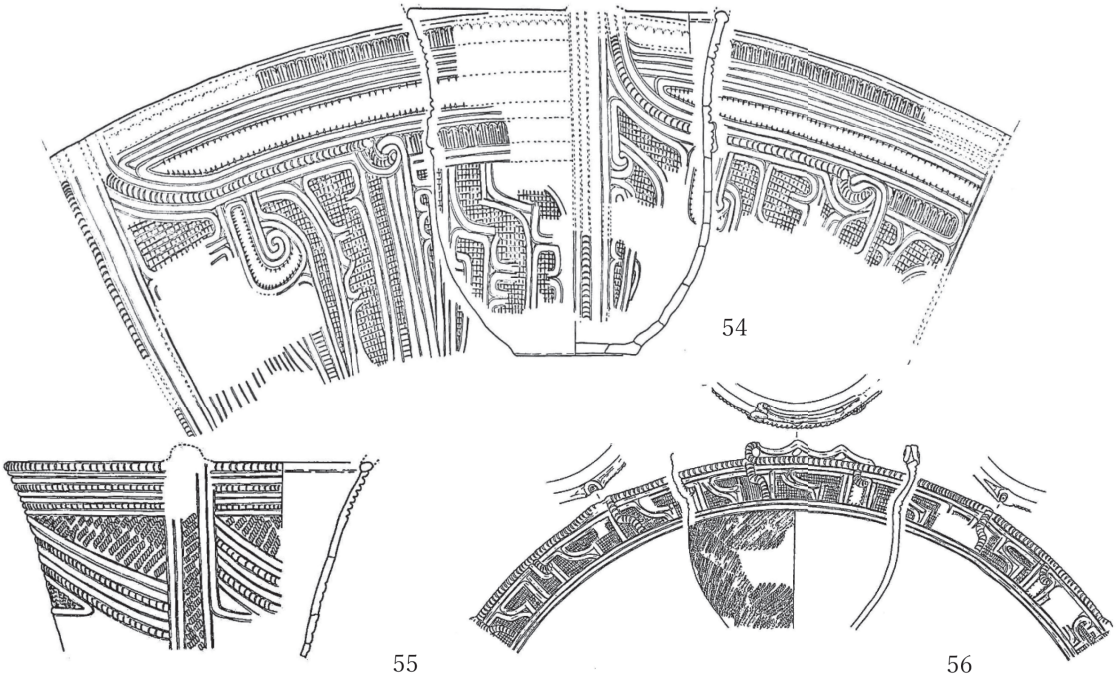
45～47：真脇遺跡　Ⅰ区第 17 層

第８図　新崎Ⅱａ式



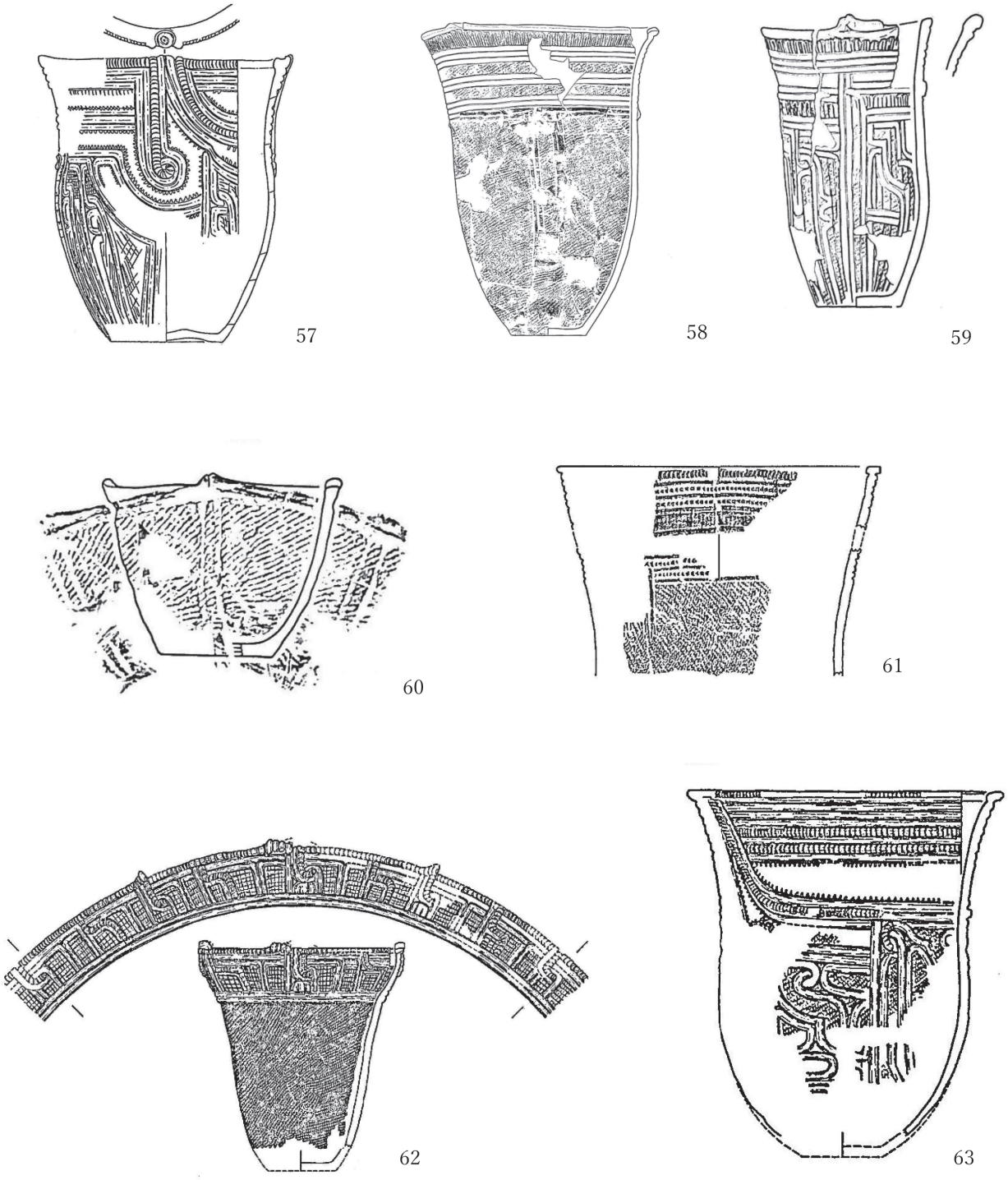
48～53：真脇遺跡　Ⅰ区第 17 層

新崎Ⅱb 式



54・55：厳照寺遺跡　第 11 号穴　56：真脇遺跡　Ⅰ区第 17 層

第 9 図　新崎Ⅱa 式・新崎Ⅱb 式

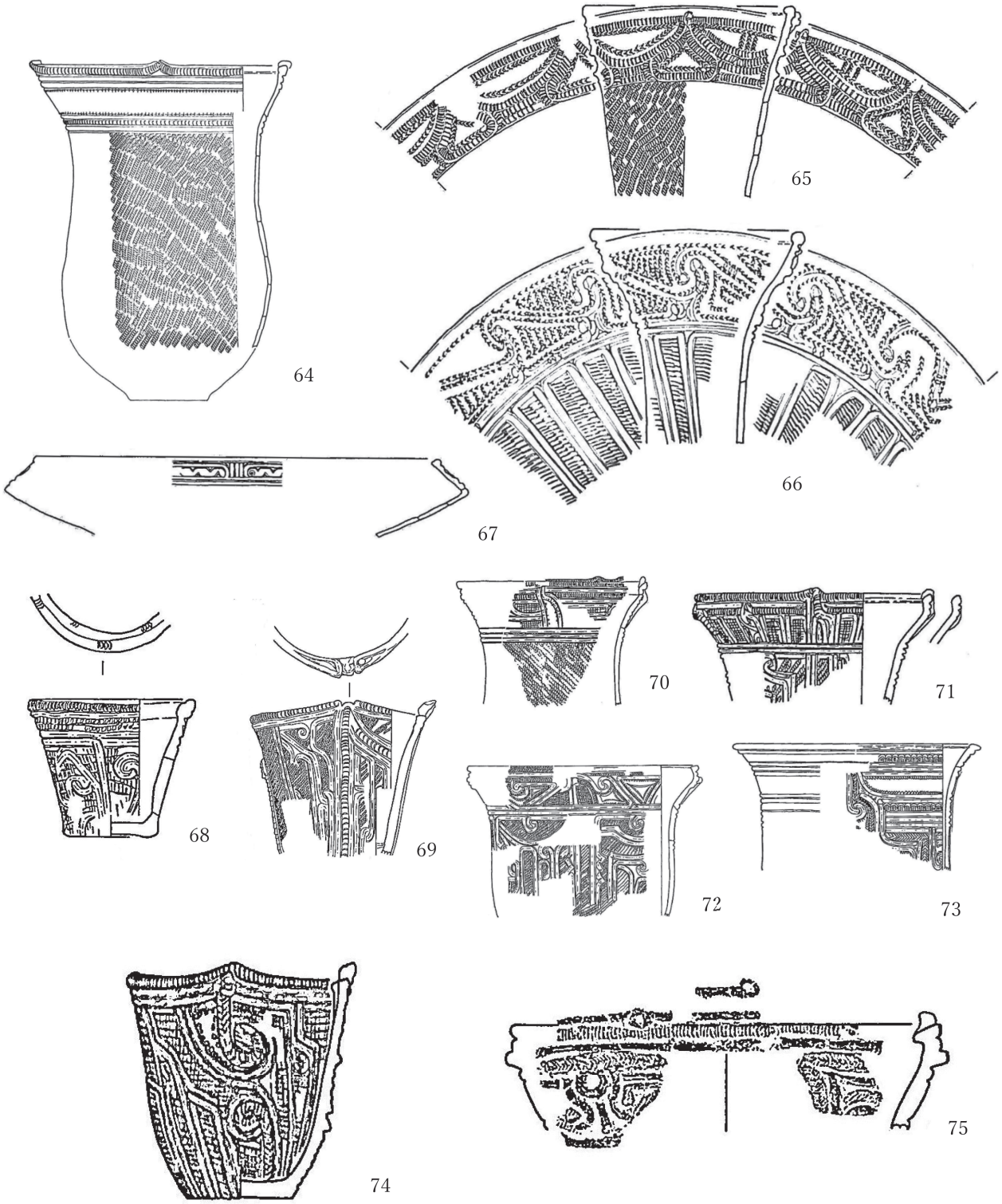


57：真脇遺跡　Ⅰ区第 17 層　58～60：新潟県糸魚川市　六反田南遺跡　32F17

61～63：富山県中新川郡上市町　永代遺跡　SI11

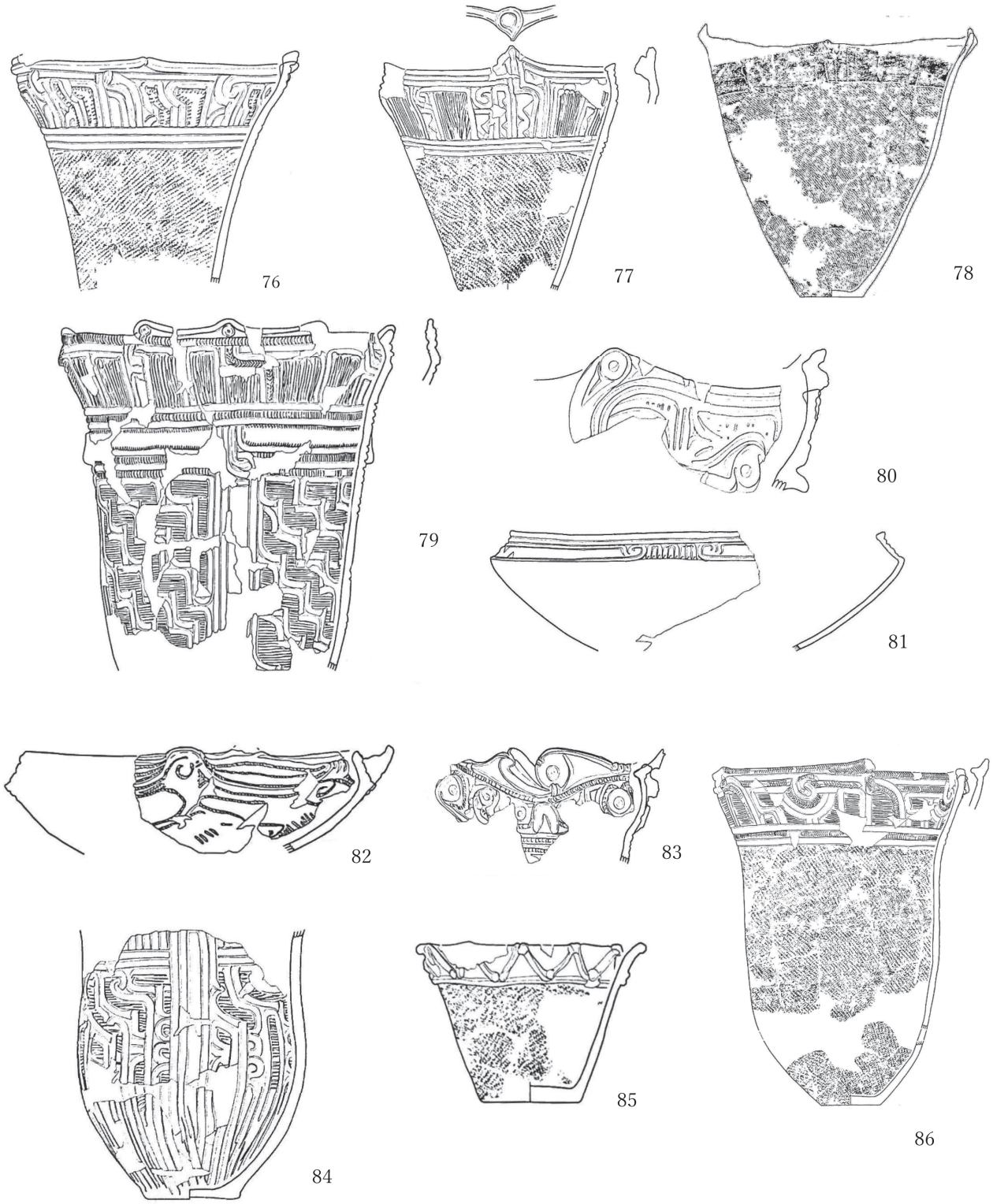
第 10 図　新崎Ⅱ b 式

新崎Ⅱｃ式



64～67：厳照寺遺跡　第４号住居跡内ピット 11（65・66 は中部高地系）68～73：真脇遺跡　Ⅰ区第 17 層
74・75：永代遺跡　SI11

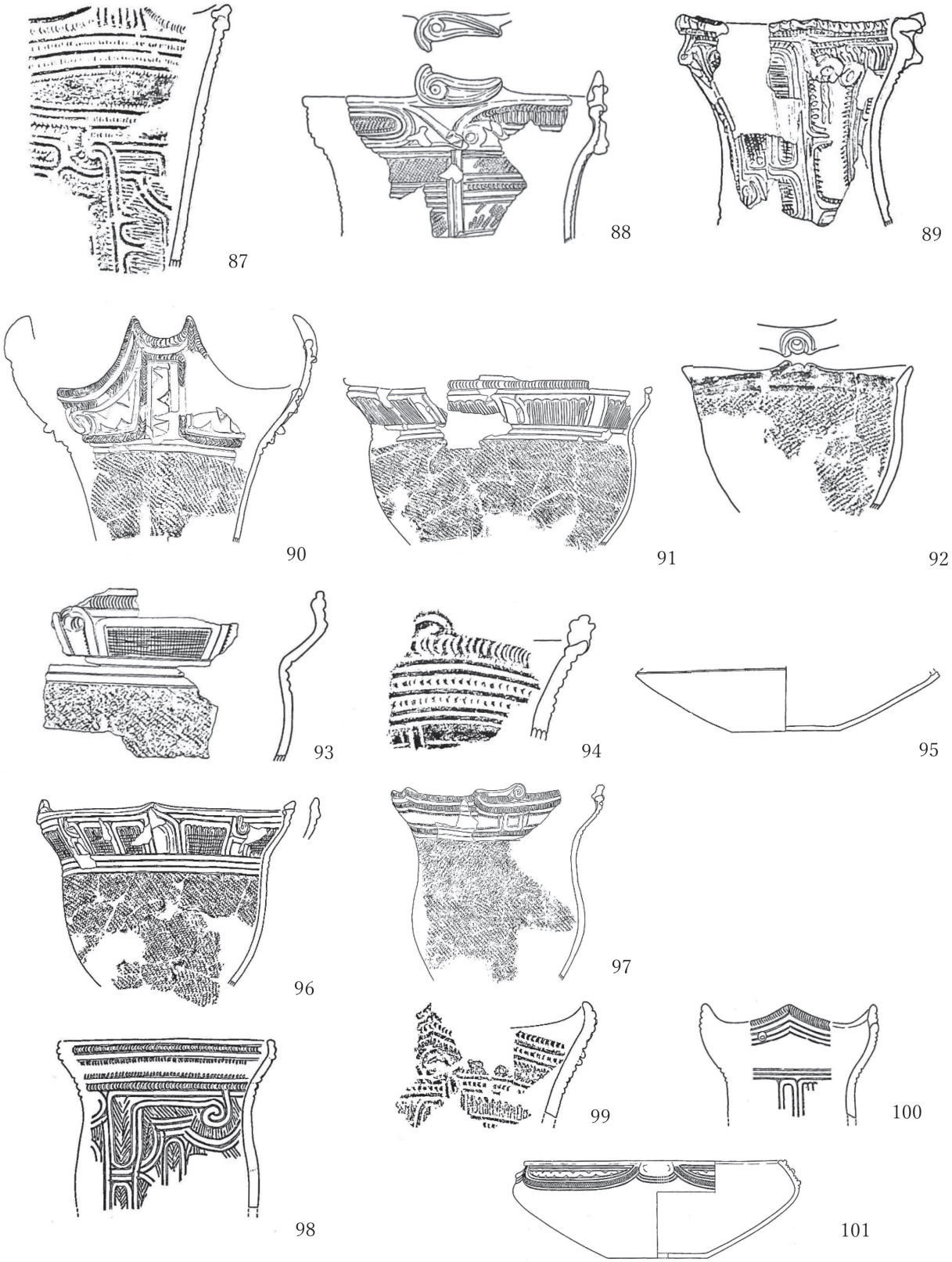
第 11 図　新崎Ⅱｃ式



76～78：六反田南遺跡 32G８　79~81：六反田南遺跡　33F11（80 は中部高地系か）

82~86：六反田南遺跡 33G16（82 は大木７b 式系、83・85 は中部高地系）

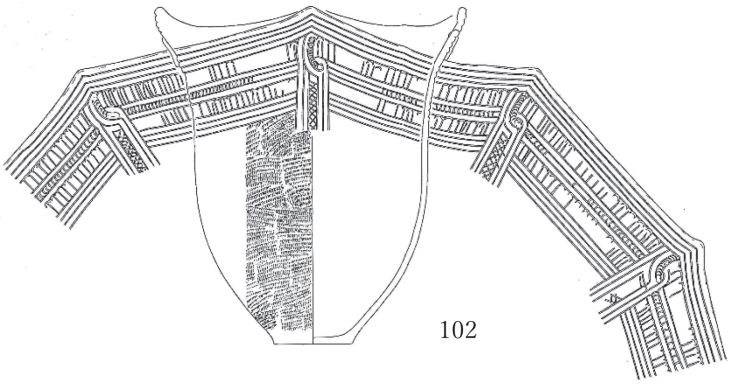
第 12 図　新崎Ⅱｃ式



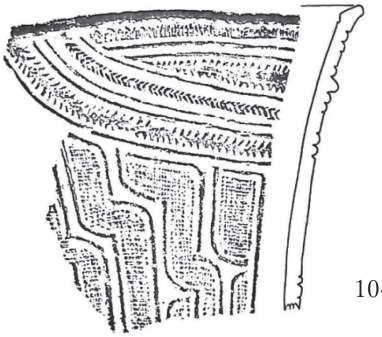
87～95：六反田南遺跡　33G21・23・25（89 は藤内Ⅰ式）　96・97：六反田南遺跡　33F17

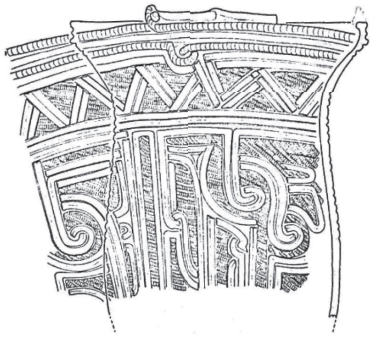
98~101：石川県小松市　念仏林遺跡　1 号住居跡中層・下層

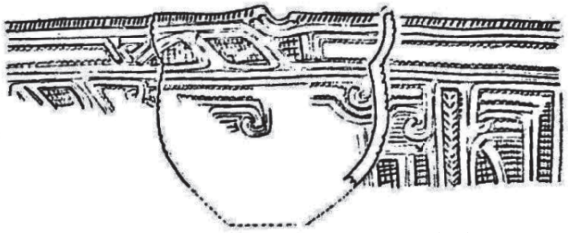
第 13 図　新崎Ⅱｃ式

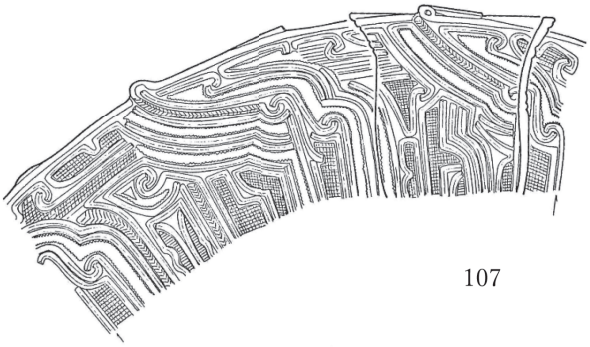

102

103

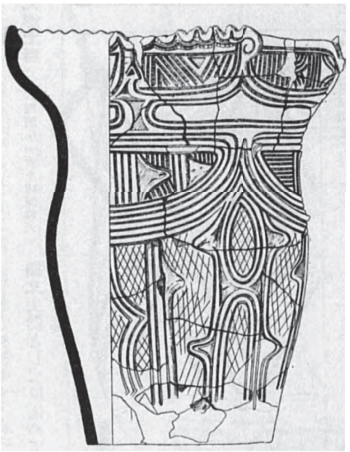

104

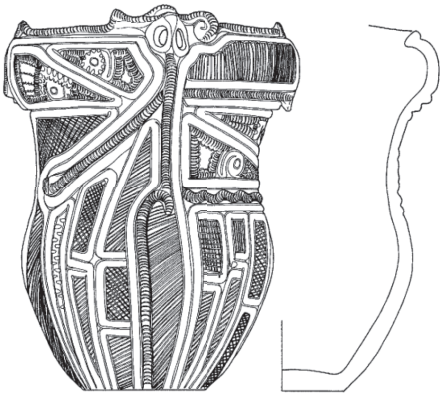

105


106


107

（参考資料）


108

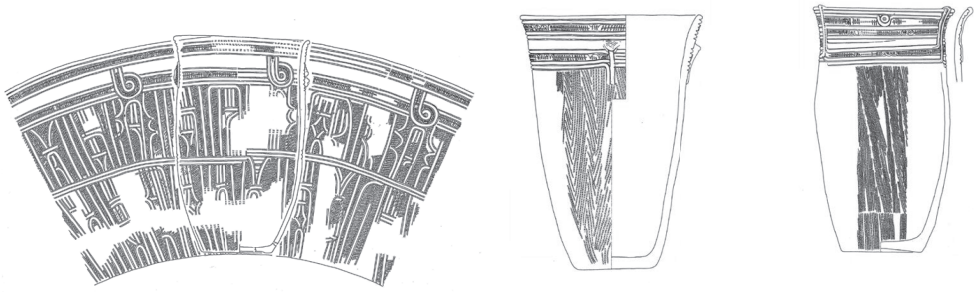
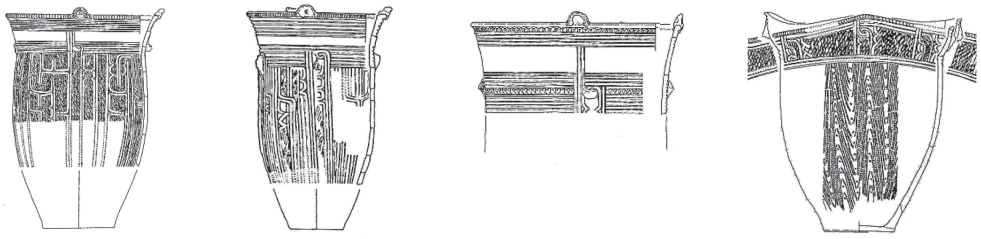
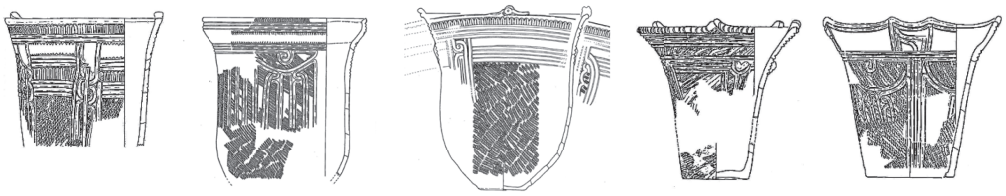
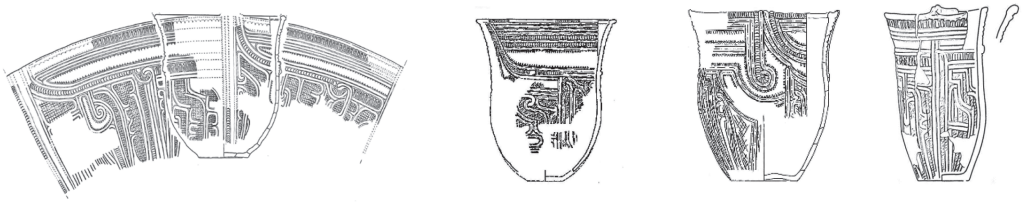
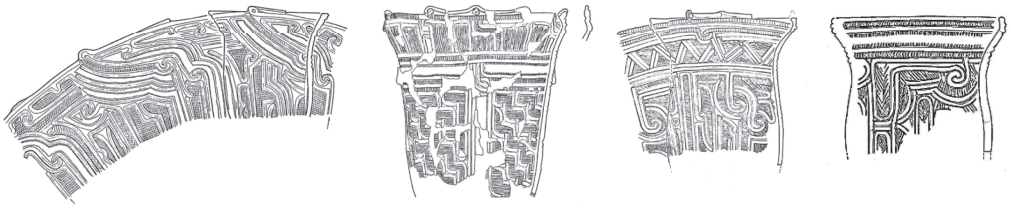

109

102・103：念仏林遺跡　1号住居跡　床面　104～107：石川県七尾市赤浦遺跡　南斜面落ち込み遺構

108：東京都八王子市　楢原遺跡　109：長野県茅野市棚畑遺跡　第119号住居址

第14図　新崎Ⅱc式・参考資料

第１表　新崎式　編年案　図表

型式	編年案
新崎Ⅰa式	 3　5　6
新崎Ⅰb式	 31　33　35　38
新崎Ⅱa式	 45　48　43　51　52
新崎Ⅱb式	 54　63　57　59
新崎Ⅱc式	 107　79　105　98

※各図版下に示す番号は掲載図版番号を表す。

※上記表では、系統や分類などは検討途中であるため考慮していない。

論文

溯航　第 39 号　31-48 頁　2021 年 2 月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

エジプト先王朝時代における硬質土器の流通

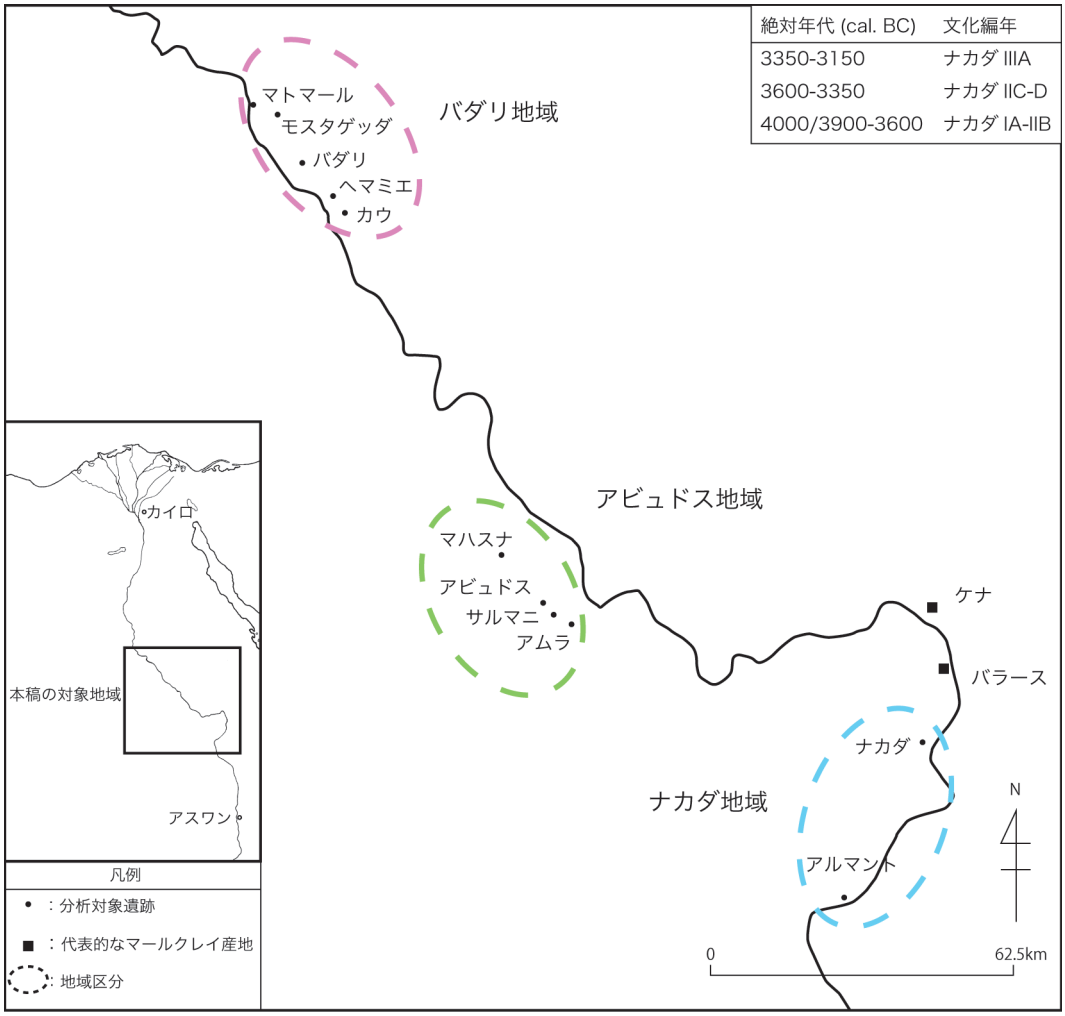
―上エジプト出土の彩文土器と波状把手付土器の再検討―

伊藤結華

要旨

エジプト先王朝時代の墓に副葬された良質な硬質土器には、彩文土器と波状把手付土器が含まれる。製作技術から当時の社会における硬質土器の革新性が論じられ、各土器の装飾の意味や出土コンテクストからは、社会的役割が考察されてきた。本稿では、既往研究から異なる役割を有していたと推測されるそれぞれの土器について、流通の様相を明らかにすることを目的として、上エジプトの墓地から出土した資料の量的分布と形態分布を分析した。ナカダIID期を画期とする、彩文土器と波状把手付土器の対照的な量的分布から、波状把手付土器の流通拠点がナカダ遺跡からアビュドス遺跡に移ったことを明らかにした。形態分布からは、彩文土器においても、ナカダ遺跡を中心に分布していた土器が大きく減少するという変化が見られた。また、既往研究では説明がなされていなかった波状把手付土器の小型化の背景について、流通に適した器形が求められたことを指摘した。

キーワード：先王朝時代、彩文土器、波状把手付土器、流通



第 1 図　対象地域

はじめに

先王朝時代（前5000～3000年頃）は古代エジプトの国家形成期にあたり、文化的側面と政治的側面から第１王朝成立に至る動態の復元が目指されている。その基盤となるのが、上エジプト[1]南部を発祥とするナカダ文化である。先王朝時代の後半、文化編年のナカダIID期頃までにこの文化がナイルデルタに到達し、地域間の文化的統合が果たされたとされる。その背景については、エリートが権力や支配機構を構築するために、外部地域との交易ルートや専業工人の掌握を通じて、奢侈品などの物品の生産（入手）・流通・消費のコントロールをすることを志向したためであるという解釈が提示されている（e. g. Köeler 2010; Stevenson 2016）。当該期の上エジプトの諸集団は、主にアビュドス、ナカダ、ヒエラコンポリスを中心とする政体へ収斂していく過程にあり（Kemp 1991; Wilkinson 2000）、競合的な集団間の関係が物質文化に影響を及ぼしたものと考えられる。

このような影響を示す器物として挙げられるのが、ナカダIIB期頃に上エジプトで生産され始めたマールクレイ胎土の硬質土器（以後、硬質土器と呼称）である。硬質土器は、ナカダIIC期にはナイルデルタからアスワン以南の下ヌビアにかけて分布しており、上エジプトを起点とする広域流通器物として捉えられてきた。そのため、他地域との長距離交易システムを検討するうえで重要視されたのである（Takamiya 2004）。しかしながら、硬質土器という単位では流通が語られる一方で、硬質土器に分類される彩文土器（Decorated pottery）と波状把手付土器（Wavy-handled pottery）が、それぞれどのような流通の様相を示すのかを主眼においた論考は極めて少ない。

以上を踏まえ、本稿ではまず、ナカダIIB期からIID期の上エジプトにおける彩文土器と波状把手付土器の量的分布と形態分布を分析する。そして、上エジプト内の地域ごとの分布状況から、２つの土器の流通の様相が異なることを明示し、その背景を論じる。

１．土器分類について

本題に入る前に、本稿で用いる「硬質土器」と既往研究の分類名称の対応関係を確認しておく。

古代エジプトの土器は、ナイル川の沖積土であるナイルシルトから製作された土器と、砂漠由来の石灰質の粘土であるマールクレイから製作された土器に大別される（Nordström and Bourriau 1993: 157）。そして、先王朝時代においても２種類の粘土から、様々な土器が製作されていた。先王朝時代の土器はF．ピートリー（Petrie）によって初めて分類が体系化され、９つのクラスに分けられた（Petrie 1921）。各クラスの分類基準は一貫性を欠いており（第１表）、問題点の議論や修正が行われているものの（Hendrickx 1996; 2006）、今でも各クラス名称はエジプト学の中で周知のものである。

また、これまで述べてきたナイルシルトとマールクレイという分類は、1980年の国際会議をきっかけに確立されたウィーンシステムによるものである（Nordström and Bourriau 1993）。ウィーンシステム確立以降の発掘報告書では、胎土と器形を上位属性とした土器分類を提示しつつ、ピートリのクラス分類が併記されている。ナイルシルトとマールクレイはそれぞれ細分されるものの、おおむね第１表のように対応することが明らかになっている（Hendrickx 2006: Table Ⅱ. 1. 2.）。本稿の分析で用いる報告書は全てピートリーのクラス分類に基づいているため、有機混和材が含まれる粗製土器を除いた波状把手付土器と彩文土器の２クラスを、マールクレイを用いて製作された先王朝時代の硬質土器とみなして議論を進めていく。

第１表　ピートリー のクラス分類

クラス名称	分類基準	胎土
黒頂土器（ClassB）	焼成技術	ナイルシルト
赤色磨研土器（Class P）	表面調整	ナイルシルト
特殊土器（Class F）	器種	主にナイルシルト
白色交線文土器（Class C）	装飾	ナイルシルト
黒色刻文土器（Class N）	装飾	ナイルシルト
彩色土器（Class D）	装飾	マールクレイ
波状把手付土器（Class W）	形態変化	マールクレイ
粗製土器（Class R）	胎土、表面調整	マールクレイ、有機混和剤
後期土器（Class L）	胎土、編年	主にマールクレイ

２．先行研究

２－１．硬質土器の出現

ナイルシルトが古代エジプトにおける土器生産開始時から使用されていたのに対し、マールクレイを用いた硬質土器の初現はナカダIIB期の彩文土器であった（Friedman 1994: 909）。マールクレイは、石灰岩盤の露呈するエスナ近郊からカイロまでのナイル川流域で採取できることがわかっており（Nordström and Borriaou 1993: 160）、上エジプトで生産が始まったと考えるのが妥当である。具体的な生産地については、製作遺構が発見されていないため、胎土分析の事例増加によって実証的に明らかにされることが期待されている（Friedman 1994: 86-87）。例えばJ．ボリオ（Borriaou）らは、ヘマミエ遺跡とアルマント遺跡出土の硬質土器が、同じ粘土

資源を用いて製作されたと解釈できるデータを提示しており（Borriaou et al. 2004）、上エジプトのある特定の地域で生産された土器が流通していた可能性が生じた。硬質土器自体が目的に据えられた分析事例がほとんど無いなかで、馬場はより具体的な硬質土器生産地の解釈を目的とし、時期別の量的分布と胎土分析を合わせた検討を行った。その結果、生産開始当初は、現代でもマールクレイの産出地として知られているケナ・バラース地域（第１図）の近郊で集約的に生産されており、その後、各地で作られるようになったという見解を示した（馬場 2013a）。

続いて、硬質土器の特徴について述べる。マールクレイの胎土は、ナイルシルトの胎土と比べて明るい色調を呈し、薄くて緻密な器壁に仕上げることができる。これらの性質が、彩色の映える土器（Wengrow 2006: 92-93）、あるいは貯蔵や運搬に耐える土器（Buchez 2011: 948）を製作するために重要であったと指摘されており、彩文土器は前者、波状把手付土器には後者の機能が該当する。また、２つの土器はほとんど墓地からしか出土しておらず、日用品ではなく主に葬送用として製作された良質な土器（fine ware）だったと考えられている（Friedman 1994: 911）。さらに、硬質土器の生産開始に伴って窯焼きが導入されたと推定されており（馬場 2013b: 180; 2016）、工芸技術の転換点[2]として位置づけられる（Hendrickx 2011: 94-95）。

２－２．彩文土器と波状把手付土器

本節では、彩文土器と波状把手付土器の概略を述べ、分布や流通に関わる先行研究についてまとめる。

（１）彩文土器

彩文土器は、赤色顔料で文様を施して焼き上げた土器である。文様の内容ついては近年G．グラフ（Graff）によって詳細な集成、分類が行われた（Graff 2009）。文様は幾何学文と形象文に大別でき、幾何学文には渦巻文、波状文、斑文、山形文、鱗状文等が含まれる。形象文は概ね、船、動植物、人物等が解釈されている。器種は、管状の把手を有する卵形壺と扁球形壺が主である。これらは石製容器と共通しており、また、頻繁に描かれる渦巻文等の幾何学文が石材の模様を模倣したものであると推定されることから、石製容器に影響を受けて成立した系統の器種であると考えられる（Payne 1993: 101）。また、ナカダIIA期ごろまで流通していた白色交線文土器と比較して、鉢などの開口器種が殆ど見られないことから、器壁が形象文を示す媒体となることが重要になっていったと推測されている（Wengrow 2006: 92-93）。

彩文土器の分布や流通については、J．アクサミット（Aksamit）が船の文様が施された土器を観察し、アビュドスからナカダにかけて位置するいくつかの工房で製作されたとする説を提示したほかは（Aksamit 1992）、文様や器種の画一性を記述レベルで指摘したものに留まる。その中で、彩文土器の生産と流通に焦点を当てた研究を行ったのが、J．コックス（Cox）である（Cox 2015; 2020）。コックスは、ナカダII期からIII期までの彩文土器を網羅的に扱い、文様と器種を整理したうえで分布状況を分析し、生産の中心地を抽出することを試みた。その結果、ナカダⅡ期には、幾何文が施された土器が上エジプト内の各地域で生産されていた可能性が高いこと、一方、形象文の土器は主にアビュドス地域で生産され、船の文様が施された土器は特にナカダ遺跡で生産された可能性が高いことを指摘している（Cox 2020）。氏によって、初めて彩文土器の分布状況が定量的に把握されたことは重要である。

（２）波状把手付土器

波状把手付土器は、肩部または胴部に水平に付けられた波状の把手が特徴である。器種は閉口壺に限られる。把手の痕跡器官化と器形の円筒形化という明瞭な形態変化が看取されるため、ピートリー以来（Petrie 1901）、見直しがなされながらもナカダ文化の編年の軸となっている（Hendrickx 2006: Table II. 1. 5.）。ピートリーが初期段階に当たるとした器形は、胎土分析により南レヴァント産であったことが判明しており（Payne 1993: 97-98, 130-133）、類似する器形の土器が南レヴァントを中心に確認されていることから（Amiran 1969）、波状把手付土器は搬入土器を模倣して製作が開始されたと考えられる。プロトタイプの土器は、上エジプトではナカダIIC期より出土するようになるが（Hendrickx and Bavay 2002: 67-69）、オイルやワインを納めて搬入された容器だったと考えられている（Ben-Tor 1992: 84）。ナカダIIC期のうちに上エジプトで生産が開始された波状把手付土器にも、液体物が納められていたことが推測される。実際に液体が入れられていたことを示す残滓の例は少ないが、パーム油が入れられていたという報告がある（Petrie and Quibell 1896:15）。

波状把手付土器は、ピートリーのナカダ遺跡の報告以来（Petrie 1896）、上エジプト南部では墓壙面積の広い墓に集中して出土する傾向が指摘されている（e. g. Bard 1994: 103-104）。高宮は、波状把手付土器を先王朝時代のステイタスシンボルの一つとして捉え（Takamiya 2003）、希少な外来品の模倣品として、生産・流通にはエリートによる制御が働いていたことを示唆している（高宮 2006: 202-205）。また、副葬土器の地域性を検

討したC．ケーラー（Köhler）は、ナカダIIC期土器の分布を全クラス対象に分析し、波状把手付土器の特定の器形がマトマール遺跡からヒエラコンポリス遺跡まで分布していることを明らかにした（Köhler 2014: 160-161）。

２－３．先行研究の問題点と本稿の目的

本節では先行研究の問題点を挙げ、それを踏まえた本稿の目的を提示する。上述の通り、彩文土器と波状把手付土器は、土器製作技術の研究によって「硬質土器」という枠組みが与えられ、出現時における革新性が明らかにされてきた。また、彩文土器は形象文の象徴性、波状把手付土器は墓地における偏在傾向や墓壙面積に基づく階層的保有状況、あるいは模倣土器としての側面から社会的役割が検討されてきたのである。しかし、それらは副葬、すなわち消費の段階における議論に終始しているという問題点が挙げられる。つまり、各地の集団が競合関係にあったとされる上エジプトでなぜ硬質土器生産が開始されたのか、という問題意識が欠落しているのである。彩文土器と波状把手付土器が既往研究で指摘されてきたような社会的役割を有しているのならば、流通の様相としてどの様な差異が現れるのか明らかにする必要がある。

そこで本稿では、まずナカダIIB期からIID期の上エジプト内の各遺跡における彩文土器と波状把手付土器の、量的分布と形態分布を時期ごとに分析して分布状況を提示する。そして、各遺跡でそれぞれどのような土器が供給されていたのか検討し、流通システムの一端を示したい。

３．対象遺跡・資料と分析方法

本稿で対象とする遺跡は、マトマール遺跡（Brunton 1948）、モスタゲッダ遺跡（Brunton 1937）、バダリ遺跡（Brunton & Caton-Thompson 1928）、ヘマミエ遺跡（Brunton & Caton-Thompson 1928）、カウ遺跡（Brunton & Caton-Thompson 1928）、マハスナ遺跡（Ayrton & Loat 1911）、アビュドス遺跡（Naville, Peet, Hall & Haddon 1914; Peet 1914; Frankfort 1930）、サルマニ遺跡（Sayed 1979）、アムラ遺跡（Randall-McIver & Mace 1902）、ナカダ遺跡（Petrie & Quibell 1896; Baumgartel 1970）、アルマント遺跡（Mond & Myers 1937）である（第１図）。地域区分は第１図に示したとおり、バダリ地域、アビュドス地域、ナカダ地域の３つに分ける。

対象とする遺物は彩文土器と波状把手付土器である。先に示した各遺跡の報告書と、ヘンドリックスの集成（Hendrickx 1989）からデータを抽出し、ナカダIIB期からIID 期に比定される墓から出土した土器を分析の対象とする（第１表）。各墓出土の土器の情報としては、ほとんどの場合、ピートリーの分類番号のみが報告書に記載されているという状況である。よって、分析に先立って、ピートリーの分類を解体して過度な細分[(3)]を統合した形態分類を行う。遺跡ごとに構成墓数ないし報告墓数に偏りがあるため、１）出土点数だけではなく副葬土器組成中の割合を算出して、遺跡間の相対的な数量比較を行う。次に、２）各遺跡における形態と地域ごとの傾向を分析し、これらの結果をふまえて、時期的変遷をまとめる。

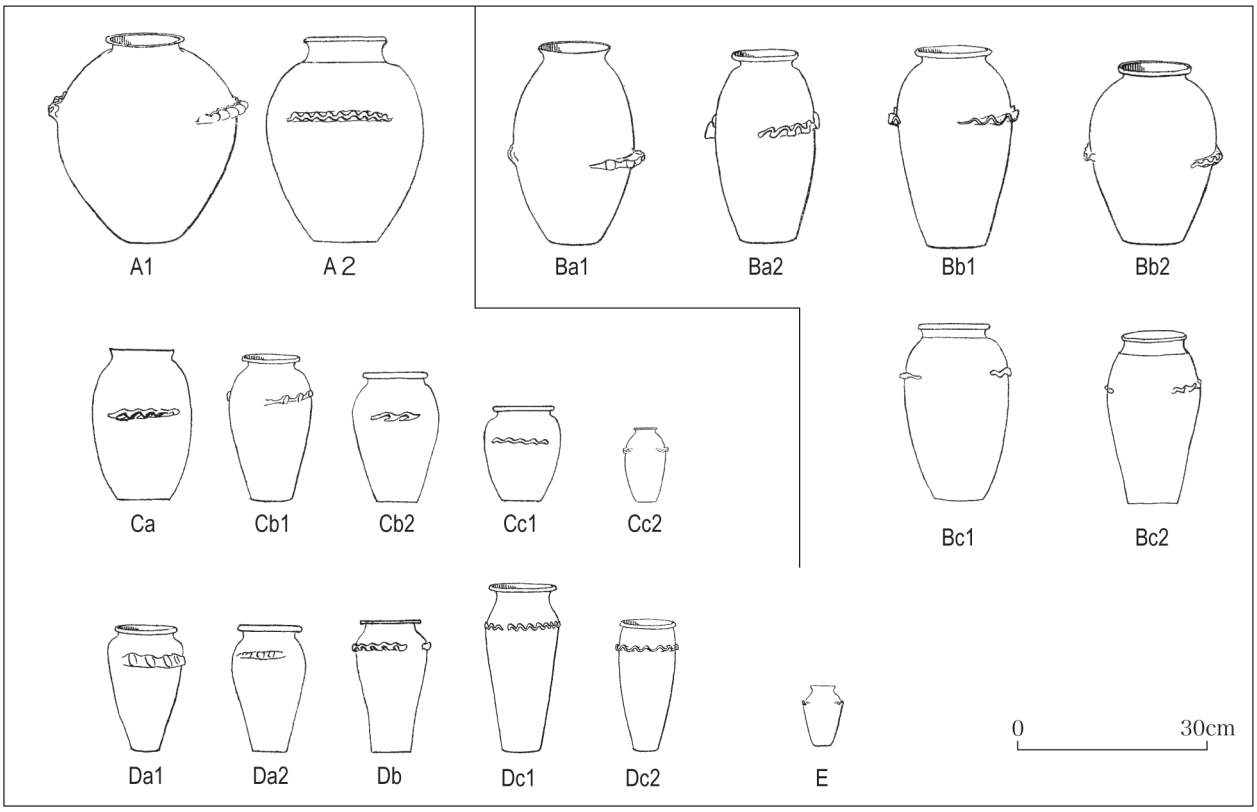
彩文土器について、ピートリーは一部特殊な器種を彩文土器に分類しているが、数が限られているため対象外とし、把手の有無を上位属性として７器種に分類した（第３図）。波状把手付土器に彩文が施されているものを、彩文土器としてカウントしたことを断っておく。文様は幾何学文、形象文、船形文、無文に大別し、以後、器種を数字、文様を括弧付で表現する。例えば、幾何学文が施された有頸壺であれば「４（幾何学文）」となる。幾何学文は、渦巻状文、波状文、鱗状文、斑状文、山形文、水玉文、格子状文を指す（第４図）。本稿では文様の象徴的意味には踏み込まないが、形象文の中でも37点出土しており、かつ、ナカダ遺跡における集約的

第２表　分析対象墓

遺跡名		マトマール			モスタゲッダ		バダリ		ヘマミエ	カウ	
墓地名		2600-2700墓地	3000-3100墓地	5100墓地	200墓地	600-1800/11700墓地	3600-3900墓地	4600墓地	1500-2000/3100-3300	000/100墓地	200墓地
推定墓地使用期間		IC-IIC	IB-IID2	IIA-IIIA1	IIC-IID2	IB-IIIA1	IC-IIIA2	IIC-IID2	IC-IIIA1	IC-IID2	IIC-IIIA2
墓数	IIB	65			8		7		2	6	
	IIC	40			41		38		11	9	
	IID	17			40		38		8	10	
	計	180			95		95		26	30	

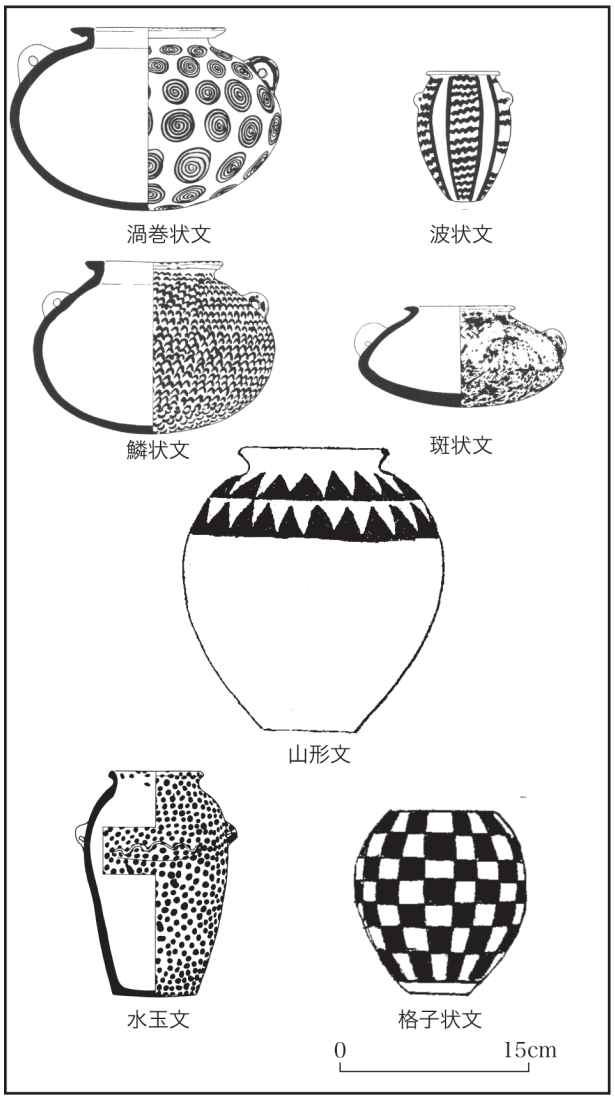
マハスナ	アビュドス				サルマニ	アムラ		ナカダ			アルマント	
H墓地	X墓地	U墓地	E墓地	1600-1700墓地	S墓地	A墓地	B墓地	大墓地	T墓地	B墓地	1300墓地	1400-1500墓地
IB-IIIA2	IID1-IIIB	IA-IIA	IB-IIIA2	IIC-IID2	IIA-IID2	IB-IID1	IA-IIIB	IA-IIIB	IIC-IIIB	IC-IIIA2	IIC-IIIA2	IC-IIIA1
8	2				22	18		90			27	
12	4				39	23		148			42	
16	33				37	25		117			34	
65	53				100	93		502			157	

な生産が想定されている船の文様だけは個別に抽出し（第５図）、分布傾向を分析する。また、管状把手付扁球形壺にのみ存在する無文の個体については、この器種が石製容器の模倣によって成立した系統であることから、あえて彩色を施さなかった可能性を考慮して分析対象に含めることにした。

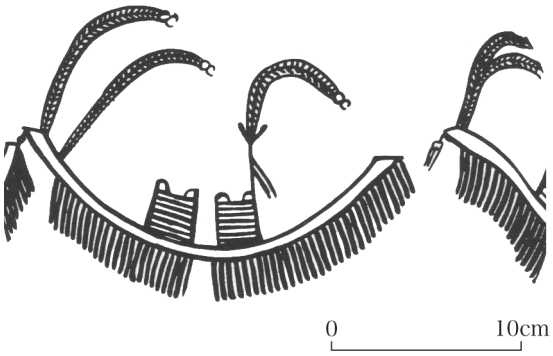


第２図　波状把手付土器の分類

第３図　彩文土器の分類



第４図　幾何学文の分類



第５図　船形文様

〈波状把手付土器の形態分類〉（第２図）

A類:球形壺

A1:胴部が大きく張り出すもの。

A2:肩部に稜をもつもの。

B類:長胴壺

Ba1:胴部がやや張り出すもの。

Ba2:折り返し口縁を有するもの。

Bb1:肩部が張り出すもの。

Bb2:肩部が大きく張り出すもの。

Bc1:肩部がやや張り出し、稜をもつもの。

Bc2:1 と比べて、底部に向かって窄まるもの。

C類:中胴壺

Ca:胴部がやや張り出すもの。

Cb1:肩部がやや張り出すもの。

Cb2: 1 より把手が短いもの。

Cc1:胴部が短く、肩部が張り出すもの。

Cc2:小型で、胴部がやや張り出すもの。

D類:半円筒形壺

Da1:肩部が屈曲するもの。

Da2:肩部が張り、丸みを帯びているもの。

Db:肩部が張り、底部に向かって窄まるもの。

Dc1:頸部が長いもの。

Dc2:頸部と肩部の境が消失したもの。

E類:ミニチュア壺

４．分析結果

４－１．量的分布

結果を示すグラフは、南に位置する遺跡から配列している。以下、時期ごとの結果を彩文土器から述べる。

〈彩文土器〉

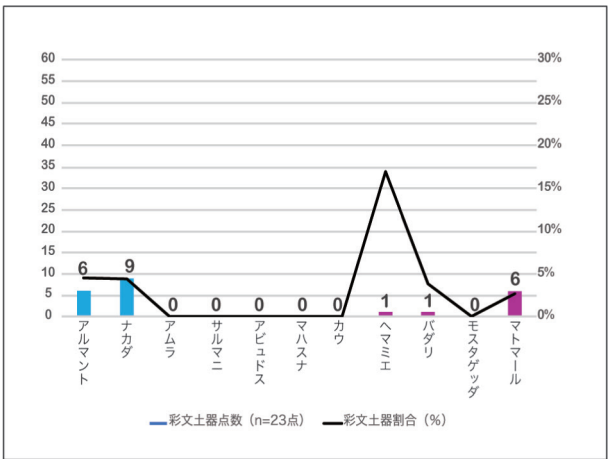
彩文土器は先述の通り初現がナカダIIC期以前と考えられているので、IIB期からを分析対象とした。

・ナカダII B期（第６図）

５遺跡から出土しており、ナカダ地域の15基、バダリ地域の８基から合計で23点である。

ナカダ地域は、アルマント遺跡で６点、ナカダ遺跡で９点出土しており、分布の中心であると言えよう。アビュドス地域から当該期の資料と判断されるものはなく、バダリ地域もマトマール遺跡の６点を除けば、１点のみと少数である。出土墓１基あたりの数は、全遺跡で１点ずつである。

割合で見ると、ヘマミエ遺跡が17%と突出しているように見えるが、これは墓を２基しか取り上げていないことが原因と考えられる。他の遺跡をみると、ナカダ地域は4.5%前後で並び、バダリ地域はバダリ遺跡が3.8%、マトマール遺跡が2.7%と大きな差は生じていない。

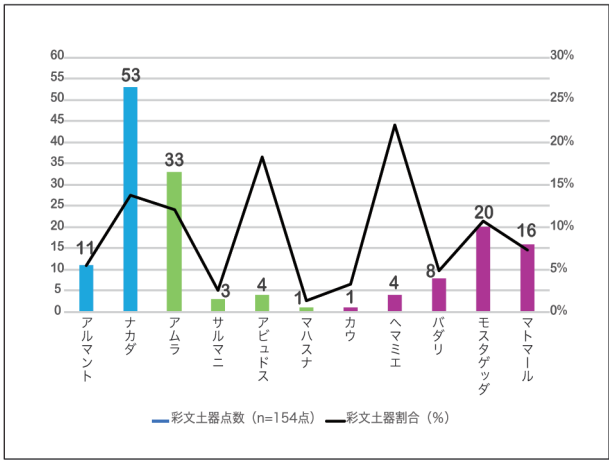


第６図　ナカダ IIB 期の彩文土器

・ナカダIIC期（第７図）

11遺跡から出土しており、ナカダ地域の56基、アビュドス地域の24基、バダリ地域の46基から合計で154点である。出土点数はナカダ遺跡で53点と全体の約３分の１を占めている。次いで、アムラ遺跡で33点出土しており、２遺跡だけで全体の半数以上となる。また、アムラ遺跡以外で目立った増加がないアビュドス地域に対し、バダリ地域では、モスタゲッダで20点、マトマール遺跡で16点、バダリ遺跡で８点が出土している。出土墓１基あたりの点数は、アムラ遺跡（約1.9点）以外では約１～1.3個と横並びである。

割合では、アビュドス遺跡とヘマミエ遺跡が突出しているように見える。アビュドス遺跡は４基中３基、ヘマミエ遺跡は８基中４基で彩文土器が確認されているため、墓数の少なさが要因とは言いきれない。この２遺跡を除けば、出土量の多寡と割合の高低は相関していることが認められる。

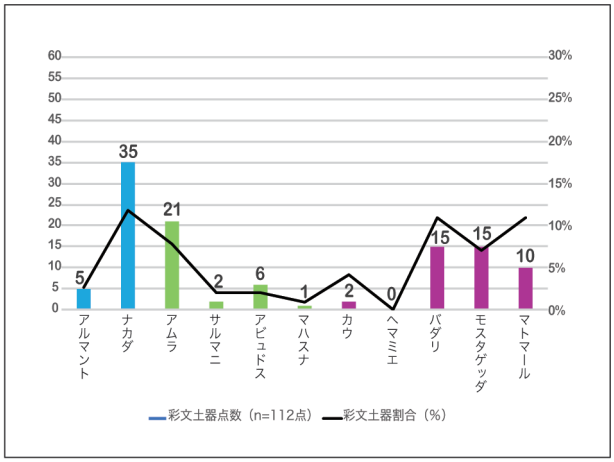


第７図　ナカダ IIC 期の彩文土器

・ナカダIID期（第８図）

10遺跡から出土しており、ナカダ地域の33基、アビュドス地域の21基、バダリ地域の36基から合計で112点である。出土点数は、引き続きナカダ遺跡が最多で35点、次いでアムラ遺跡が21点となっているが、この２遺跡の出土点数が大きく減少したことで、遺跡間の差が小さくなったように見えている。出土墓１基あたりの点数は、アムラ遺跡1.75点、マトマール遺跡約1.4点、ナカダ遺跡1.25点、バダリ遺跡約1.2点となっている。よって、IIC期と比較すると遺跡間の差が小さくなっていると言える。

割合は、前時期までのような遺跡間での乱高下は見られなくなり、概ね出土数との相関があると言える。サルマニ遺跡からヘマミエ遺跡までが一様に低い割合であるとは注目すべきである。



第８図　ナカダ IID 期の彩文土器

ここまでの結果から、以下の４点が指摘できる。

①ナカダ遺跡とアムラ遺跡が分布の中心であり続けた。

②アムラ遺跡を除いて、複数を副葬する傾向は弱い。アムラ遺跡においても、IIC-D期にかけてその傾向が弱まっていく。

③出土量と割合に相関関係が認められる。

④IIB-IID期を通じて、サルマニ遺跡からカウ遺跡における出土点数が少ない。

続いて、波状把手付土器の分析結果を述べていく。

〈波状把手付土器〉

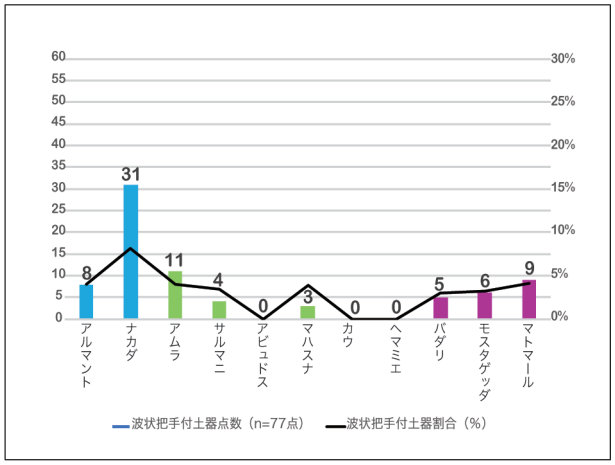
・ナカダIIC期

８遺跡から出土しており、ナカダ地域の27基、アビュドス地域の12基、バダリ地域の19基から合計で77点である。出土点数はナカダ遺跡で31点と最も多く、アムラ遺跡が11点とアビュドス地域の中では突出している。サルマニ遺跡では４点、マハスナ遺跡では３点であった。

アルマント遺跡とバダリ地域の諸遺跡では５点から９点と、概ね並んでいる。なお、墓数が少ないアビュドス遺跡、カウ遺跡、ヘマミエ遺跡から当該期の資料と判断されるものはなかった。

出土墓１基あたりの点数は、多い遺跡から順に、アムラ遺跡（2.2点）、ナカダ遺跡（約1.5点）、アルマント遺跡（約1.3点）である。サルマニ遺跡と、バダリ遺跡（1.25点）を除くバダリ地域の遺跡は１点ずつだった。

割合では、ナカダ遺跡が8.1%と最も高かった。他の８遺跡では、出土点数や墓数にかかわらず３%から4.1%の間に収まっており、相対的には一様な分布状況であると判断できる。



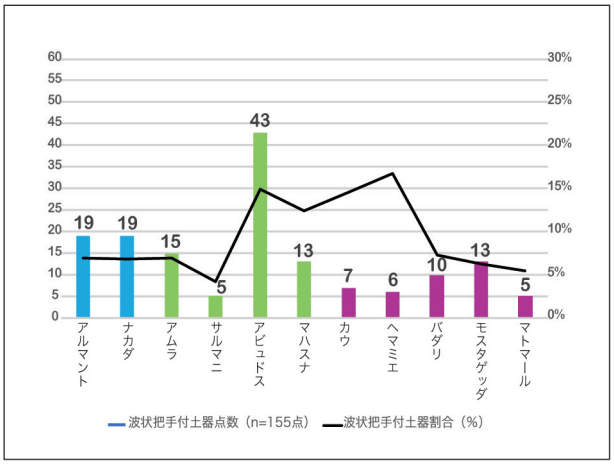
第９図　ナカダ IIC 期の波状把手付土器

・ナカダIID期（第10図）

11遺跡から出土しており、ナカダ地域の29基、アビュドス地域の34基、バダリ地域の36基から合計で155点である。出土点数はアビュドス遺跡で43点と最も多い。前時期と比べて墓数が増えていることを考慮しても、大規模墓地を抱えるナカダ遺跡を超えて最多であることは、特筆すべき点である。ナカダ遺跡は19点で、アルマント遺跡と同数であった。アビュドス地域では、アムラ遺跡で15点、マハスナ遺跡で13点だが、サルマニ遺跡の５点は墓数と比しても少ない。バダリ地域では出土遺跡数が増加し、出土点数は増加傾向にある。

出土墓１基あたりの点数は、マハスナ遺跡（2.6点）とアビュドス遺跡（約2.3点）が特に多く、カウ遺跡（1.75点）、アルマント遺跡（約1.5点）、アムラ遺跡（約1.4点）と続く。ナカダ遺跡（約1.2点）は大きく数を減らしたわけではないが、アビュドス地域の遺跡との差が開き、バダリ地域の遺跡との差は小さくなった。

割合は、アビュドス地域のアビュドス遺跡とマハスナ遺跡、バダリ地域のヘマミエ遺跡とカウ遺跡で高まりが認められる。サルマニ遺跡は4.2%、マトマール遺跡は5.5%と、出土点数同様に値がやや下がるが、その他の遺跡では７%前後と一様である。



第 10 図　ナカダ IID 期の波状把手付土器

ここまでの結果から、以下の３点が指摘できる。

①IIC期からIID期にかけて、波状把手付土器の出土点数が増加し、出土墓数が拡大した。

②アビュドス地域において複数点副葬される傾向が強まった。

③ナカダ遺跡の優位性が消失し、アビュドス遺跡が分布の主体となった。

４－２．形態分布

結果を示す表は、南に位置する遺跡から配列している。

〈彩文土器（第３表）〉

・ナカダIIB期

器形は管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺の2種類のみである。これらは石製品と共通する器形である。形象文が施された土器は確認されていない。幾何学文の内訳は、渦巻状文８点、波状文４点、斑状文３点、鱗状文１点、格子状文１点である。管状把手付扁球形壺（６無文）も２点出土している。

・ナカダIIC期

６器種が確認されている。その中で、船形文が施されている土器は、ナカダ地域から18点、アビュドス地域から９点、バダリ地域から４点出土している。アビュドス地域の彩文土器点数はバダリ地域よりも少ないことを考慮すると、ナカダ地域から離れるほど、船形文の土器が減少していることが読み取れる。遺跡ごとに彩文土器の総出土点数をみると、ナカダ遺跡から18点、アムラ遺跡から７点となっており、この２遺跡が分布の中心で

あると言える。

また、各遺跡で最も出土点数が多いのが管状把手付扁球形壺（６幾何学）である。続いて、ナカダ遺跡以外の遺跡では、管状把手付卵形壺（５幾何学）の出土点数が多い。これらは、IIB期からの傾向を引き継いでいる。新たに登場した器種は、波状把手付壺、穿孔突起付壺、有頸壺、双卵形壺の４種類だが、どれもナカダ遺跡とアムラ遺跡からは出土している一方で、バダリ地域の遺跡からは１点出土するかどうかという頻度である。管状把手付扁球形壺（６無文）はバダリ地域でしか見られなかった。

幾何学文の割合は第11図の通りである。渦巻状文、波状文、斑状文、鱗状文の順になることは前時期から変わらず、山形文が増加した。特に点数が多い渦巻状文は、管状把手付扁球形壺が32点、管状把手付卵形壺が９点である。また、波状文は管状把手付扁球形壺が14点、管状把手付卵形壺が19点で、波状把手付壺と有頸壺にも含まれる。

・ナカダIID期

７器種が確認されている。船形文が施された土器は２点のみとなっている。特に、管状把手付卵形壺（５船）が減少しており、23点から０点になったことは特筆すべきである。形象文の土器は３点から12点に増加しているが、ナカダ地域で５点、アビュドス地域で５点、バダリ地域で２点と、相対的にアビュドス地域では形象文が多いと言える。

前時期に引き続き、管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺の出土点数が全体の半数以上を占め、マハスナ遺跡を除く９遺跡で出土している。また、管状把手付扁球形壺（６無文）がナカダ地域とアビュドス地域でもみられるようになり、３番目に広い分布を示している。

幾何学文の内訳は、波状文、渦巻状文、山形文、斑状状文、鱗状文の順になり、水玉文、格子状文が増加した（第11図）。渦巻状文は管状把手付扁球形壺が21点、

第３表　彩文土器の内訳

IIB	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
5（幾何学）	2	5							1		1
6（無文）		1									1
6（幾何学）	4	2					1				1
合計	6	8					1		1		3

IIC	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
1（幾何学）		2					1				
1（船）			1								
3（船）		3									
3（形象）											1
4（幾何学）		2								1	
4（船）		1	2								
5（幾何学）	4	7	7	2	2				1	4	2
5（船）		14	4		1				2	1	1
5（形象）	1										
6（無文）									1	4	2
6（幾何学）	5	16	16	1			2	1	3	10	9
6（船）			1								
7（幾何学）		1	1								
7（形象）		1									
合計	10	47	32	3	3		3	1	7	20	15

IID	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
1（幾何学）		3	1			1					
2（幾何学）										1	
2（船）			1								
2（形象）		2									
3（幾何学）		1							1	3	
3（船）	1										
3（形象）		1	2							1	
4（幾何学）		1									1
4（形象）			1		1						
5（幾何学）	1	12	1	1	3			1	7	8	3
5（船）		2	1						1		
6（無文）	1	2	2						2	1	
6（幾何学）	2	8	11	1	2			1	3	1	5
7（幾何学）		2	1								
合計	5	34	21	2	6	1		2	14	15	9

凡例：１～４点　５～10点　11～点

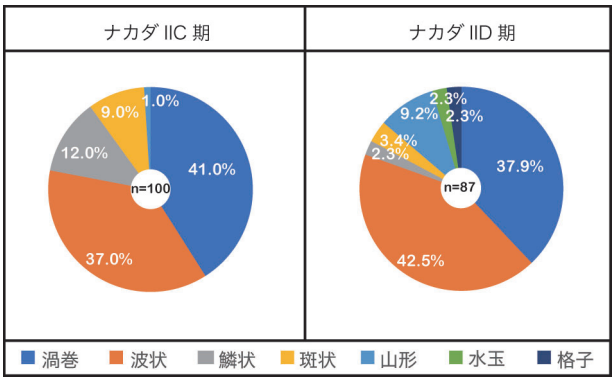
管状把手付卵形壺が10点、双卵形壺で２点である。波状文は管状把手付扁球形壺が８点、管状把手付卵形壺が24点で、波状把手付壺と有頸壺にも含まれる。これら２つの文様の傾向は、前時期の傾向を引き継いでいる。点数が増えた山形文の器形内訳を見ると、穿孔突起付壺で５点、有頸壺で１点、管状把手付卵形壺で２点となっている。

ここまでの結果から、以下の３点が指摘できる。

①生産黎明期のIIB期からIID期に至るまで、管状把手付卵形壺（５幾何学）と管状把手付扁球形壺（６幾何学）が分布の主体だった。

②幾何学文は、渦巻文と波状文様が主体であり、それぞれ管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺との相関が認められる。この傾向に地域間の差異は見られない。

③船形文はナカダIIC期を特徴づけ、管状把手付卵形壺との相関が確認された。また、ナカダ地域から離れるほど点数が減少していく傾向が看取された。



第 11 図　幾何学文の内訳

〈波状把手付土器（第４表）〉

・ナカダIIC期

11の器形が確認されており、出土した全ての遺跡でBb1類が主体となっている。他の器形は１点か２点ずつしか出土していないものの、A1類は３地域共通で出土している。波状把手付土器は南レヴァント産の土器の模倣が起源だが、第12図のようなプロトタイプの形態に似るA1類ではなく、よりスリムなBb1類がこの時期から主体であるという結果は、ヘンドリックスが提示したデータ[(4)]からも支持される（Hendrickx 1996）。

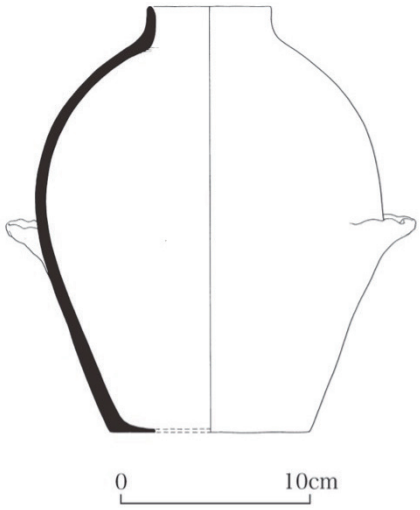
•ナカダIID期

器形は17種類に増加する。Cb1類がアビュドス遺跡から集中的に出土しており、また、ナカダ地域におけるバリエーションの主体にもなっていると言える。IIC期に主体だったBb1類は、ナカダ遺跡で２点が確認されたのみである。アムラ遺跡ではIIC期にも出土しているBa1類が主体で、バリエーションはナカダ地域の構成におさまっている。アムラ遺跡は、他のアビュドス地域の遺跡よりも、ナカダ遺跡との相関があると言える。マハスナ遺跡ではCb2類が主体であり、Cb2類は、マハスナ遺跡とバダリ地域に分布が展開している。さらに、アビュドス地域とバダリ地域で共通してCa類とDa1類が出土しており、ナカダ地域の影響ではない２地域間の相関が生まれていると言える。

ここまでの結果から、以下の２点が指摘できる。

①生産が開始されたIIC期では、Bb1類が地域を横断して分布の主体であった。

②IID期になると器形のバリエーションが増加するが、アビュドス地域を中心にBb1類に似た小型のCb1類の出土点数が多くなる。



第 12 図　ナカダ遺跡出土の南レヴァント産土器

4－3．まとめ

これまでの分析結果をもとに、彩文土器と波状把手付土器の時期ごとの分布状況についてまとめる。そして、生産と流通についても考察していく。

〈彩文土器〉

・ナカダIIB期

彩文土器の生産黎明期に位置づけられるが、出土点数が少ないながらもナカダ地域とバダリ地域から出土しており、広い分布を示している。ナカダ地域がバダリ地域で出土する器種を包摂しており、文様のバリエーションが多様であることから、ナカダ地域で生産された土器がバダリ地域で流通していた可能性がある。

第４表　波状把手付土器の内訳

IIC	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
A1		1	2								1
A2						1			1		
Ba1		2									
Ba2			1								
Bb1	6	28	8	3		2			3	5	7
Bb2											1
Bc1										1	
Bc2	1										
Ca									1		
Cb1	1			1							
合計	8	31	11	4		3			5	6	9

IID	アルマント	ナカダ	アムラ	サルマニ	アビュドス	マハスナ	カウ	ヘマミエ	バダリ	モスタゲッダ	マトマール
Ba1											1
Ba2		1	7						1		2
Bb1		2									
Bb2			1								
Bc1	5	1								3	
Bc2		2								1	
Ca						4		1	1		
Cb1	7	4	3	1	30		1	3	3	4	
Cb2	1	1				8	3	2	3	1	1
Cc1	3	2	2		1					1	
Cc2							1		2		
Da1				1	5		1			1	
Da2	2			2	2	1	1			2	1
Db		2			1						
Dc1				1							
Dc2		1			2						
E (ミニチュア土器)	1	3	2	1	2						
合計	19	19	15	6	43	13	7	6	10	13	5

凡例：　1～4点　5～10点　11～点

・ナカダIIC期

３地域で出土点数の増加が見られるが、特にナカダ遺跡とアムラ遺跡で顕著である。この時期から新たに波状把手付壺、穿孔突起付壺、有頸壺、双卵形壺が出土するようになるが、ナカダ遺跡からは全種類、アムラ遺跡からは穿孔突起付壺を除く３種類が出土している。一方で、他の遺跡では新たに登場した器種は１種類出土するかどうかに留まる。

IIB期から引き続き管状把手付卵形壺と管状把手付扁球形壺が主たる器種であるが、前者には幾何学文よりも船形文が多く描かれるようになる。船形文の管状把手付卵形壺（５船）はナカダ遺跡が最多の出土点数を示し、ナカダ遺跡から離れる遺跡ほど点数が減少していく分布状況であると言える。本稿ではアムラ遺跡の１点しか確認されなかった船形文の波状把手付壺（１船）について、同様の土器の観察、比較を行ったアクサミットは、いくつかの工房で製作されていたとする説を提示している（Aksamit 1992）。ただし、本分析の結果からは、IIC期にアビュドス地域からバダリ地域、あるいはナカダ地域に彩文土器が供給されたと解釈できるような傾向は読み取れない。これらのことを加味すると、出土点数に対して割合が大きくなっていたアビュドス遺跡の結果は、彩文土器がアビュドス地域内で生産・消費された可能性を示唆していると言える。

また、この時期はバダリ地域でのみ無文の管状把手付扁球形壺（６無文）が出土している。IIB期にはナカダ遺跡からも出土しており、続くIID期ではアルマント遺跡、アムラ遺跡からも出土するようになるので、さしあたって、ナカダ地域から流通した種類であると考える。

・ナカダIID期

総出土点数が154点から112点になっているが、検出墓数が36基減少したことによる見かけ上の減少も含まれるだろう。IIC期からの変化として注目すべきは、船形文の管状把手付卵形壺（５船）が１点も確認できなかったということである。３地域共通で減少しており、他にこのような点数の変化は見られないこと、IIC期ではナカダ遺跡から離れた遺跡ほど減少していく分布状況だったことをふまえると、ナカダ遺跡から他地域に流通していた可能性が高いと考えられる。船の文様の土器の生産中心地はナカダ遺跡であるという、コックスの指摘を追認する結果となった。

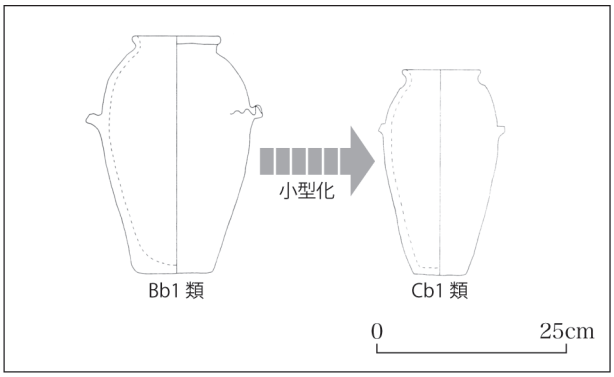
〈波状把手付土器〉

・ナカダIIC期

ナカダ遺跡から離れるごとに出土点数が減少している。また、副葬土器組成中の割合においてナカダ遺跡の値が突出し、他の遺跡では概ね一様な値であることから、ケナ・バラース地域の近郊に位置するナカダ遺跡では、比較的容易に波状把手付土器を入手できた、あるいは生産していたのではないかと考えられる。さらに、全ての遺跡でBb1類が主体で、かつ他の器形が散発的にしか出土していない。つまり、ナカダ遺跡と各遺跡がバリエーションを共有し、距離が離れるほど出土点数が減少していく、という分布状況が認められるのである。加えて、IID期にはBb1類はナカダ遺跡からしか出土しなくなる。よって、生産開始期であるIIC期ではナカダ遺跡で製作された土器が各地に流通していた可能性が考えられる。

・ナカダIID期

全体の出土点数が増加する中で、ナカダ遺跡からの出土点数は減少し、アビュドス遺跡からの出土点数が増加する。この結果は、墓数の増加以上に、Cb1類がアビュドス遺跡に集中している結果が数字上に現れたことによる。Cb1類は、形態の類似性から、Bb1類に影響を受けて成立した器形であると類推できる(第14図)。この器形がアビュドス遺跡に大きく偏って分布している要因については、アビュドス遺跡で生産されていたからなのか、それとも、別の生産地から集積された結果なのかどうかを判別することができない。ここでは判断を留保し、彩文土器の分布状況と合わせて検討を行う。IID期の状況としては、Bb1類が減少し、より小型の器形が広く分布するようになったと言える。また、アビュドス地域とバダリ地域の間で量的分布と器形のバリエーションに相関が生じていることが指摘できる。



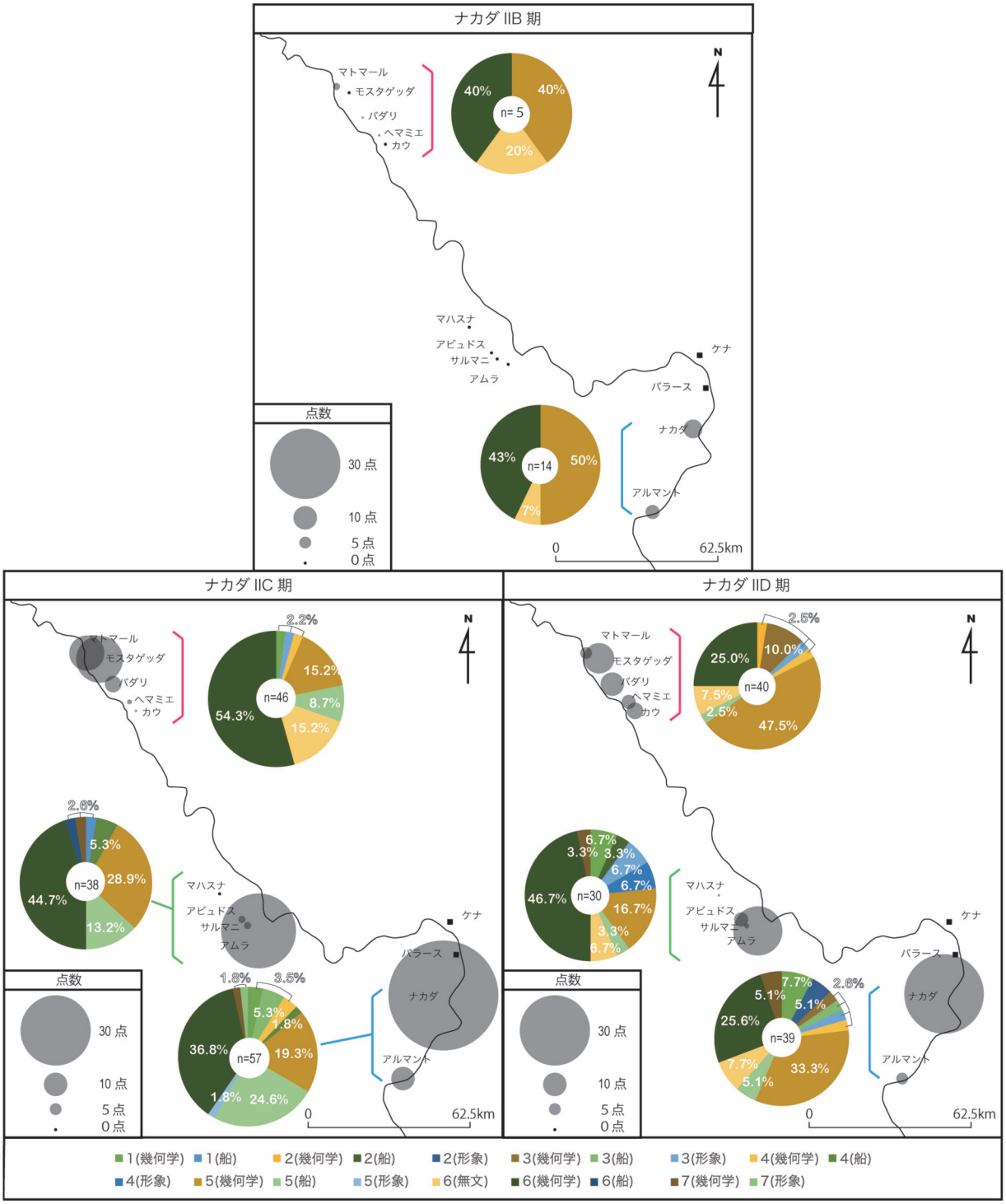
第 13 図　サルマニ遺跡出土の波状把手付土器

5．考察

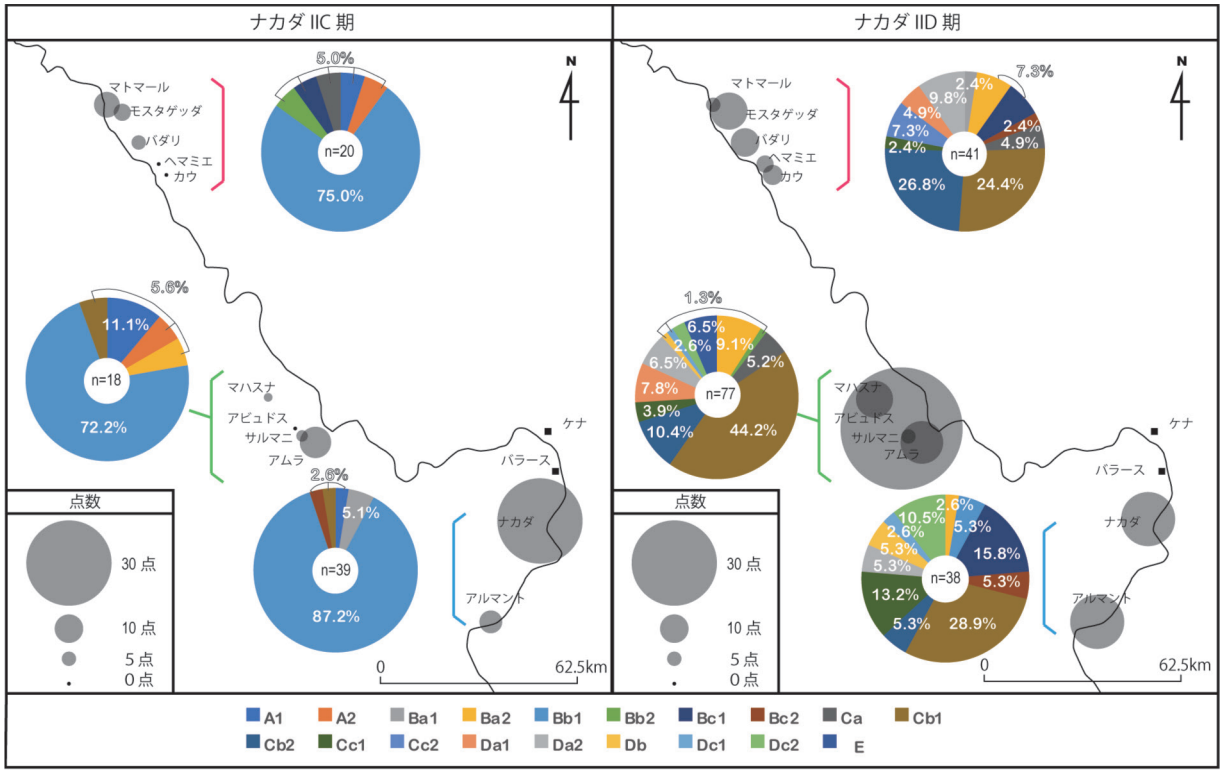
本章では、彩文土器と波状把手付土器の分布状況（第14・15図）を比較し、ナカダIIC期からIID期の硬質土器流通について考察を加えたい。

ナカダIIC期とナカダIID期を比較すると、彩文土器と波状把手付土器の分布状況に大きな変化が生じていることがわかる。波状把手付土器の分布の中心がナカダ遺跡からアビュドス遺跡に移ったのに対し、彩文土器ではそのような傾向が読み取れないのである。当該期、アビュドス遺跡は上エジプト内で政治的な影響を強めていく途上にあったとされており、また、D. パッチ（Patch）によると、アビュドス地域のセトルメントパターンを分析した結果、ナカダIIC期からIID期にかけて集落の集約化が起こったことと、集落の位置が低部砂漠から沖積平野に移動したことが認められるという（Patch 2004）。この変化の要因の１つとして、交易への参画による河川交通に対する重要性の増大が考えられることから、前時代と比較してアビュドス遺跡を中心に物資が集積されるようになることが想定される。しかし本稿では、硬質土器のなかで、波状把手付土器は顕著な増加を示すが、彩文土器はアビュドス遺跡で２点微増するものの、地域全体としては減少傾向を示すという対照性が明らかとなった。

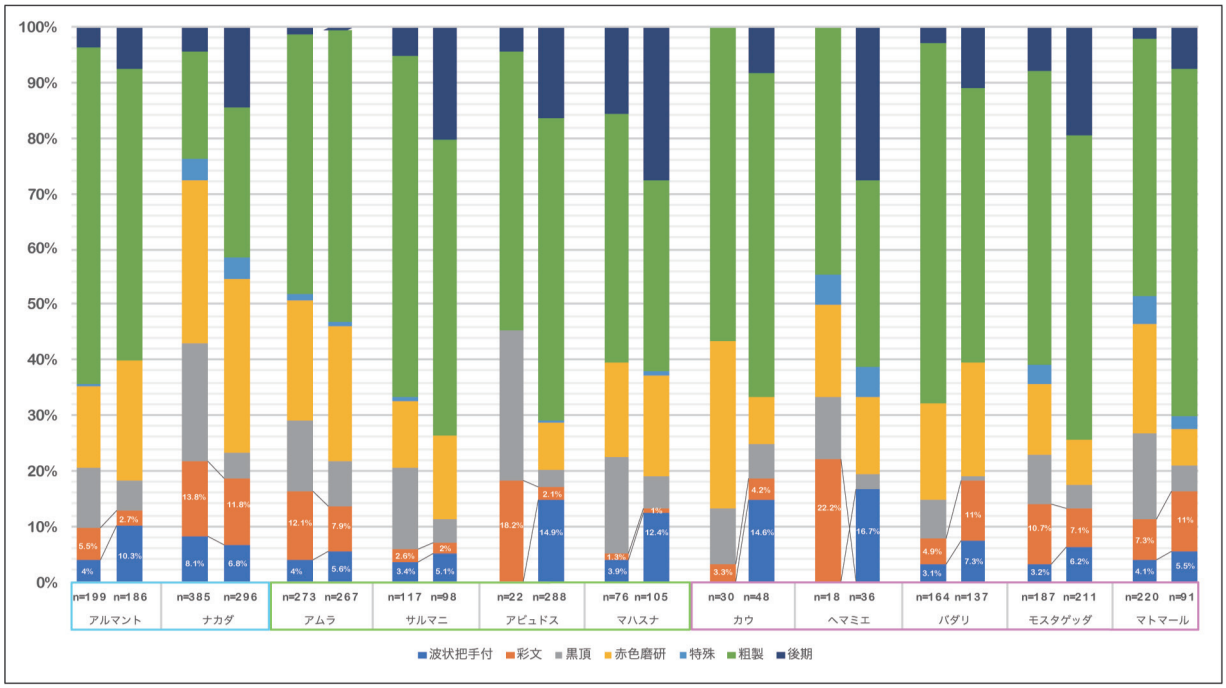
これらのことから、上エジプト内において彩文土器は、他の集落ないし地域への流通を意図して生産されるのではなく、コミュニティー内で消費することを目的として生産されたのではないかと考える。この仮説が成り立つならば、彩文土器の内訳において、ナカダ遺跡を中心に生産されていた船の文様の土器が顕著に減少したことを政体間のパワーバランスに影響された結果と解釈することができ、アビュドスにおされてナカダを中心とする政体の影響力が弱まっていった当時の社会状況と合致するのである。ナカダ遺跡とアムラ遺跡が分布の中心であり続けたことは、２遺跡の流通における優位性というよりも、伝統の保持と考えるのが妥当であろう。埋葬のコンテクストからは、幾何学文か形象文かにかかわらず、彩文土器が年齢・性別および各社会階層に偏りなく配分されていたことが指摘されており（高宮 2003: 1067; Stevenson 2009: 202）、彩文土器が葬送や儀礼と結びついていることが窺われる。したがって、伝統的なコミュニティー内の紐帯と関わるような土器の社会的役割が、「流通の様相が変化しない」という形で現れたのだと考えられる。



第 14 図　彩文土器の分布状況



第 15 図　波状把手付土器の分布状況



第 16 図　副葬土器組成比（左：ナカダ IIC 期、右：ナカダ IID 期）

続いて、彩文土器とは異なり物流の変化を反映したと思われる波状把手付土器について、どのような器形が志向されたのか、そしてその背景となる土器の社会的役割について検討していく。まず、IIC期とIID期の器形のバリエーリョンを比較すると、全体の傾向として小型化が認められ、その中心はアビュドス遺跡で最も多く出土しているCb1類である。先述したように、IIC期で主要な器形だったBb1類から派生したのがCb1類だと考えられるが、その約54%（30/56点）がアビュドス遺跡に集中しているのである。さらに、ナカダIIC-D期の副葬土器組成の変化（第16図）を見ると、アビュドス遺跡からヘマミエ遺跡にかけて波状把手付土器の割合が10%ほど上昇していることがわかる。これらの遺跡では、ナカダIID期になるとB類が姿を消し、Cb1類とCb2類（第17図）が主体となっているのである。したがって、小型化という傾向は、漸次的な変化以上に、小型な器形への需要に影響されたためだと言えるだろう。器形を小型化させることには、生産性を上げられることや運搬時の破損リスクを減らせるという利点が考えられ、製作段階から流通が意識されていたと言える。

第 17 図　マハスナ遺跡出土の Cb2 類

他のアビュドス地域の遺跡の分析結果からは、ナカダIID期にサルマニ遺跡のみ、波状把手付土器の出土点数が増加していないことがわかった。サルマニ遺跡はアビュドス遺跡に近接した墓地遺跡であることから、パッチの言う集落の集約化によって、死後に波状把手付土器が副葬されるような人物が、アビュドス遺跡の墓地に埋葬されるようになったことを反映した可能性がある。

以上より、当時のアビュドスを中心とする政体にとって、波状把手付土器の流通を掌握することは、上エジプトから下エジプトへと影響力を拡大していくうえで重要な要素のうちの１つだったと推測される。上エジプト内で誕生した、新しい技術と素材を用いた革新的な土器の作り分けは、紐帯の維持あるいは影響力の拡大という、異なる意識に基づいて行われていたのだろう。

おわりに

本稿では、地域統合プロセスと土器の社会的な役割を念頭において、硬質土器の分布状況を分析し、流通の様相を検討した。その結果、ナカダIID期を画期として、アビュドス遺跡に波状把手付土器の流通拠点が移動することがわかった。彩文土器がコミュニティー内で共有し、消費されることが意図されているのに対して、波状把手付土器は他地域へと積極的に搬出され、アビュドスを中心とする政体の影響力を示すものとして流通が制御されていた可能性を提示した。

波状把手付土器が流通したということは、単に特殊な土器が広まったことを示すだけでなく、この土器を副葬し、葬送において何らかの意味を持たせる慣習が広まったということを意味する（Stevenson 2016: 404）。よって、出土コンテクストからの検討を追加し、波状把手付土器の流通をコントロールする理由、そしてその背景についての理解も深めていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教員である早稲田大学文学学術院の近藤二郎教授にご指導賜りました。早稲田大学エジプト学研究所の先輩方には、日頃からご助言をいただいております。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

（1）本稿における上エジプト、下エジプトとは地理的区分である。カイロ以南を上エジプト、カイロ以北のナイルデルタ地帯を下エジプトとする。なお、先王朝時代における上エジプトの南限はアスワンまでと考える。

（2）馬場によれば、ナイルシルト胎土土器の焼成は野焼き、マールクレイ胎土土器の焼成は昂焔式窯の利用が想定されており、昂焔式窯はマールクレイの使用開始に伴う技術革新であったとされている（馬場 2013:

179−187）。

（３）ピートリーは９つのクラスを合計約3000に及ぶ形式（type）を分類したが、ヘンドリックスによると、分類を採用した発掘報告書からは1553の形式のみが集成できたとされている（Hendrickx 1996: 44）。

（４）51点から60点を集成できた土器として、ピートリー分類のB57b、R24a、R85h、W19（筆者分類Bb1の一部）、W43b（筆者分類Cb1の一部）を挙げている。頻度としては、上位４番目のグループに含まれるという（Hendrickx 1996: 45-46）。

引用文献

高宮いづみ 2003「エジプトナカダ文化の『赤色彩文土器』について－埋葬のコンテクストからの理解－」大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会編『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』六一書房 p1055-1070

高宮いづみ 2006『古代エジプト文明社会の形成』京都大学学術出版

馬場匡浩 2013a「若手研究（B）22720294 エジプト先王朝時代における硬質土器の生産地に関する基礎的研究」『科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書』

馬場匡浩 2013b『エジプト先王朝時代の土器研究』六一書房

馬場匡浩 2016「若手研究（B）25770280 エジプト先王朝時代における硬質土器の焼成技術に関する考古学的研究」『科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書』

Aksamit, J. 1992 Petrie's Type D46D and remarks on the production and decoration of predynastic Decorated Pottery. *Caiers de la Céramique Égyptienne* 3.: 17-21. Cairo: Institut Francais d'Archeologie Orientale du Caire.

Amiran, R. 1969 Ancient Pottery of the Holy Land: *From Its Beginnings in the Neolithic Period to the End of the Iron Age*. Israel: Massada Press.

Ayrton, E. R. & Loat, W. L. S. 1911 *Pre-dynastic Cemetery at El-Mahasna*. London: The Egypt Exploration Society.

Baines, J. & Málek, J. 1980 *Atlas of Ancient Egypt*. New York: An Andromeda Book.

Bard, K. A. 1994 *From Farmers to Pharaohs: Mortuary Evidence for the Rise of Complex Society in Egypt*. Sheffield: Sheffield Academic Press.

Baumgartel, E.J.1970 *Petrie's Naqada Excavation: A Supplement*. London: Brenard Quaritch.

Borriaou, J., Bellido, A., Bryan, N., and Robinson, V. 2004 Neutron Activation Analysis of Predynastic to Early Dynastic Pottery from Minshat Abu Omar, Hemamieh, and Armant. In S. Hendrickx, R. Friedman, K. M. Cialowicz and M. Chlodnicki (eds.) *Egypt at its Origins. Study in Memory of Barbara Adams*.: 637-663. Leuven: Peeters.

Brunton, G. 1937 *Mostagedda and the Tasian Culture*. London: The Egypt Exploration Society.

Brunton, G. & Caton-Thompson, G. 1928 *The Badarian Civilisation and Prehistoric Remains near Badari.* London: The Egypt Exploration Society.

Buchez, N. 2011 A reconsideration of Predynastic chronology: The contribution of Adaïma. In R. Friedman and P. N. Fiske (eds.) *Egypt at Its Origins* 3.: 939–951. Leuven: Peeters.

Cox, J. L. 2015 From Nubia to the Levant: The Distribution of Predynastic Egyptian Decorated Ware in Space and Time. In J. L. Cox, C. R. Hamilton, K. R. L. McLardy, A. J. Pettman and D. Stewart (eds.) *Ancient Cultures at Monash University: Proceedings of a Conference held between 18–20 October 2013 on Approaches to Studying the Ancient Past*.: 1-12. Monash: Monash University.

Cox, J. L. 2020 Changing aesthetics: Petrie's Decorated Ware in the Naqada II and III periods. In Warfe, A. R. et al. (eds.) *Dust, demons and pots. Studies in honour of Colin A. Hope*.: 97-112 Leuven: Peeters.

Frankfort, H. 1930 The Cemeteries of Abydos: Work of the Season 1925-1926. II. Description of Tombs. *The Journal of Egyptian Archaeology* 16: 213-219.

Friedman, R. F. 1994 *Predynastic Settlement Ceramics of Upper Egypt: A Comparative Study of the Ceramics of Hemamieh, Nagada, and Hierakonpolis*. Ph.D. dissertation. Berkeley: Department of Near Eastern Studies, University of California.

Ben-Tor, A. 1992 The early bronze age. In A. Ben-Tor (ed.) translated by Greenberg, R. *The archaeology of ancient Israel*.:81-125. United States: Yale University Press.

Graff, G. 2009 *Les Peintures sur Vases de Naqada I – Naqada II: Nouvelle Approche Sémiologique de l'Iconographie Prédynastique*. Leuven: Leuven University Press.

Hendrickx, S. 1989 *De grafvelden der Naqada-cultuur in Zuid-Egypte, met bijzondere aandacht voor het Naqada III grafveld te Elkab. Interne chronologie en sociale differentiatie*. Unpublished Ph.D. Thesis. Leuvan: Katholieke Universiteit Leuven.

Hendrickx, S. 1996 The relative chronology of the Naqada culture: Problems and possibilities. In A. J. Spencer (ed.) Aspects of Early Egypt.: 36–69. London: British Museum

Press.

Hendrickx, S. 2006 Predynastic–Early Dynastic chronology. In E. Hornung, R. Krauss, and D. A. Warburton (eds.) *Ancient Egyptian Chronology*.: 53–93. Leiden; Boston: Brill.

Hendrickx, S. 2011 Crafts and craft specialization. In E.Teeter (ed.) *Before the Pyramids: The Origins of Egyptian Civilization, Oriental Institute Museum Publications 33*.: 93–98. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.

Hendrickx, S., and Bavay, L. 2002 The relative chronological position of Egyptian Predynastic and Early Dynastic tombs with objects imported from the Near East and the nature of interregional contacts. In E. C. van den Brink and T. Levy (eds.) *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium BCE*.: 58–80. London: Leicester University Press.

Kemp, B. 1991 *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization*. London: Routledge.

Köhler, C. 2010 Theories of state formation. In W. Wendrich (ed.) *Egyptian Archaeology*.: 36–54. Oxford: Blackwell.

Köhler, C. 2014 Of pots and myths: Attempting a comparative study of funerary pottery assemblages in the Egyptian Nile Valley during the late 4th millennium BC. In A. Maczynska (ed.) *The Nile Delta as a Centre of Cultural Interactions Between Upper Egypt and the Levant in the Fourth Millennium BC*.: 155–180. Poznan: Poznan Archaeological Museum.

Mond, R. & Myers, O. H. 1937 *Cemeteries of Armant* I. London: Oxford University Press.

Naville, E.; Peet, T. E.; Hall, H. R. & Haddon, K. 1914 *The Cemeteries of Abydos. Part I: The mixed cemetery and Umm el-Ga'ab.* London; Boston: Egypt Exploration Fund.

Nordstrom, H. A. and J. Bourriau. 1993 Ceramic Technology: Clay and Fabrics. In D. Arnold and J. Bourriau (eds.) *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*.: 148-190. Mainz am Rhein: Von Zabern.

Patch, D. C. 2004 Settlement Pattern and Cultural Change in the Predynastic Period. In S. Hendricks, R. Friedman, K. M. Cialowicz, and M. Chlodnicki (eds.) *Egypt at Its Origins*.: 905-918. Leuven: Peeters.

Payne, J.C. 1993 *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum*. Oxford: Clarendon.

Peet, T. E. 1914 *The Cemeteries of Abydos. Part II.1911-1912.* London; Boston: Egypt Exploration Fund.

Petrie, W. M. F. 1921 *Corpus of Prehistoric Pottery and Palettes*. London: British School of Archaeology in Egypt.

Petrie, W. M. F. & Quibell, J. E. 1896 *Naqada and Ballas.* London: Brenard Quaritch.

Randall-McIver, D. & Mace, A. C. 1902 *El Amrah and Abydos. 1899-1901.* London: Egypt Exploration Fund.

El Sayed, A. 1979 A Prehistoric Cemetery in the Abydos Area. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 35: 249-301.

Stevenson, A. 2009 *The Predynastic Egyptian Cemetery of El-Gerzeh: Social Identities and Mortuary Practices*. Leuven: Peeters.

Stevenson, A. 2016 The Egyptian Predynastic and State Formation. *Journal of Archaeologial Research* 24 (4): 421-468.

Takamiya, I. H. 2003 Prestige Goods and Status Symbols in the Naqada Period Cemeteries of Predynastic Egypt. In Z. Hawass (ed.) *Egyptology at the Down of the 21st Century: The Proceedings of the 8th International Congress of Egyptologists*.: 486-494. Cairo: American University in Cairo Press.

Takamiya, I. H. 2004 Egyptian Pottery Distribution in A-Group Cemeteries, Lower Nubia: Towards an understanding of exchange systems between the Naqada culture and the A-group culture. *The Journal of Egyptian Archaeology* 90: 35-62.

Wengrow, D. 2006 *The Archaeology of Early Egypt: Social Transformations in North-east Africa, 10,000 to 2650 BC*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wilkinson, T. 2000 Political unification: Towards a reconstruction. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 56: 377–395.

図表出典一覧

第１図　Baines & Málek 1980: 21; Hendrickx 2006: Table. II .1.7. をもとに筆者作成。

第２図　Petrie 1921: pl. xxxviii-xxxx. をもとに筆者作成。

第３図　Petrie 1921: pl. xxxv.; Payne 1993: Fig. 35. 802, Fig. 37. 822, 829, Fig. 41. 864, Fig. 43. 869, Fig. 46. 894 をもとに筆者作成。

第４図　Petrie 1921: pl. xxxii., xxxv.; Payne 1993: Fig. 37. 822, Fig. 46. 887, 888, 894, Fig. 50. 925 をもとに筆者作成。

第５図　Payne 1993: Fig. 41. 864 をもとに筆者作成。

第６-11、14-16図　筆者作成。

第12図　Payne 1993: Fig.53. 1087 より引用。

第13図　Sayed 1979: Fig. 14. 5, Fig. 15. 1 をもとに筆者作成。

第17図　大英博物館：所蔵番号 EA49041 © The Trustees of the British Museum

第１表　Hendrickx 2006: Table. II .1.2. をもとに筆者作成。

第２・３表　筆者作成。

研究ノート

溯航　第39号　49-57頁　2021年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

浮線文土器群における文様モチーフの分類と系統についての雑感

―千葉県域出土の精製土器を対象に―

関根有一朗

要旨

浮線文土器群とは、縄文時代晩期後葉から末葉に、東北地方南部から東海地方にかけて広く分布する土器である。その特徴である、浮線によって描かれる網状の文様モチーフは、細別の指標として用いられることが多いが、近年の発掘成果では文様モチーフが長期間にわたって継続的に使用されることが分かってきた。そのため本稿では、千葉県域出土の浮線文土器群を対象に、従来の図像学的観点からの文様モチーフの分類に加え、文様モチーフ表出手法という視点から分析を行った。その結果、先行研究で捉えられてきた文様系統観と一部異なる結論を得ることが出来た。

キーワード：浮線文土器群、千葉県、文様モチーフ表出手法

はじめに

浮線文土器群[(1)]は、縄文時代晩期後葉から末葉に東北地方南部から東海地方にかけて広く分布する土器の総称である。浮線により網目状の文様が描かれる事から命名されたこの土器群は、晩期東北地方を中心に分布する大洞式と同じように西日本でも出土し、広域に移動していた土器であることが確認されている。このことから、該期の集団の動態や交流の実態を明らかにすることは、東日本全体の晩期の動態を推し量る上で必須の作業である。こうした交流関係の解明や、型式細別のためには、その指標となる文様モチーフの分析は欠かせない。先行研究の多くでは、浮線文モチーフの斉一性の高さや資料的制約から、全国的に包括して行われることが多かった。しかしより細かい交流関係のプロセスの解明のためには、広域に分布する属性と地域的に分布する属性の有無自体や、あるとすればその差異について検討する必要がある。

本稿では、千葉県域出土の浮線文土器群を分析対象とし、文様モチーフの分類を行うことで、千葉県域における浮線文土器群の系統関係を明らかにする事を目的とする。またこの際の分析視点として文様モチーフ表出手法を用いる。

1．先行研究

1－1．浮線文土器群編年研究略史（第1表）

浮線文土器自体は、戦前から山内清男らにより縄文時代終末の土器としてその存在が知られていたが（山内1930）、その編年研究については戦後に入り大きく「中部高地（長野）」「新潟・福島」「関東」の3地域を中心に進められてきた。

中部高地ではまず、千曲川流域の晩期資料の検討や長野県氷遺跡出土資料の分析を行った永峯光一により、「氷Ⅰ式」が設定された（永峯 1969）。1980年代に入ると、増加した出土資料を基にした設楽博巳や石川日出志らによる研究により、長野県女鳥羽川遺跡→離山遺跡→トチガ原遺跡という変遷が確認された（設楽 1982、石川 1985）。1990年代にはこうした研究の蓄積や良好な遺跡・遺構一括資料の増加を受け、中沢道彦により「女鳥羽川式」と「離山式」の設定、「氷Ⅰ式」の3細分が行われた（中沢 1998）。現在では「女鳥羽川式」→「離山式」→「氷Ⅰ式古段階」→「氷Ⅰ式中段階」→「氷Ⅰ式新段階」という編年が多くの研究者の間で用いられている（小林圭 2018など）。

新潟・福島ではまず、寺村光晴による「藤橋式」の設定（寺村 1956）や、磯崎正彦による「鳥屋式」の設定（磯崎 1957）が行われた。1980年代以降には、新潟県鳥屋遺跡や同県村尻遺跡の発掘調査結果を踏まえ、石川日出志により「藤橋式」「鳥屋式」の再編成が行われた。その結果、「鳥屋1式」「鳥屋2a式」「鳥屋2b式」が設定され（石川 1988）、1990年代には福島県内の阿賀野川流域である会津地方の浮線文土器群にもこの編年が適応できると提唱した（石川 1991・1993）。また石川は、福島県内でも下屋ヶ地平C遺跡出土の土器群から金山遺跡出土の土器群へと変遷が追えるとし、鳥屋2a式が細分できる可能性を提示した（石川 1991）。現在では、「鳥屋1式」→「鳥屋2a式」→「鳥屋2b式」という

編年が多くの研究者の間で用いられている。

関東における最初期の浮線文土器群研究は、北関東（群馬）を中心に薗田芳雄によって進められた「千網式」に関する一連の研究（薗田 1950・1972）や、南関東（千葉・神奈川）を中心に早慶明三大学によって行われた「荒海式」「姥山Ⅴ式・Ⅵ式」「杉田Ⅲ式」の設定（西村 1961、鈴木公 1963、杉原・戸沢 1963）などが挙げられる。1980年代以降、千葉県荒海貝塚出土資料の分析や大洞A式・A´式の研究を推し進めた鈴木正博は、千網式を5期、杉田Ⅲ式を６期に細分した（鈴木正 1985・2006）。1990年代には千葉県における資料増加に伴い、鈴木加津子により浮線文土器群直前段階の型式として「桂台式」「向台Ⅱ式」が（鈴木加 1997）、渡辺修一により「向台段階」「池花南段階」「御山（古）段階」が設定された（渡辺 1991・1994）。両者は共に、千葉県向台Ⅱ遺跡出土資料を遺跡一括資料として積極的に評価しているが、女鳥羽川式と併行関係をとるか（渡辺）、否か（鈴木）によって編年上の位置づけに相違が生じている。

第１表　浮線文土器群編年

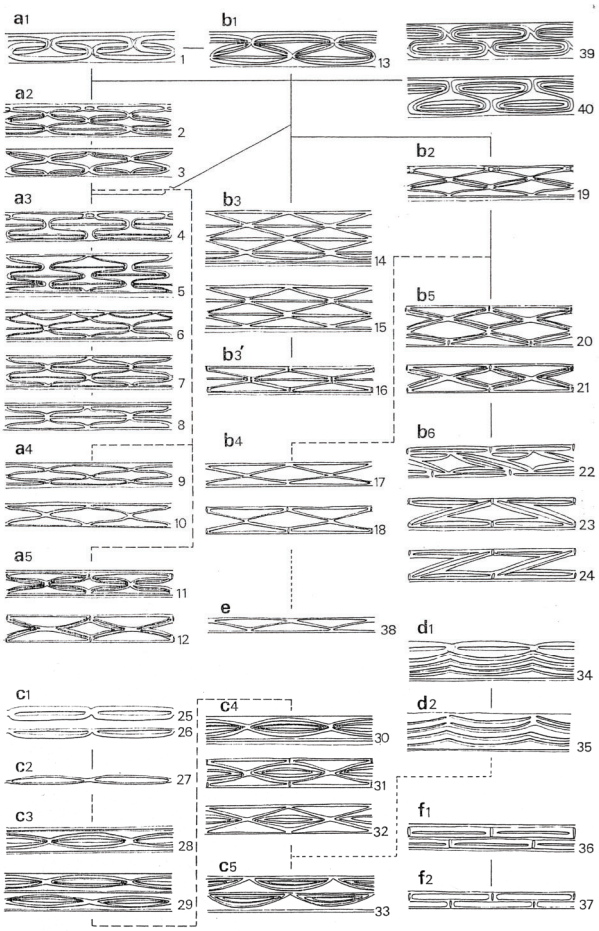
	推定年代 ¹⁴C BP	中部高地	関東	新潟（上越）	新潟（中下越）	東北
縄文晩期	2700 ～ 2600	女鳥羽川式	桂台式・向台Ⅱ式	女鳥羽川式	鳥屋１式	大洞A式（古）
	2600 ～ 2500	離山式・氷Ⅰ式（古）	杉田Ⅲ式・千網式	離山式・氷Ⅰ式（古）	鳥屋２ａ式	大洞A式（新）
	2500 ～ 2400	氷Ⅰ式（中新）	杉田Ⅲ式・千網式／荒海式	氷Ⅰ式（中新）	鳥屋２ｂ式	大洞A′式
弥生前期	2400 ～ 2300	氷Ⅱ式	（境木）・荒海式・沖Ⅱ式	氷Ⅱ式	緒立式	青木畑式・砂沢式

１－２．文様モチーフ

浮線文モチーフは、大洞A式の工字文との図像的類似性から、工字文からの系統として捉えられることが多い（永峯 1969など）。

石川日出志は、中部高地の浮線文精製浅鉢を対象に分析を行い、浮線文モチーフを大洞A式古段階の工字文から変化したものと考え、曲線的な工字文から生成される浮線文（a）、直線的な工字文から生成される浮線文（b）、凸レンズ状の構図の浮線文（c）、平行線を縦に断ち切る工字文から生成される浮線文（f）などに分類した（石川 1985：154–156）（第１図）。そしてa・b類の系統変化の方向性として構図の簡便化を想定、c類については、隆線部に充填する陰刻部の種類（沈線文か菱形の彫り込みか）から、a・b類との併行関係を想定し、文様モチーフの系統・併行関係を設定した。

鈴木正博は、浮線文モチーフを大きく以下の７種に分類した。



第１図　石川日出志の文様系統変遷図

①千網谷戸型突帯文手法 ②一人子型浮線網状文 ③杉田型入り組み浮線文④千網谷戸C–ES型三分岐浮線文重畳 ⑤荒海J 型三分岐浮線文⑥杉田型レンズ状浮線文 ⑦氷型単体連繋浮線文

そして文様系統として①→②→③→④→⑤の流れを想定（⑥と⑦は⑤と同時期異系列）し、千網式を５ 期に細分する案を提唱した（鈴木正 1985）。またその中でも文様モチーフを構成する文様の系列として、①突帯文（１期では単独だがそれ以降は他の手法と複合化）②曲線文（２期に完成し、入り組み化→重畳化→単純化の傾向をたどる）③直線文（三角文や菱形文を特徴とし、後者は②と同じ変遷をたどる）の３系列に分けられると論じた（鈴木正 1987）。石川・鈴木の分類は、曲線・直線の文様モチーフを系列差として捉える点で共通している。

一方で田部井功は、大洞A式と浮線文土器群の文様モチーフを包括的に分析し、曲線文と直線文を時期差として捉え、前者から後者への変遷を想定している（田部井 1985）。

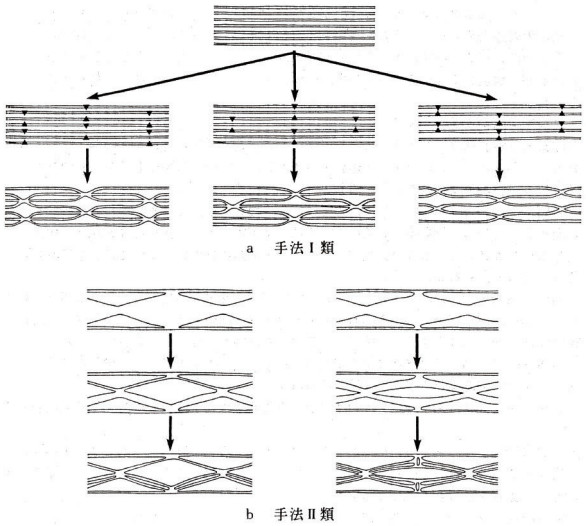
１－３．文様モチーフ表出手法

文様モチーフの系統関係についての研究は縄文土器型式研究の基本であり、各地の編年や他型式との交流関係を把握する指針として多くの成果を挙げてきた。しかし最近の発掘成果に基づく分析では、大洞式や浮線文土器群の文様モチーフが長期間にわたり存在することが判明しており（大坂 2012、荒川 2004）、文様モチーフのみを基準とする土器の時期決定に対する危険性が指摘されている（大坂 2012）。こうした状況を打破するための有効な分析視点と考えられるのが、文様モチーフ表出手法に基づく分析視点である。

こうした視点から文様モチーフの分類を行った研究者として、小林正史が挙げられる（小林正 1998）。小林は、土器文様の変化の要因を探るために、従来主流であった社会的側面や象徴的側面だけではなく、機能的側面にも着目し、東北中部・南部の土器群の分析を行った。小林は、「文様の時間的変化,地域差,器種差が「土器の形・容量といった文様施文部位に影響する（と考えられる）要素」とどう関連するか」（小林正 1998: 85）を重視した。そのため設定した文様モチーフと文様施文手法、器種、土器の深さ、文様帯幅の関係性を分析している。その結果、大洞C2式からA´式（晩期中葉から末葉）へと浅鉢の比率増加及び小型化に伴う文様が見える部位の狭小化と、施文手法・文様パターンの変化が対応している事を明らかにした（小林正 1998：89）。

安藤広道は、神奈川県横浜市西之原遺跡表採資料を分析した結果、浮線文モチーフの表出手法には２種類存在することを明らかにした（安藤 1988）（第２図）。まず1つ目は、「数条の平行直線文を描いた後、数箇所適当な位置に集束点をつくる」表出手法（「手法Ⅰ類」）である。この手法の特徴として、「集束点の位置を任意に変化させることにより、バラエティーに富んだモチーフを形成し得る」（安藤 1989）点を挙げている。２つ目は、「断続する沈線、削り出し手法などを駆使することによりモチーフを表出していくもの」（「手法Ⅱ類」）である。この手法の特徴として、「文様の描きはじめよりそのモチーフが決定されている」点を挙げている（安藤 1988：90-91）。この手法の差異は、中部高地の浮線文土器群においても確認され、中沢は氷Ⅰ式古段階になると後者の文様表出手法が出現するとしている（中沢 1998）。また文様モチーフ表出手法の変化が変遷の画期になりうる点は、中部高地の編年研究だけでなく、浮線文土器群の変遷が層位的に確認できる新潟県青田遺跡の発掘成果からも確認されている（荒川 2004：263）。

このように、表出手法に着目した分析視角は、細かな時間差の指標として有効なだけでなく、文様変化の要因や定型化する文様モチーフが選択された理由は何か、といった事にまで論を進めることが出来る点で、優れた視点である。



第２図　安藤広道による文様モチーフ表出手法分類

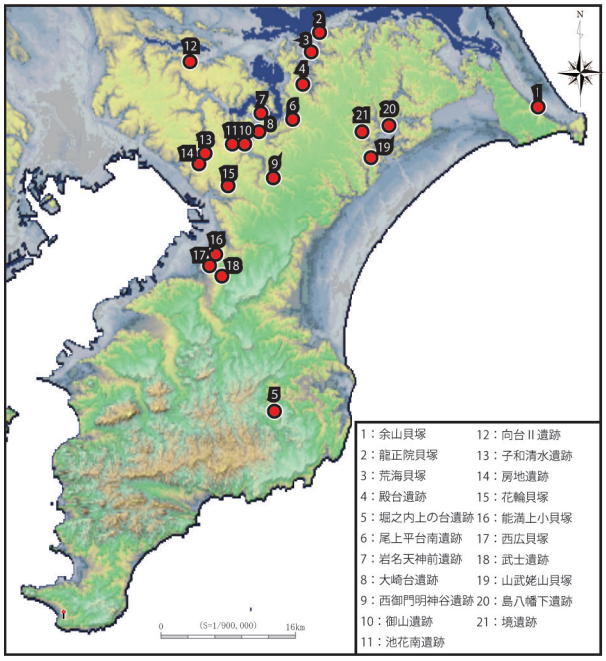
２．浮線文土器群研究の現状と課題

現在の浮線文土器群研究は、中部高地や新潟・福島に比べ、関東は研究の進展の遅れが指摘されている（中沢 1999）。これは、前２地域に比べて関東では、浮線文土器群盛行期における良好な遺跡・遺構一括資料や層位別資料が極めて少ない点が要因として挙げられる。そのため、型式学以外の方法で前後関係を推定する手段がなく、型式学的に前後関係を推定した後にその系統性を検討するという循環論に陥ってしまいかねない。

こうした状況を打開するためには、ある程度確実な一括廃棄を想定できる事例を基に、連続的に変遷する属性に着目して系統を追う必要がある。こうした属性として、「器形」「文様帯構成」「文様モチーフ」の３つを挙げる事ができる。このうち前２項についての研究は盛んに行われている（石川 1985、中沢 1998）。そこで本稿では、文様モチーフの分類を行ったのち、文様モチーフ表出手法に着目した視点から、その系統と各文様モチーフの関係性についての仮説を提示する。また分析対象として、関東の中でも浮線文土器群の出土量が多い、千葉県域に対象を絞って検討を行う。

3．分析対象の遺跡と分析資料選択の基準

本稿にて分析に使用する遺跡は第３図に示したとおりである（第３図）。これらの遺跡の中から、本稿で一括資料と判断できるとした事例は２ 例である。



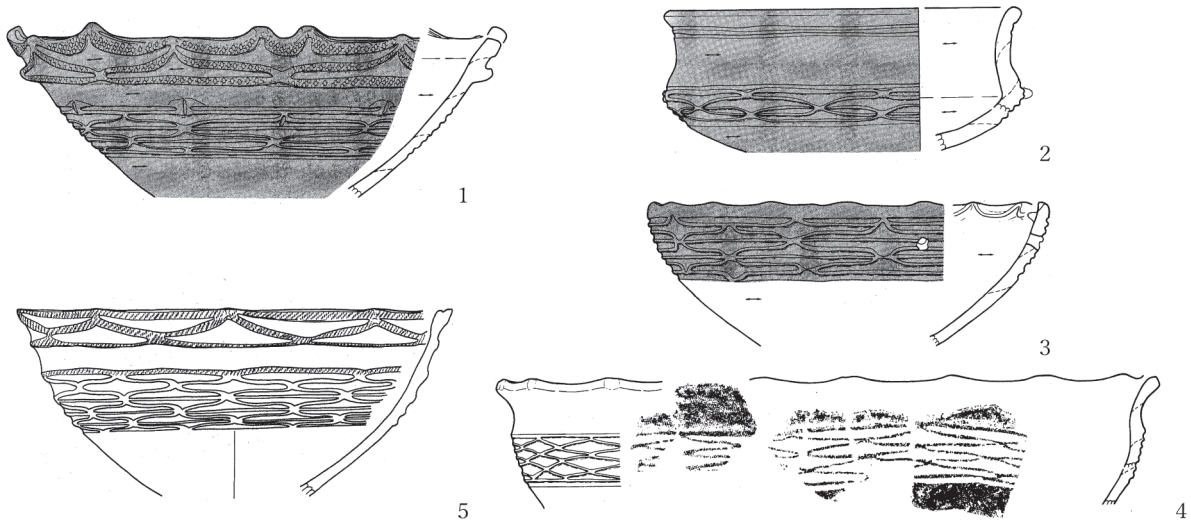
第３図　千葉県域における浮線文土器群出土遺跡

まず１例目は、龍正院貝塚Ⅲ層出土の一括資料である。先行研究においても一括資料として度々利用され、氷Ⅰ式中段階の精製浅鉢や、平行沈線文系の浅鉢などが共伴する。２例目は、池花南遺跡のクラスターfである（第４図）。廃棄状況から、その一括性の高さを伺うことが出来る。第４図：１は、口縁部装飾と文様帯構成の点で福島県下屋ヶ地平C遺跡の１号住居出土資料に類似している。福島県下屋ヶ地平C遺跡の１号住居出土資料は、鳥屋２a式期の基準資料の１つであり、従って池花南遺跡クラスターf出土資料は、浮線文土器群の中でも初期の資料として比定できる。

分析資料の選択に関しては前節で述べた理由から、文様モチーフを判断する必要があるため、口縁部破片や全体の遺存状況が良く器形や文様帯構成が判断できる土器を取り扱った。

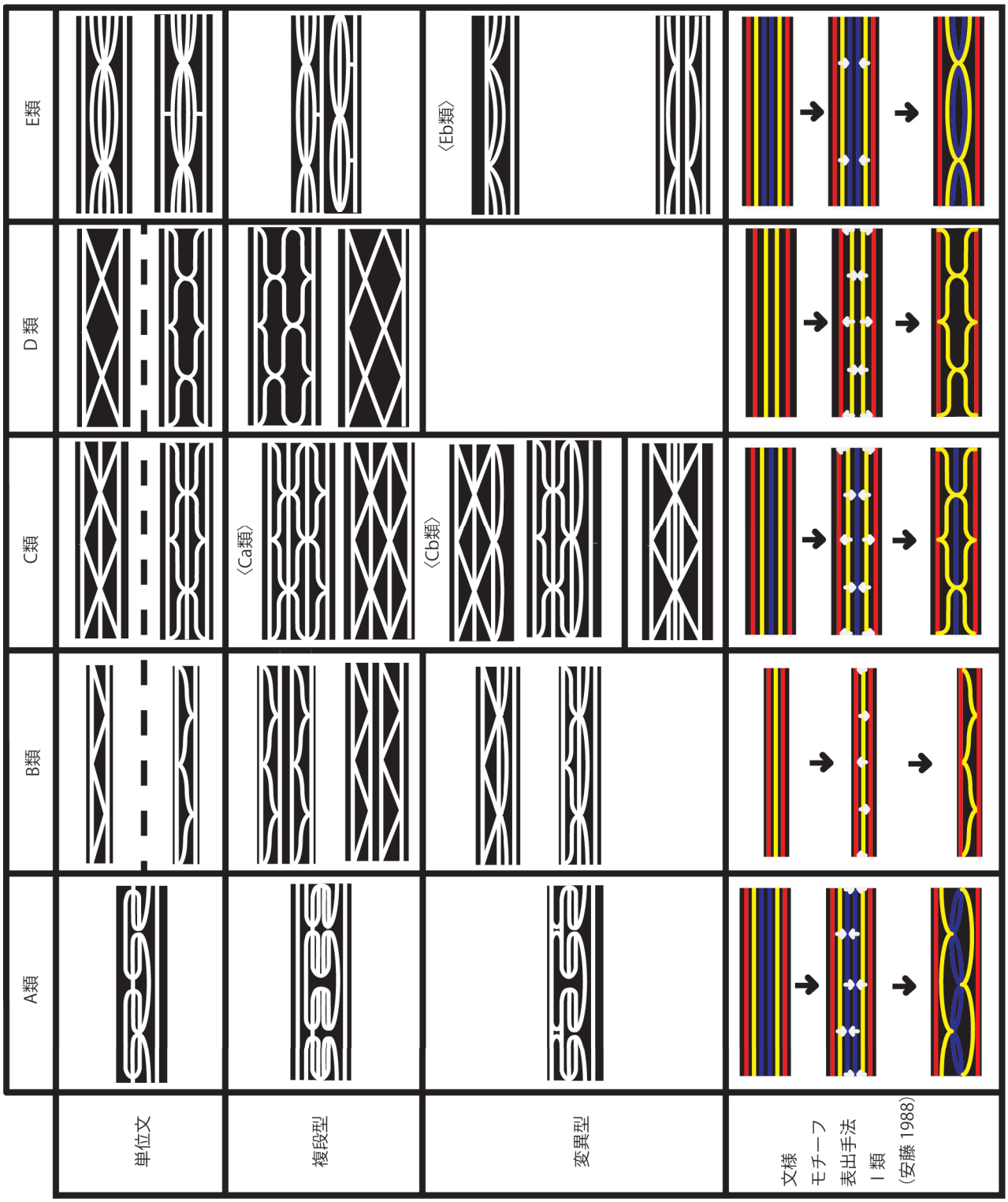
4．文様モチーフ分類試案（第５図）

浮線文モチーフは、単位ごとに大きさが異なる例やモチーフがゆがむ例が多く確認されている。この要因として小林正史は、「粘土の移動量が大きい浮線文では、器面が柔らかい状態で文様を施文し、その後の調整をあまり行わないため」（小林正 1998：63）であると述べている。こうした浮線文モチーフを分類するため、繰り返し施文される文様モチーフを単位文として設定し、５類に分類した。またその変異型と考えられるものを第５図最下段に配置した。先行研究では、曲線文と直線文を系統差として捉える意見（石川 1985、鈴木正 1987）と時期差として捉える意見（田部井 1985）がある。先述の池花南遺跡クラスターf一括資料では、直線文と曲線文の資料が共伴しているため、筆者は両者を系統差であると考える。



１～４：千葉県池花南遺跡クラスターｆ　S＝１/４
５：福島県下屋ヶ地平Ｃ遺跡１号住居　S＝１/４

第４図　池花南遺跡、下屋ヶ地平Ｃ遺跡出土資料



第５図　浮線文モチーフ分類案

［文様モチーフA 類：入り組み浮線文］

この文様モチーフは、長野県一津遺跡や神奈川県杉田貝塚、福島県金山遺跡、埼玉県花見堂遺跡などで見られる。弧状の浮線が交互に入り組む形で施文され、浅鉢の体部文様として用いられる。鈴木正博が「杉田型入り組み浮線文」として命名した文様モチーフである（鈴木正1985）。中部高地において、肩部の眼鏡状付帯文から施文される例が確認されており、千葉県域にも同様の例が存在するが、中部高地と異なるのは、入り組み浮線文を横切る形の浮線を持った文様モチーフは存在しないという事である。また千葉県房地遺跡例では、文様接続部を切ることにより、陰刻部に入り組む工字文を表出している。

［文様モチーフB 類：三角浮線文］

この文様モチーフは、群馬県三ノ倉落合遺跡や茨城県殿内遺跡などで見られる。上下に２本存在する浮線を斜めの浮線によって結合する事で、三角形状のモチーフが交互に施される。曲線的なものと直線的なものの２種が存在し、浅鉢だけでなく、深鉢や甕の口頸部文様や肩部文様として採用されることが多い。「凸字状工字文系列」（品川 2003）として知られ、大洞A式にも多く採用される文様モチーフである。しかし本稿では、千葉県武士遺跡例や同県岩名天神前遺跡例など浮線により、単段ないし複段で用いられる例も存在する事から、独立した文様モチーフとして位置づける。変異型として、子和清水遺跡でB類の下部に弧線文が施されている（第６図上段）。この文様モチーフについては次章で詳述する。

［文様モチーフC 類：三分岐ハンガー状浮線文］

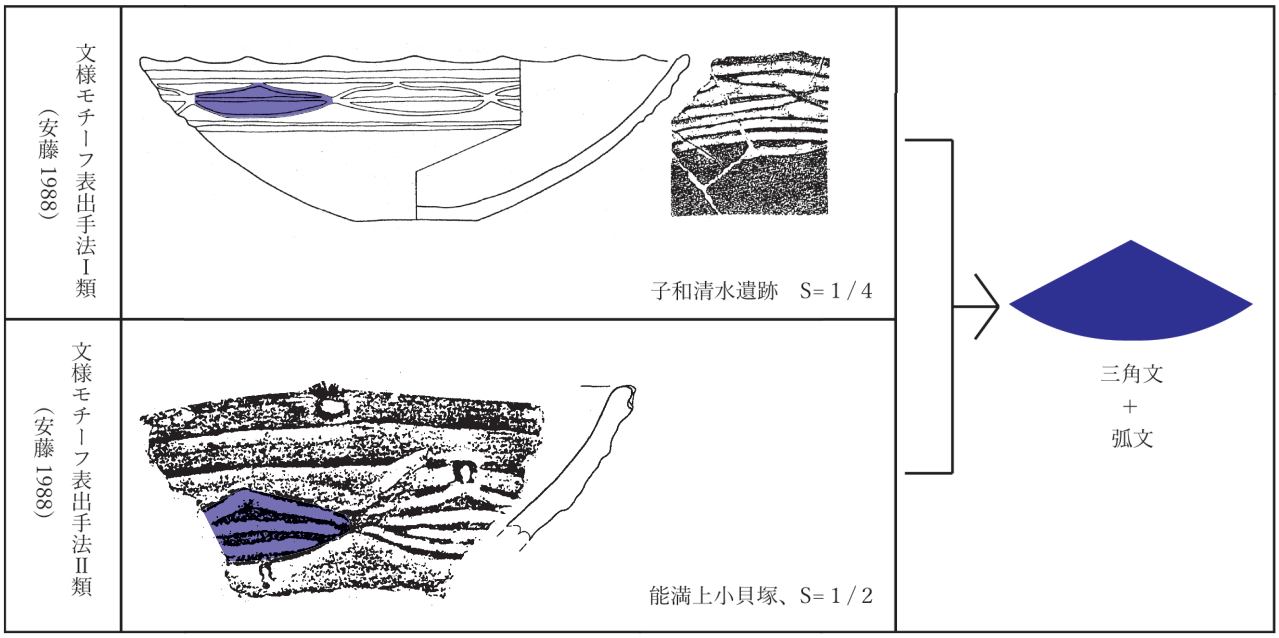
Ca 類：下方の文様帯区画文と接続するもの

Cb 類：下方の文様帯区画文と接続しないもの

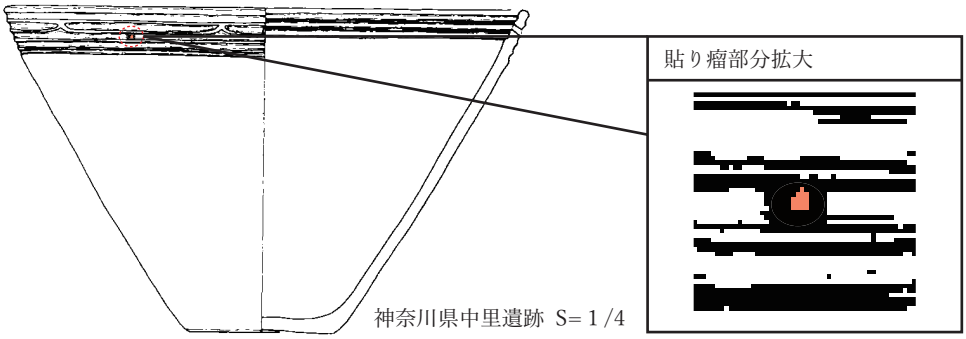
この文様モチーフは、三分岐ハンガー状浮線文や菱形文などと呼称され、浮線文土器群全般において一般的に見られる。上方の文様帯区画文と接続する菱形状浮線文の間を、１本の浮線文が横切る事で、三分岐の浮線文モチーフとなる。曲線的なものや直線的なもの、氷Ｉ式に多く見られる２条の浮線により構成されるものが存在する。単段や複段、千鳥格子状に施文され、浅鉢や深鉢、甕に付される。本稿では、文様帯区画文と接続する三分岐浮線文のみを三分岐ハンガー状浮線文として、独立させて取り扱う。さらにその中から、下方の文様帯区画文との接続との有無によりCa類とCb類に分類する。変異型として、菱形文の中に数条の浮線が表出されるものが挙げられる。この文様モチーフは、群馬県千網谷戸遺跡や千葉県島八幡下遺跡、同県荒海貝塚などで散見される。

［文様モチーフD 類：二分岐ハンガー状浮線文］

この文様モチーフは、三分岐ハンガー状浮線文と同じく、浮線文土器群全般において一般的に見られる。菱形状の浮線文が、単段ないし千鳥格子状に施文され、浅鉢や深鉢、甕に付される。他の文様モチーフが体部文様帯に施文される例が殆どであるのに対し、この文様モチーフについては波状口縁を持つ土器において口辺部から施文される例が、荒海貝塚などで確認されている。千鳥格子状の二分岐ハンガー状浮線文は、新潟県青田遺跡の調



第６図　表出手法Ⅰ類とⅡ類で共有される文様モチーフ



第７図　貼り瘤手法

査成果から、鳥屋2a 式から鳥屋2b 式に至るまでの長期間にわたって存続するモチーフであることが判明している（荒川 2004）。

［**文様モチーフE 類：レンズ状浮線文**］

Ea 類：両凸レンズ状浮線文

Eb 類：平凸レンズ状浮線文

この文様モチーフは、杉田貝塚や荒海貝塚、三ノ倉落合遺跡、東京都田原遺跡などで見られ、浅鉢や深鉢、甕に付される。その名の通りレンズ状のモチーフが施されるが、上下両方に凸を持つものと下部にのみ凸を持つものの２種が存在し、鈴木正博は前者を「杉田型レンズ状浮線文」（鈴木正 1985）、後者を「重弧状浮線文」（鈴木正 2006）と命名した。また前者の文様モチーフについては、浮線輪郭内を沈線で描くものと、浮線で表出するものの２種に分類している（鈴木 1985）。本稿では、後者を「平凸レンズ状浮線文」と命名する。千葉県武士遺跡では、氷Ｉ式に特徴的な、２条の浮線により各辺が構成される菱形文モチーフとEb類が共伴する例が確認できる。変異型として、レンズ状文の接合部において、上下からの浮線のつまみ合わせが完全には行われず、平行沈線が残存するものが挙げられる。こうしたモチーフを持つ土器は、荒海貝塚や子和清水遺跡で確認されている。

次章では、設定した分類案に従い各モチーフの系統関係を探る。

５．文様モチーフの系統関係

５－１．B類とCb類の関係性

先行研究においてC類はA類である入り組み浮線文からの系統として捉えられることが多かった（鈴木正 1987）。しかしA類からC類への変遷から想定しうるのはCa類の存在であり、Cb類の存在に関してはこの系統では語りうることが出来ないであろう。しかしここにB類の存在を加味するとどうであろうか。子和清水遺跡だけでなく、一津遺跡や殿内遺跡でも変異型とした三角文の下に弧線状のモチーフを持つ例の存在が確認されている（第６図）。また先述のように、岩名天神前遺跡や西広貝塚においては複段の三角浮線文が確認されている。これらのことから、C 類の文様構成原理が多段の三角文の表出にあると仮定する。

次に口外帯と明確な頸部無文帯を持つ点から、氷Ｉ式中段階併行と思われる能満上小貝塚出土の浅鉢（第６図下段）に着目してみよう。この土器に付される文様モチーフは、一見するとE類にも思えるが、体部文様帯全体の陰刻部やモチーフ内部の沈線方向といった文様モチーフ表出手法に着目してみると、B類の変異型とした三角文＋弧線文というモチーフを削出する事が目的であったといえよう。

５－２．貼り瘤手法について

浮線文モチーフの表出手法としては、安藤の提唱したＩ類とII類による手法が知られてきた。しかし今回の検討では、それ以外の可能性を示す興味深い事例が確認された。それは子和清水遺跡出土の甕である。文様帯下部の沈線の途中で、要所要所に貼り瘤がなされることにより、Ca類風の文様モチーフが施文されている。また神奈川県中里遺跡でも、匹字文の下部に貼り瘤がなされ、最終的な文様モチーフとしてはB類を呈する土器が発見されている（第７図）。こうした現象は、まさに安藤が論じたように、モチーフが定型化され、それが定期的に採用されるに至った結果を表しているのではないだろうか。

また大洞A式では、こうした貼り瘤によって工字文を表出する手法が、後半段階から出現する事が確認されている（小林 1998、品川 2003）。この事実だけで、大洞式との併行関係を論じるわけにはいかないが、今後はこうした手法にも着目して分析を行う必要があるだろう。

おわりに

本稿では、千葉県域出土の浮線文土器群を対象に、その文様モチーフの分析を行った。繰り返し施文される文様モチーフを単位文として設定し、５類に分類した。そして、文様モチーフ表出手法に着目してその系統関係について２つの仮説を提示した。１点目は、B類の一部とCb類の間に系統関係が見られる点である。２点目は、従来考えられてきた２つの表出手法以外にも、貼り瘤手法という別の手法を指摘した。

今回の論考では、全ての文様モチーフについて系統関係を明らかにする事は出来ず、「雑感」を述べた程度のものに過ぎない。今後、段階設定を行う上では、文様モチーフ以外にも器形や文様帯構成との相関関係、さらには肩部文様と体部文様の関係性などについて改めて検討する必要がある。

謝辞

本稿の作成に当たっては、指導教員である早稲田大学文学学術院･高橋龍三郎教授からご指導とご助言を賜った。また、早稲田大学考古学研究室の諸兄にもご協力を賜った。

末筆ながらここに記し、深く御礼申し上げる。

註

（１）文様モチーフに特徴があるという性質上、「浮線網状文土器群」という名称の方が正確ではあるが、頁数の関係上、本稿では「浮線文土器群」と呼称する。

引用文献

荒川隆史 2004「第Ⅶ章3 青田遺跡における縄文時代晩期終末の土器編年」『青田遺跡（本文・観察表編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書 第133集 p261–281

安藤広道 1988「横浜市西之原遺跡採集の縄文時代晩期浮線文土器について」村上徹君追悼論文集編集委員会編『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会 p85–98

石川日出志 1985「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37–４信濃史学会 p152–169

石川日出志 1988「鳥屋式土器の構成と意義」『豊栄市史 資料編1』豊栄市 p335–352

石川日出志 1991「縄文時代晩期浮線文土器出現期の編年と諸様相　—新発田市村尻遺跡B区の資料紹介を兼ねて—」『北越考古学』４北越考古学研究会 p9–22

石川日出志 1993「鳥屋２b式土器再考」『古代』95 早稲田大学考古学会 p208–225

磯崎正彦 1957「新潟県鳥屋の晩期縄文式土器」『石器時代』４石器時代文化研究会 p22–35

大坂　拓 2012「第４章第３節 本州島東北部における初期弥生土器の成立過程　—大洞Ａ’式土器の再検討と特殊工字文土器群の提唱—」『江豚沢Ⅰ』 p144–181

上総国分寺台遺跡調査団 1977『西広貝塚』早稲田大学出版部

かながわ考古考古学財団 1997『中里遺跡（No.31） 西大竹上原遺跡（No.32）』かながわ考古資料刊行会

小林圭一 2018「亀ヶ岡式土器とその年代観」『季刊考古学別冊25号 「亀ヶ岡文化論」の再構築』雄山閣 p28-35

小林正史 1998「土器の文様はなぜ変わるか　—東北地方の縄文晩期後半の単位文様を例として—」『氷遺跡発掘資料調査図譜第３冊』氷遺跡発掘資料調査図譜刊行会 p47–91

佐倉市大崎台B 地区遺跡調査会 1987『大崎台遺跡Ⅲ』

財団法人市原市文化財センター1995『千葉県 市原市能満上小貝塚』 福山通運株式会社・武蔵屋商事株式会社・財団法人市原市文化財センター

財団法人印旛郡市文化財センター 1991『向台Ⅱ遺跡』

財団法人千葉県文化財センター 1990『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』

財団法人千葉県文化財センター 1991a『銚子市余山貝塚』 千葉県土木部

財団法人千葉県文化財センター 1991b『四街道市内黒田遺跡群』第2 分冊 千葉県住宅供給公社

財団法人千葉県文化財センター 1994『四街道市御山遺跡(1)』第2 分冊 住宅・都市整備公団

財団法人千葉県文化財センター 1996『市原市武士遺跡１』第2 分冊 千葉県水道局

財団法人福島県文化センター（遺跡調査課） 1986『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会

設楽博己 1982「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34–４信濃史学会 p335–377

品川欣也 2003「器種と文様,そして機能の相関関係にみる大洞A式土器の変遷過程」『駿台史学』119駿台史学会 p97–134

杉原荘介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』２–１東京考古學會 p17–48

鈴木加津子 1997「「桂台式」考　—利根川下流域の浮線文以前—」『利根川』18利根川同人 p38–43

鈴木公雄 1963「千葉県山武郡横芝町姥山山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』36–１三田史学会

p67–94
鈴木正博 1985「「荒海式」生成論序説」滝口宏編『古代探叢Ⅱ　—早稲田大学考古学会創立35 周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部 p83–136
鈴木正博 1987「続大洞A２式考」『古代』84早稲田大学考古学会 p110–133
鈴木正博 2006 (1985提出）「三河・尾張に於ける浮線文系土器群の編年的位置について」『いちのみや考古』20一宮考古学会 p51–82
薗田芳雄 1950「千網谷戸石塚調査概報」『両毛古代文化』２両毛考古学会 p1–20
薗田芳雄 1972『千網谷戸C-ES 地点の調査』両毛考古学会
田部井功 1985「縄文晩期・浮線文土器の研究—文様の構造と系統について—」滝口宏編『古代探叢Ⅱ　—早稲田大学考古学会創立35 周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部 p63–82
千葉市教育委員会 1987『子和清水遺跡・房地遺跡・一枚田遺跡』
寺村光晴 1956「新潟県三島藤橋遺跡」『上代文化』26国学院大学上代文化研究会 p43-50
中沢道彦 1998「「氷1 式」の細分と構造に関する試論」『氷遺跡発掘資料調査図譜 第３冊』氷遺跡発掘資料調査図譜刊行会 p１–21
中沢道彦 1999「中部地方　晩期（浮線文土器群）–氷Ⅰ式を中心に–」『縄文時代』10–2縄文時代文化研究会 p85-103
永峯光一 1969「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』９石器時代文化研究会 p１–54
成田市郷部北遺跡調査会 1984『成田市郷部北遺跡 調査概要（加定地・殿台遺跡）』
西村正衛 1961「千葉県成田市荒海貝塚（予報）」『古代』36早稲田大学考古学会 p１–18
堀之内上の台遺跡発掘調査団 1979『千葉県夷隅群大多喜町堀之内上の台遺跡』 千葉県夷隅郡大多喜町教育委員会
山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』１–３東京考古学会 p１–19
渡辺修一 1991「南関東地方における畿内第I 様式並行期の土器群とその変遷」第１回東日本埋蔵文化財研究会実行委員会編『第１回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容　—第Ⅰ分冊 研究発表概要・追加資料—』東日本埋蔵文化財研究会 p68–83
渡辺修一 1994「Ⅷ補論 縄文晩期終末から弥生中期前半の土器群について」『四街道市御山遺跡（１）』千葉県文化財センター p164–177

図表出典一覧

第１図　石川1985より引用
第２図　安藤1988より引用
第３図　カシミール３Dを用いて筆者作成
第４図　財団法人福島県文化センター（遺跡調査課）1986と財団法人千葉県文化財センター 1991bを用いて筆者作成
第５図　筆者作成
第６図　財団法人市原市文化財センター1995と千葉市教育委員会 1987を用いて筆者作成
第８図　かながわ考古考古学財団 1997を用いて筆者作成

第１表　小林圭2018を一部改変

研究ノート

溯航　第39号　59-68頁　2021年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

エジプト第１中間期から中王国時代における木製模型研究

―食糧供物儀礼を示す2次元資料との比較研究の可能性―

宮崎澪菜

要旨

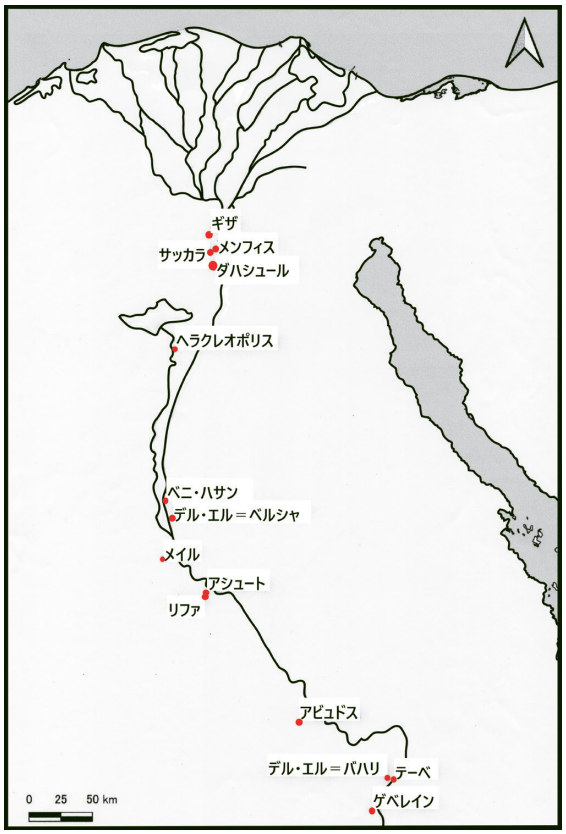
木製模型は、古王国時代末から中王国時代にかけて当時の人々の生活風景や船などを模型として表した副葬品である。来世で死者に付随し、食糧を永遠に供給する召使であり、食糧供物儀礼を示すという象徴的な機能をもつと考えられている。先行研究では、全地域から出土した資料が集成され、地域ごとの出土数、特徴の抽出や型式編年研究がなされた。しかし、埋葬のコンテクストを重視した研究は進んでいないといえる。また、木製模型以外にも食糧供物儀礼を示す資料が多数、同時期に副葬された。よって、当該時代の副葬品の代表といえる木製模型は同様の機能を持つ様々な副葬品とともにどのような意図で選択されて副葬されたのかということを検討する必要があると考える。また、そういった選択は被葬者や地域によって異なるため、比較を行うことで、埋葬の理想形であったため副葬されたのか、あるいは他の墓との差別化を図るために模型化して副葬したのかなどという木製模型の新しい役割を提示することに繋がると考えた。本稿では、木製模型は２次元資料である壁画・レリーフ資料の3次元化と考えられているため、同時代に副葬された食糧供物儀礼を示す２次元、３次元資料の比較研究について述べ、この研究の方法について提示することを目的とした。

キーワード：木製模型、２次元資料、３次元資料、食糧供物儀礼

はじめに

木製模型は、古王国時代第６王朝末から中王国時代第12王朝前半にかけて主にエリート層の墓から出土した副葬品である。死者への食糧供物儀礼を表現することが象徴的機能の一つであり、特定の時代にのみ利用されたといえる。その一方で当時の副葬品のうち、図像・文字資料の２次元資料なども食糧供物儀礼を表現した。本稿では、形態は異なるが、同様の機能を持つ副葬品が被葬者によってどのような意図で使い分けられたのかということに着目する。また、木製模型の新たな機能の解明を目的とする研究の一試案を提示する。これまで木製模型は各地域の出土数や場面ごとでのデザインの地域性（Tooley 1989）、型式編年（Diemer 2017）などの遺物単体に注目した研究がされてきた。また、図像資料との類似から、その複製、３次元化した資料と考えられており（Spencer 1982: 67; Tooley 1995: 8; Taylor 2001: 99; Robins 2008: 74-75）、墓内では図像資料の代用品だと考えられている（Tooley 2019: 532）。そのため、それら壁画やレリーフは木製模型の場面を特定するための類例として提示されるに留まっている。しかし、木製模型は埋葬アセンブリッジの一つであり、共伴する食糧供物儀礼を示す副葬品の種類も様々であるため、横断的に比較検討することが必要であると考える。木製模型は当該時代を特徴づける副葬品であるが、被葬者、地域によって食糧供物儀礼を示す副葬品の選択は異なる。よって、このような検討を行うことで木製模型はこの儀礼を示す副葬品の中でも、どのような意味付けがされたのかを明らかにすることが可能だと考える。加えて、これは最終的に当時の埋葬習慣研究にも寄与すると考えられる。したがって本稿では、この研究の方法について述べることを目的とする。なお本稿では木製模型を３次元資料、その比較対象となる壁画・レリーフ、ステラ、棺の銘文・装飾を２次元資料と定義する。まず、２次元資料と３次元資料のうち各遺物に対してされてきた研究について述べたあと、木製模型と壁画・レリーフ資料を実際に並べて比較する。そして、葬送儀礼の一つである食糧供物儀礼を表現する２次元、３次元資料に限定し、その中で木製模型がもつ機能について考えたい。

第１図　牛に餌を与える人々



第２図　本稿で対象とする遺跡を示したエジプト地図

１．古代エジプトにおける２次元・３次元資料

１－１．模型とは

古代エジプトにおいて模型は、先王朝、初期王朝時代ごろから墓に副葬されていた。この当時は、土製で船や穀物倉が模型化されており、本稿の対象資料である木製模型の元型と考えられる（Tooley 2001: 424）。

A. M. J. トゥーリー（Tooley）は、副葬品として用いられた模型（Tomb models）を二種に分けて定義している（Tooley 2019: 532）。一つは船や醸造、パン作り、そして肉の加工などの調理している人々や穀物倉で穀物の量を記録する人々、供物を運ぶ人々といった当時の場面を３次元的に表現したもの、つまり本稿の対象資料となる木製模型を指し、これらは供物儀礼を示している。また、第６王朝末から中王国時代（第１表の網かけ部分）にのみ副葬されたと考えられている。もう一つは、副葬品を目的に作られた供物用の土器[(1)]、食糧、武器、工具、などの模型としている。これらは、実物よりも小型化されたり、ファイアンスやカルトナージュで作られたりと本来の素材とは異なる素材で作られた。供物用の土器であるミニチュア土器に与えられた役割を研究する矢澤は、「ミニチュアの容器は供物の代替物と考えられているが、このような模型が作られた背景には、古代エジプト人たちの、実物を象ったもの、もしくはそれを描いた図・文字が、被葬者や神々にとっては実物と同じ働きをするという考え方がある」と述べる（矢澤 2014：24）。さらに、彼は「供物そのものや、供物を捧げる行為などを描いた壁画、碑文、模型は、神殿や墓などで数多く発見されている。このような「擬似供物」は墓や棺、ステラ、パピルスに描かれる、もしくは副葬されることによって、永遠に死者や神々に供物を供給し続ける儀式的な装置として働いていた」と述べる（矢澤 2014：24）。これは、木製模型の機能としてもあてはまる考え方である（Tooley 2001: 424; 2019: 532; Diemer 2017: 173）。また木製模型は、供物儀礼を示す壁画やレリーフで描かれた場面との類似性から、２次元資料の複製、あるいは３次元化とも考えられている（Spencer 1982: 67; Tooley 1995: 8; Taylor 2001: 99; Robins 2008: 74-5）。そのため、装飾されていない墓に副葬された木製模型は壁画やレリーフの代替品と見なされている（Tooley 2019: 532）。

１－２．２次元資料と３次元資料について

本稿では、壁画やレリーフ、棺の装飾などで見られる図像・文字資料のことを２次元資料と定義する。これに対して、図像資料を立体的に表現したものを３次元資料と定義し、模型が該当する。両者の方法で表現された資料が当該時代の墓内で確認できる。前述したように、木製模型は壁画やレリーフに描かれた図像を模型化したものと考えられている。具体的にどのような図像であったのか、類似する点については後述するが、両者を比較する研究として、何の場面を表現したのか不明であった木製模型を同時代の墓の壁画に描かれた人物の配置や手足などの動きの類似から裁判の場面と特定したG. バーカー（Barker）の研究が挙げられる（Barker 2019）。また、こうした２次元資料と３次元資料の比較研究は他の資料でもなされている。例えば、オブジェクト・フリーズ（第10図赤枠部分）と呼ばれる中王国時代の箱型木棺の内側に描かれた図像研究のなかで、描かれた土器と実際に副葬された土器の器形を比較したS. アレン（Allen）の研究が挙げられる（Allen 2009: 331-332）。器形の類似から両者が同一のものだと特定した。また、E. テラス（Terrace）も棺に描かれた供物儀礼の場面で見られる土器と実際に副葬された土器の器形などを比較して、供物が入れられた器だと特定した（Terrace 1968: 64）。２次元資料と３次元資料を比較することで、どのような用途で使われていたのかを特定する研究が多くなされているといえる。また、木製模型に限らず、当該時代の埋葬において、多数の種類の副葬品が２次元、３次

元の両方の形態で表現されていたことが分かる。

こうした研究の一方で、H. ウィレムズ（Willems）によると、オブジェクト・フリーズでは、副葬品を描写しただけでなく、儀礼で必要な死者への副葬品の目録を示すことで、儀礼を抽象的に表していると考えられている（Willems 1988: 203）。彼の研究を踏まえて、山崎は特定の装身具と葬送儀礼との関係に着目している（山崎 2019）。彼女は、オブジェクト・フリーズで示された装身具の種類やその背景にある儀礼が実際に副葬された装身具にも反映されていると明らかにしており、２次元資料と３次元資料は単に、そのものを表現しあうだけでなく、それらが関係する儀礼も同様に表現していることが分かる。

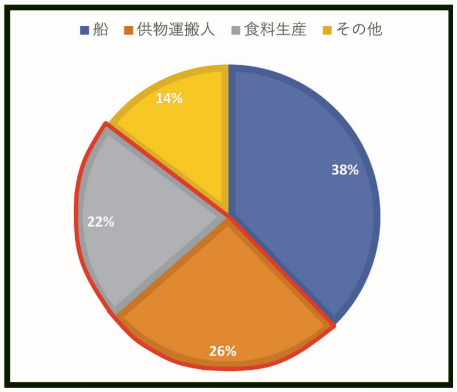
第１表　研究対象とする年表

古王国時代	前2543-2120年
第4王朝	前2543-2436年
第5王朝	前2435-2306年
第6王朝	前2305-2118年
テティ	前2305-2279年
ウセルカーラー	？－？
ペピ1世	前2276-2228年
メルエンラー	前2227-2217年
ペピ2世	前2216-2153年
第8王朝	前2150-2118年
第1中間期	前2118-1980年
第9・10王朝（ヘラクレオポリス）	前2118-1980年
中王国時代	前1980-1760年
第11王朝（テーベ）	前2080-1940年
メンチュホテプ1世	前1980-?
アンテフ1世	？-2067年
アンテフ2世	前2066-2017年
アンテフ3世	前2016-2009年
メンチュホテプ2世	前2009-1959年
メンチュホテプ3世	前1958-1947年
メンチュホテプ4世	前1947-1940年
第12王朝	前1939-1760年
アメンエムハト1世	前1939-1910年
センウセレト1世	前1920-1875年
アメンエムハト2世	前1878-1843年
センウセレト2世	前1845-1837年
センウセレト3世	前1837-1819年
アメンエムハト3世	前1818-1773年
アメンエムハト4世	前1772-1764年
セベクネフェル	前1763-1760年
第2中間期	前1759-1539年

２．木製模型の象徴的機能の先行研究

２－１．食糧供物儀礼について

木製模型は、前述したように供物儀礼を示すといった象徴的機能を持つ副葬品の一つとして用いられていたが、供物儀礼の中でも特に食糧供物を示すことが多かったといえる。なぜなら、トゥーリーによる全地域から発見された第６王朝から中王国時代に年代づけられる木製模型[(2)]を集成した結果をもとに（Tooley 1989: 68-72）、種類別に割合を算出したところ、食糧生産場面と食糧品などを運搬する供物運搬人が半数近く占めていることが分かったからである（第３図赤枠部分）。つまり、こうした食糧供物を示す場面を多く模型化し、各地域の墓に副葬されていたということである。よって、本



第３図　木製模型の種類別出土割合（n=768）

稿では木製模型は供物儀礼の中でも食糧供物儀礼を示すことに特化した副葬品と考える。以下では、食糧供物儀礼がどのようなものであったのか、木製模型以外にこの儀礼がどういった形態で埋葬内において示されたのかを述べ、木製模型の位置づけを行うこととする。

古代エジプトにおいて食糧供物儀礼は、人間が生き延びていくために最も必要な食糧を捧げる行為で、全時代を通じて形を変えながらこの儀礼は行われていた（Taylor 2001: 92）。先王朝、初期王朝時代ごろから実物の食糧が副葬されていたが、古王国時代になると、それらは徐々に副葬されなくなったと考えられている（Englund 2001: 566; Taylor 2001: 92）。また、供物儀礼全体にいえることだが、通常、こういった儀礼は死者の親族や司祭が行うのだが、長年続けることが困難となり、遠戚であればあるほど忘れられてしまう可能性も考えられる（Taylor 2001: 96）。そのため、呪術的な力があると見なされた文字と図像によって供物を表現した（Taylor 2001: 96）。具体的に、パン、ビール、牛、鳥が列挙され、これらは古代エジプト人にとって食糧の主要品目であったと考えられる（Taylor 2001: 96）。なかでも、文字で食糧名が表現されたものの1つである供養文（Offering formula）は墓の礼拝堂に配置されたステラや棺などの随所でみられる。さらに、古王国、中王国時代の棺や墓の礼拝堂の壁面には、四角の枠内にひとつひとつ供物名が列挙された供物リスト（a list of offerings）が刻まれた。供物リストでは、最も必要な供物のみが示された供養文と比べると、食糧はもちろんその他多くの供物が一覧化された（Taylor 2001: 97）。しかし、食糧とその他の供物が列挙されていたのは古王国時代初期までで、それ以降は食糧のみを表現したとも考えられている（Barta 1968: 587）。

文字資料の一方で、前述したミニチュア土器やピラミッド・ウェアなどの土器も食糧供物として副葬された。両者は、いずれもメンフィス・ファイユーム地域の王族

・高官の墓に副葬された（矢澤 2019：58）。ミニチュア土器は、実物の供物の代用品として古王国、中王国時代の墓で死者に捧げられた（矢澤 2014：23）。ピラミッド・ウェアは、センウセレト２世治世ごろから、副葬された精製土器である（矢澤 2019：56）。器形が、古王国時代の埋葬で使用された石製容器や土器といった供物容器の器形と類似しているため、これらの模倣と考えられている（Allen 2006; 2009）。どの表現でも当てはまるが、朽ちてしまう実物の供物に対して、永遠に供物を供給できるようにするために（Allen 2006: 20）、様々な形態で食糧供物儀礼が行われたことが分かる。

木製模型も上記で述べた理由と同様の背景のもと、登場したと考えられる。しかし、ここまで概観してきた食糧供物儀礼を表す他の副葬品と比較すると、木製模型は供物そのものを表現したり、またその代用品を使って儀礼を示すのではなく、人間が食糧を生産し、管理し、加工して、運ぶなどという一連の作業によって食糧供物儀礼を表現していることが分かる。しかしこれは、壁画・レリーフにも当てはまることである。それでは、木製模型にしか無い特徴は何であろうか。やはり、食糧供物儀礼において、３次元資料、つまり模型として人間の活動する姿を表現することが重視されて、利用されるようになったと考えられる。また、他の副葬品と比べると大量生産しづらいものだったと推定でき、希少価値があったと考えられる。しかしながら、エジプトの各地域で副葬品として、利用されたことが分かる（Tooley 1989; Diemer 2017）。よって、木製模型で表された食糧供物は当時の人々の理想形であり、一連の作業を模型として表すことで、被葬者は来世でも食糧をより確実に得られたといえる。

２－２．２次元資料との比較

前述したように、木製模型は墓の礼拝室に施された壁画やレリーフの複製、つまり、２次元資料を３次元化したものと考えられている（Spencer 1982: 67; Tooley 1995: 8; Taylor 2001: 99; Robins 2008: 74-75）。２次元資料も同様に召使として機能する（Tooley 1989: 175; 1995: 8）。よって、まずは木製模型の象徴的機能、表現の根源に関する資料として、当時の日常生活の活動が描かれる壁画やレリーフについて述べていくこととする。

２次元資料の一つである壁画、レリーフで日常生活における活動が描かれるようになったのは、第４王朝で、そのレパートリーは古王国時代を通じて増えていった（Robins 2008: 67）。レパートリーは主に以下の７カテゴリに分けられる（Kanawati 2001: 83-112）。

① 墓主人とその家族
② 農業生活
③ 漁業、野鳥狩り、砂漠での狩猟
④ 職人と産業
⑤ スポーツと娯楽
⑥ 葬送儀式
⑦ 来世

以上のような表現は呪術的に死者の永遠の生を保証すると考えられ（Dodson and Ikram 2008: 15）、王朝時代を通してエリート層の墓の礼拝堂に装飾された（Barker 2018: 7）。

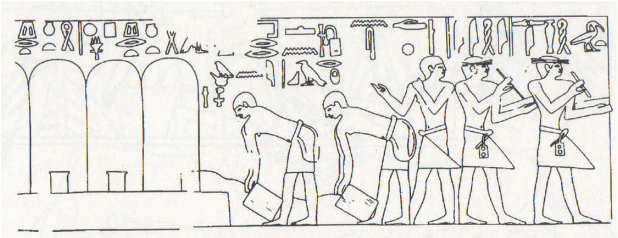
木製模型で表現される場面も主に以下の５カテゴリに分けることができる（Tooley 2005）。

① 農業と畜産
② 食糧の準備
③ 産業の過程
④ 供物運搬人
⑤ 船

２次元資料の７カテゴリと比較すると、多くのカテゴリが重複することが分かり、両者のデザインには明確な関係がある（Barker 2018: 7）。実際に比較すると、場面以外にもその構成や描写も重複することが分かる。第４図では、ドーム型の穀物倉に穀物を運び入れている二人の男性と、その横で書記たちが穀物の量を記録している姿が描かれている。一方、第５図は、穀物倉の木製模型である。第４図とは異なり、倉の屋根が無い。しかし、穀物を運び入れる人が二人、記録係の書記が一人いるのが確認でき、作業内容は同様であることが分かる。

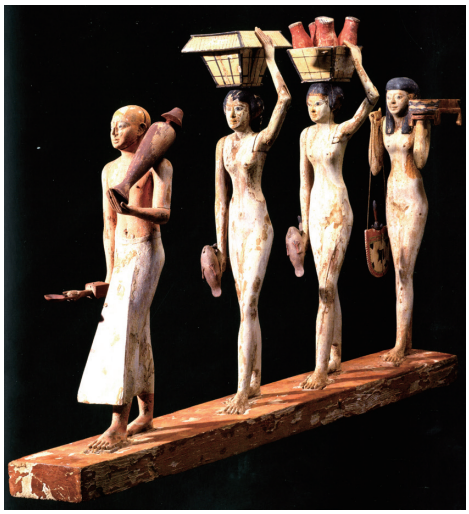
さらに、壁画やレリーフだけでなく墓や葬祭施設に置かれた石碑のステラでも類似する場面を確認できる（第６・７図）。第６図（赤枠部分）から第８図は、すべて供物運搬人であるが、どれも複数人が1列に並んでいる構成である。また、片方の手で野鳥の羽を持って運んでいるのが分かる。第７・８図では男女が並んでおり、どちらもかごの中には食料が入っており、頭上にのせて運ぶ姿が確認できる。

以上の２次元資料と木製模型を比較すると、場面の構成、さらに手足の動きにも共通点が見られる。

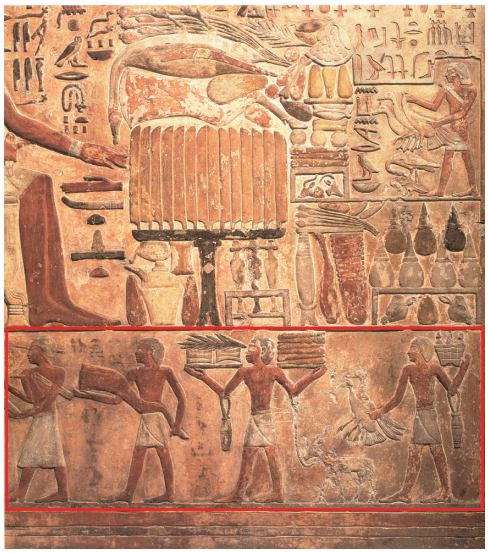


第４図　穀物の記録

第５図　穀物倉



第８図　供物運搬人の列



第６図　Meru の供物を示すステラ

第７図　Wehem-nefret のステラ

３．先行研究の問題点と解決方策

以上の先行研究において、木製模型の象徴的機能は、壁画やレリーフの複製とされるほど、２次元資料と同一と考えられている。しかしながら、同一とされているだけで、なぜわざわざ模型化したのかという理由は分かっていない。また、食糧供物表現の一つとされながらも、同時代に用いられた食糧供物表現を示す副葬品との関係性は分かっていない。そもそも、埋葬コンテクストの一部でありながら、遺物個々で研究がされているため、食糧供物表現という枠組み内で被葬者や地域などによってどのように表現形態が異なるのかは分かっていないのである。

以上のような研究の課題から、２次元資料と木製模型との使い分けについて分析する必要があると考えた。また、こうした観点からの分析は、木製模型の象徴的機能の再考察にもつながる。さらに、当該時代の埋葬では、共通の食糧供物儀礼を様々な形態で表現し、副葬したといえる。そのため、これら副葬品選択の意図は何であったのかを解明することで利用の様相を復元することができると考えた。

食糧供物を表す木製模型と２次元資料の使い分けを分析する際に、分析対象とする墓の被葬者は、王族などのエリート層であるが、そのなかでも、階層差があり、副葬品の内容も変化すると考えられる。さらに、墓構造も様々であり、埋葬形態にも影響を与えると考えられる。そのため、まずは、分析対象である木製模型と２次元資料である壁画・レリーフ、ステラ、棺の銘文・装飾という項目を設け、どの方法で食糧供物儀礼を表現したのかで分類する。そして、その分類結果を階層、墓構造に照らし合わせ、特定の傾向が見られるのかを分析する。

そこで、以下では現在、先行研究で明らかにされていることを踏まえながら、具体的な研究方法を提示したい。

４．木製模型と２次元資料の使い分け

４－１．分析対象の特徴

当時の埋葬で主に確認できる食糧供物表現は、木製模型と２次元資料の壁画・レリーフ、ステラ、棺の銘文・装飾である。よって、それぞれがどのような特徴であるのかを述べる。

まず、木製模型における食糧供物表現は、主に供物運搬人像、醸造、パン作り、肉加工、穀物倉である。供物運搬人像は、男女で単体や第8図のように複数人が一列をなす像が確認されている。また、女性像は主にペアで作られており、これは上下エジプト、秩序と混沌などといったエジプト人の対になるイデオロギー的概念と関係していると考えられている（Tooley 1995: 26）。男性よりも女性の立像が多く、左足を前に出して歩行し、頭上に食糧を入れたかごを片手で支え、もう一方での手で野鳥の羽をつかんでいる姿である（Tooley 1995: 22-23）。男性像も同様であるが、食糧だけでなく、家具や布などを運ぶ姿も確認されている（Tooley 1995: 26）。大型のもので高さ１m以上であるが、30cm～60cmほどの高さが大半である。パン作りは、穀物からパンになるまでのすべての過程を表現するものはあるものの、大半は醸造とセットで模型化されている（Tooley 1995: 29）。そこでは女性が膝をついて粉をひき、窯の前に座り生地を焼いたり、その横で男性が腰くらいの高さのある大桶のなかでパン生地を練ったり、ビールの原料となる麦芽汁を圧搾している（Tooley 1995: 31）。肉加工は、複数人で脚を縛った牛の喉を刃物で切っている場面が多い。また、その際に牛などの動物の近くで血液をボウルに入れる人がいるのだが、小麦粉と混ぜ合わせられてプリンのように調理されたと考えられている（Tooley 1995: 32）。また、ガチョウなどの野鳥の胴体を調理用に処理する場面も確認されている（Tooley 1995: 32）。第11王朝から第12王朝にかけてパン作り、醸造、肉加工が１つの台の上で表現され、複合模型となっていく（Tooley 1995: 34）。穀物倉は、その名の通り、穀物を貯蔵しており、ドーム型と箱型（flat-roofed）に分けられる（Tooley 1995: 36）。ドーム型は壁画で描かれていることが多く（第４図）、木製模型では箱型で表現される（Tooley 1995: 37-38）（第５図）。複数人が仕切られた箱の中で、穀物が入った粗布の袋から穀物を出し、貯蔵された量を記録する人もいた（Tooley 1995: 39）。また、数例であるが、本物の穀物を入れた木製模型も確認されている（Tooley 1995: 40）。

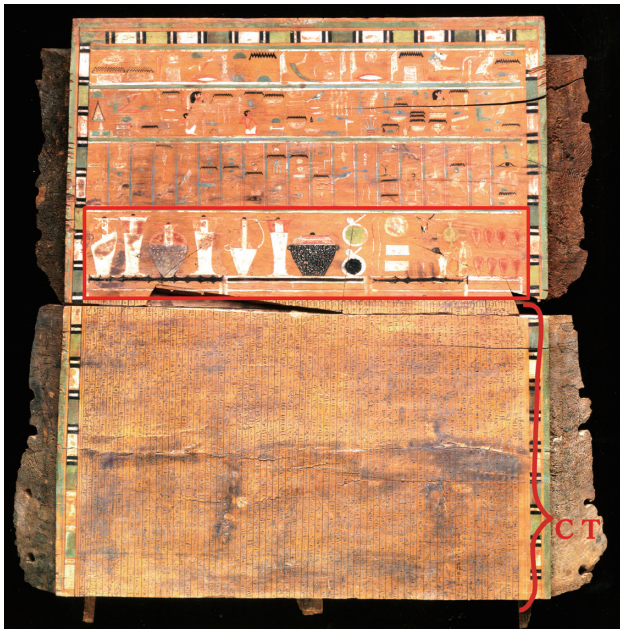
壁画・レリーフで表現される食糧供物は２－２で示したように、多くの場合人物が伴っていたが、中には食糧のみが描かれた壁画もある。サッカラ南部で発見された第６王朝から第１中間期ごろのSabiという人物の墓は、壁画がほぼ完全な状態で残されている（Dobrev 2016）。第９図で示したように、一番奥には７つの穀物倉が確認でき、さらに左側には肉、鳥、パン、野菜、ミルクが入った容器、ビールなどが描かれている（Dobrev 2016: 115-116）。

第９図　Sabi 墓の埋葬室

ステラも、第６・７図で示したような供物運搬人を示すだけでなく、食糧供物が積まれている卓の前で死者本人とそのパートナーが並んでいる姿が表現されているものもある（Hayes 1953: 330）。家族に付き添われ、食糧の準備がなされた様子が分かる。また、死者への供養が永続することを祈った内容が記されている供養文と呼ばれる定型文（吉村 2015：138）、王や死者の名前、称号が刻まれたりと、様々な描写が確認できるが、パンや肉などの食糧が共通して描かれており、食糧供物を示していることが分かる。

最後に棺の銘文、装飾でも食糧供物について表現されている。第６王朝ごろに、それまでは外観がシンプルであったにも関わらず、銘文や装飾が施されるようになった（和田 2014：204）。死者に対して供物を捧げる際に唱えられた呪文、ヘテプ・ディ・ネスウト文とアイ・パネルである（和田 2014：204-205）。ヘテプ・ディ・ネスウト文中に記されるペレト・ケルウ文では供物の嘆願が示されており、当時の棺の銘文パターンであったが（Willems 1988: 124）、第１中間期にあたるベルシャで発見されたHenuの棺には、ヘテプ・ディ・ネスウト文が記されるも、ペレト・ケルウ文は含まれなかった

（Meyer 2018: 228）。ペレト・ケルウ文は中王国時代に一般的に記されるようになるとも考えられているが（Spanel 1985: 246）、時代差があったのか不明である。さらに、第１中間期から中王国時代にかけての箱型木棺の内側には、前述したオブジェクト・フリーズと呼ばれる装身具や武器などの品々の絵が並ぶ装飾帯が描かれた（第10図赤枠部分）。主に、食糧以外の供物が描かれるのだが、頭部面と足部面にのみ食糧が描かれているため（Willems 1988: 203）、食糧供物儀礼を示す副葬品といえる。またそれ以外の区画には前述した供物リストやコフィンテキスト（以下CT）（第10図）と呼ばれる死者が来世に行く際に助ける呪文が描かれた（Willems 1988: 231）。供物リストは、CTに先行し、５つに分類できるリストのうち（Barta 1968: 587）、本研究の対象となるのは口開けの儀式と食糧供物儀礼の組み合わせた儀礼を反映したリストが刻まれた棺である。CTは、オブジェクト・フリーズ同様に木棺の内側に記されている。前述したようにオブジェクト・フリーズにおいて描かれた食糧に対応して、絵の真下に食糧供物儀礼に関連することが記された（Willems 1988: 232）。



第 10 図　外棺の頭部内側の装飾

４－２．階層について

木製模型、２次元資料を用いた被葬者は、王に仕えた宮廷役人からそれに仕えた者、また州侯やその延臣や彼らのもとで州政治を行う役人といった階層の人々である。本稿の対象時代の社会は王の権力が弱まり、国家の再形成を果たす時代であったため、特に、地方の支配者たちは勢力をもっていた。それは、大規模な墓の造営や地域ごとに副葬品をはじめとした物質文化が発展していたことから明らかである。さらに、木製模型被葬者は、第６王朝ごろまでは、称号を持った人に限定されていたが、第９、10王朝ごろになると、称号を持たない人々も副葬し始めた（Tooley 1989: 375）。こうした称号を持たない被葬者は、称号をもつ者と親族関係を持つことで、木製模型を副葬することができたと考えられている（Tooley 1989: 375-376）。

当時の装身具に限定した研究であるが、山崎 2018では王族、非王族間における装身具選択の違いを分析している。両者には、素材まで共通して利用された装身具・護符が数多く存在することが明らかにされており、一部の装身具以外は価値の高い素材であっても自由に選択できたと考えられている（山崎 2018：525）。つまり、当時は特定のものを除くと、副葬品選択には階層差を超えた共通性があったと考えられる。

４－３．墓構造

当該時代の墓で大半の地域で確認できる構造は、シャフト墓と呼ばれるもので、主にシャフト部（竪穴）と埋葬室によって構成されるが、平面形、深さ、部屋数、部屋の配置、長軸の方位、壁面装飾の有無などには違いがある（矢澤・吉村 2015：198）。ベニハサンでは800基以上のシャフト墓が造営されている（Garstang 1907）。墓の入口は約１m四方であるが、シャフト部の深さは４mほどの浅いものがあれば、８mと深いものもあり、統一性が見られない。さらに、埋葬室の規模は全体的に棺とその他の副葬品が入れられるほどの大きさで必要以上の広さはなく、長さ約２m、幅約80cmであるが、高さは80cmほどの低いもの、1.5mほどの高いものがあり、70cmほどの差がある（Garstang 1907）。部屋数も、１室や３室で、１つの遺跡内でも、墓の規模や構成は様々である。

矢澤・吉村 2015では、ダハシュール北遺跡のシャフト墓を、その規模によって、Small、Middle、Largeと分類され、その規模・形状と副葬品の内容との関係について整理されている。特に、副葬品の内容についてはSmallとMiddleを境に明確な差があることが確認された（矢澤・吉村 2015：205-206）。さらに、MiddleとLarge間にはシャフト部の深さに大差があり、墓造りにかかる労働量の多寡は両者間の経済的な格差を示すと考えられた（矢澤・吉村 2015：206-207）。

中王国時代はベニハサン、アシュート、ベルシャなどの中部地域、テーベなどの南部地域では、州侯などの岩窟墓が造営され、現在でも残存状況の良好な例が多い（Grajetzki 2003: 43）。被葬者によって、礼拝堂が付属

し、その下に複数のシャフト墓を有する。アシュートの出土例では、第11王朝から第12王朝初期にあたるNhtiという男性を含む家族墓が確認されているが、礼拝堂付きでその下にはシャフト構造で４室の埋葬室に続いており、Nhtiの埋葬室は長さ約2.5m、幅約1.5mである（Zitman 2010a; 2010b）。さらに、地上にベンチ型の上部構造をもつマスタバ墓が第12王朝初期の宮廷役人たちによって再度採用された。宮廷の共同墓地がテーベから北部のリシュトに移ったことで、メンフィス地域で主に造営された。また、マスタバ墓は内室の有無で２種類に分けることができる（Grajetzki 2003: 45）。リシュトやメンフィスでは内室を伴い、小規模であるが古王国時代のものと類似する偽扉が表現されている。さらに、リシュトの高官であったIntefiqerのマスタバ墓では破片であるが、供物の場面が描かれていたことが確認されている（Grajetzki 2003: 44-45）。

このように当時の墓の形態や構造は、地域や被葬者の階層などによって異なることが分かる。

４－４．分析視点

以上の先行研究で明らかにされてきた当時の埋葬例から、木製模型と２次元資料の使い分けを特定するために、今後は以下のような視点での分析を行うことが有効であると考える。

（１）食糧供物表現の方法
（２）階層差
（３）墓構造

（１）は、各墓で確認できる食糧供物表現の出土コンテクストに着目した考古学的視点である。木製模型のように３次元的に表現したのか、あるいは壁画やレリーフ、または文字資料である棺の銘文などのように２次元的に表現したのか、さらにそこには組み合わせがあったのかという検討である。例えば、埋葬室１室で、木製模型は供物運搬人のみが副葬されるが、２次元資料では醸造、パン作りといった場面が描かれている場合、表現する対象によって表現方法を変えていることが想定できる。

（２）は、階層ごとに（１）で確認した表現方法に一貫性があるのかを検討する。前述したようにエリート層のなかでも階層差はあるため、発掘報告書等で確認できる範囲内であるが、明らかにされている称号をもとに、階層と食糧供物の表現法との相関性を検討したい。例えば、前述したSabiという人物はエリート層のなかでも、低い階層だと推定されているが、埋葬室の壁に食糧が描かれており、そうした装飾は他の階層でも見られるのか、比較的高い階層で確認できないのであれば、そういった装飾は他の表現法よりも低い階層の人々に選択されたのかなどという可能性を指摘できる。

（３）は、４－３でも述べたように、当時の墓構造は多様であり副葬品の内容との関係性が明らかにされていることから、木製模型と２次元資料の選択にも影響を及ぼすのか検討する。

このような観点の分析により、木製模型と２次元資料の選択に階層差や墓構造との相関性、一定の法則性を見いだせた場合、当時の人々が抱いた「模型化」すること、３次元的に表現する意味が何だったのかを指摘でき、また、木製模型が比較的高い階層に選択されていたとしたら、多く用いられる２次元資料では表現しないことで他の階層との差別化を図るために副葬したという可能性を指摘できる。そのため、単に被葬者の召使として食糧を捧げる役割をもって副葬されただけではなく、様々なコンテクストの兼ね合いのもと、選択され、副葬されたことを示唆できる可能性がある。

おわりに

本稿では、分析の一試案を提示してきた。現在、発掘報告書などをもとに分析対象となる埋葬例を集積している段階であるが、写真や図で確認できるものが限定されており、そうした資料を中心的に扱っていくこととなる。そのため、地域によって資料数にばらつきが生じる可能性があることが課題として挙げられる。ただし、上記のような目的を達成するには、量的ではなく質的分析がより重要であり、ひとつひとつの埋葬コンテクストを詳細に見ていくことで木製模型を用いた埋葬の思想的背景や意図されたことを具体的に復元することができると考えられる。

謝辞

本稿を書くにあたり、日頃からご指導いただきました早稲田大学文学学術院の近藤二郎先生に感謝申し上げます。また、早稲田大学考古学研究室の大学院生の方々にも丁寧なご指導やご助言をいただきました。ここで感謝の意を表させていただきます。

註

（１）Allen 2006では、供物用の土器を「ミニチュア」と「模型」に分けている。前者を実物よりも小型化されたものであるが、本来の容器としての機能をもつものとする（Allen 2006: 21）。後者は、多くが実物よりも小型化されているが、なかには同じスケールのものもある。しかし、実物が石製のものを木製とするなど

容器としての機能をもっていない（Allen 2006: 21）。本稿では「ミニチュア」は通常、実物を小さい縮尺で作った「模型」（矢澤 2014：24）とする。

（２）Tooley 1989: 67では、中王国時代ではなく第13王朝/17王朝とされているが、センウセレト３世ごろまでの資料も含まれているため、トゥーリーの集成のまま割合を算出した。また、破片を除いた。

引用文献

矢澤　健 2013「エジプト中王国時代のファウンデーション・デポジットのミニチュア土器について」吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会編『永遠に生きる―吉村作治先生古稀記念論文集』中央公論美術出版 p539-552

矢澤　健 2014「エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について」『西アジア考古学』15　日本西アジア考古学会 p23-46

矢澤　健 2019「古代エジプトの供献土器に見られる精製と粗製」『古代』145　早稲田大学考古学会 p55-77

矢澤　健・吉村作治 2015「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について―遺構の形状・規模・分布の分析―」『オリエント』58　日本オリエント学会 p196-210

山崎世理愛 2018「エジプト中王国時代の装身具研究－装身具選択とその社会的背景の考察を中心に－」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63 早稲田大学大学院文学研究科 p523-525

山崎世理愛 2019「エジプト中王国時代の葬送における装身具のカテゴリとその役割について」『西アジア考古学』20　日本西アジア考古学会 p35-53

吉村作治 2015『国立カイロ博物館所蔵　黄金のファラオと大ピラミッド展』TBSテレビ

和田浩一郎 2014『ポプラ新書031古代エジプトの埋葬習慣』ポプラ社

Allen, S. 2006 Miniature and Model Vessels in Ancient Egypt. In M. Bàrta (ed.) *The Old Kingdom Art and Archaeology: Proceedings of the conferences held in Pregue, Mai 31- June 4, 2004*.: 19-24. Prague: Publishing House of the Academy of Sciences of the Czech Republic.

Allen, S. 2009 Funerary Pottery in the Middle Kingdom: Archaism or Revival? In P. D. Silverman, K. W.Simpson and J. Wegner (eds.) *Archaism and Innovation: Studies in the Culture of Middle Kingdom Egypt*.: 319-339. New Heaven and Philadelphia: Yale Egyptological Seminar. University: Department of Near Eastern Languages and Civilizations.

Baines, J. and Malek, J. 1980 *Atlas of Ancient Egypt*. Oxford: Phaidon.

Barker, G. 2018 Funerary Models and Wall Scenes. The Case of the Granary. *GM* 254: 7-13.

Barker, G. 2019 Classification of a Funerary Model: The Rendering of Accounts Theme. *JARCE* 55: 5-13.

Barta, W. 1968 Opferliste. In W. Helck and E. Otto (eds.) *Lexikon der Ägyptologie IV*.: 587. Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Breasted, Jr. J. H.. 1948 *Egyptian Servant Statues.* New York: Pantheon Books.

Diemer, E. G. 2017 From the Workshop to The Grave: The Case of Wooden Funerary Models. In G. Miniaci, M. Betrò and S. Quirke (eds.) *Company of Images: Modelling the Imaginary World of Middle Kingdom Egypt (2000-1500 BC).: 133-192*. Leuven; Paris; Bristol: Peeters.

Dobrev, V., Laville, D. and Onézime, O. 2016 Nouvelle découverte à Tabbet el-Guech (Saqqâra-sud) Deux tombes de prêtres égyptiens de la VIe dynastie. *BIFAO* Vol. 115: 111-144.

Dodson, A. and Ikram, S. 2008 *The Tomb in Ancient Egypt: Royal and Private Seplchres from the Early Dynastic Periods to the Romans*. London: Thames & Hudson.

Egyptian Museum of Turin 1988 *Egyptian Civilization Dairy Life. Instituto Bancario San Paolo di Torino*. Turin: Istituto Bancario San Paolo di Torino.

Englund, G. 2001 The offering cult for the dead. In D. B. Redford (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt Vol. 2*.: 566. Oxford: Oxford University Press.

Freed, E. R., Berman, M. L., Doxey, M. D. and Picardo, S. D. 2009 *The Secret of Tomb 10A Egypt 2000BC*. Boston: Museum of Fine Arts.

Garstang, J. 1904 *Excavations at Beni Hasan(1902-1903-1904)*. ASAE 5: 215-228.

Garstang, J. 1907 *The Burial Customs of Ancient Egypt as Illustrated by the tombs of the Middle Kingdom. Being a Report of Excavations Made in the Necropolis of Beni Hassan during 1902-3-4.* London: University of Liverpool. Institute of Archaeology.

Grajetzki, W. 2003 *Burial Customs in Ancient Egypt: Life in Death for Rich and Poor.* London: Bristol Classical Press.

Grajetzki, W. 2014 *Tomb Treasure of the Middle Kingdom: The Archaeologyof female Burials.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Grajetzki, W. 2006 *The Middle Kingdom of Ancient Egypt: history, archaeology and society.* London: Bristol Classical Press.

Hayes W. C. 1953 *The Scepter of Egypt: Vol. 1 From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom.* New York: Metropolitan Museum of Art.

Hornung. E, Krauss. R, and Warburton, D. A. 2006 *Ancient Egyptian Chronology*. Liden: Brill.

Kanawati, N. 2001 *The Tomb and Beyond: Burial Customs of Ancient Egyptian Officials*. Warminster: Aris & Phillips.

Meyer, D. M. 2018 Reading a burial chamber: anatomy of a first intermediate period coffin in context. In Taylor, H. J. and Vandenbeusch, M. (eds.) *Ancient Egyptian Coffins Craft traditions and functionally*: 217-229. Leuven-Paris-Bristol: Peeters.

Pardey, E. M. 1984 Scheingaben. In W. Helck and E. Otto (eds.) *Lexikon der Ägyptologie V*.: 560-563. Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

Richards, J 2005 *Society and Death in Ancient Egypt.* Cambridge: Cambridge University Press.

Robins, G. 2008 *The Art of Ancient Egypt*. Cambridge: Harvard University Press.

Roth, A. M. 2002 The Meaning of Menial Labor: 'Servant Statues' in Old Kingdom Serdab. *JARCE* 39: 103-21.

Shaw, I. 2000 *The Oxford History of Ancient Egypt*. Oxford: Oxford University Press.

Spencer, A. J. 1982 *Death in Ancient Egypt*. Harmondsworth: Penguin Books.

Spanel, B. D. 1985 Ancient Egyptian Boat Models of the Herakleopolitan Period and Eleventh Dynasty. *SAK* 12: 243-53.

Taylor, J. H. 2001 *Death and the Afterlife in Ancient Egypt*. London: British Museum Press.

Terrace, E. 1968 *Egyptian Paintings of the Middle Kingdom.* London: George Allen & Unwin Ltd.

Tooley, A. M. J. 1989 *Middle Kingdom burial customs: a study of wooden models and related material*. University of Liverpool, PhD. Thesis.

Tooley, A. M. J. 1995 *Egyptian Models and Scenes*. Buckinghamshire England: Shire Publications Ltd.

Tooley, A. M. J. 2001 Models. In D. B. Redford (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt Vol.2*.: 424-28. Oxford: Oxford University Press.

Tooley, A. M. J. 2005 Models. In D. B. Redford (ed.) *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt Vol.2*.: 370-3. Oxford: Oxford University Press.

Tooley, A. M. J. 2019 Tomb Models. In L. K. Sabbahy (ed.) *All things Ancient Egypt, An Encyclopedia of the Ancient Egyptian World Vol. 2*.: 532-535. California; Colorado: Greenwood.

Willems, H. 1988 *Chests of Life: A Study of the Typology and Conceptual Development of Middle Kingdom, Standard Class Coffins*. Leiden: Ex Oriente Lux.

Zitman, M. 2010a *The Necropolis of Assiut: A Case Study of Local Egyptian Funerary Culture from the Old Kingdom to the End of Middle Kingdom, Text*. Leuven; Paris; Wapole MA: Peeters.

Zitman, M. 2010b *The Necropolis of Assiut: A Case Study of local Egyptian Funerary Culture from the Old Kingdom to the End of Middle Kingdom, Maps, Plans of Tombs, Illustrations, Tables, Lists.* Leuven; Paris; Wapole MA: Peeters.

図表出典一覧

第１図　Freed, Berman, Doxey and Picardo 2009: 161, fig.119.

第２図　Baines and Malek 1980 をもとに筆者作成。

第３図　Tooley 1989: 68-72 をもとに筆者作成。

第４図　Kanawati 2001: 89, fig.94.

第５図　Freed, Berman, Doxey and Picardo 2009: 162, fig.121.

第６図　Egyptian Museum of Turin 1988: 54, fig.56. 一部加筆。

第７図　Egyptian Museum of Turin 1988: 200, fig.278.

第８図　Freed, Berman, Doxey and Picardo 2009: 152, fig.113.

第９図　Dobrev 2016: 131, fig.13.

第10図　Freed, Berman, Doxey and Picardo 2009: 109, fig. 69. 一部加筆。

第１表　Hornung 2006 から引用。

研究ノート

溯航　第 39 号　69-74 頁　2021 年２月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

再利用された中王国時代に起源をもつテーベ西岸の岩窟墓について

アブデルアール・アハメド

要　旨

E・ジョベック（Dziobek）は、イネニ墓（TT 81）の発掘調査において、ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓の中で、元来は中王国時代に造営された岩窟墓であったが、未完成のまま使用されずに残され、第18王朝前期に再利用された墓が存在していることを指摘した。本稿では新王国時代以降に再利用された中王国時代に起源を持つと考えられる岩窟墓を検討した。その中で中王国第11王朝に起源を持つ岩窟墓が存在していることが明らかになったが、一方では、それらの墓の起源が中王国時代ではなく第17王朝末期とする意見もあり、今後の検討が必要であることが判明している。

キーワード：ネクロポリス・テーベ、再利用、中王国時代、岩窟墓

第１図　ネクロポリス・テーベ

はじめに

上エジプト第４ノモス（古代名ウアセト）のテーベ西岸には、新王国時代（第18～20王朝：前1539～前1077年頃）[1] を中心とする多くの岩窟墓が存在しており、一般にネクロポリス・テーベの名で呼ばれている（第１図）。

フリーデリケ・カンプ（Friederike Kampp）によって、414基の登録墓に加えて、551基の未登録墓がリスト・アップされている（Kampp 1996）。これらの墓は、墓番号の両脇にハイフンをつけて表現され、例えば、Grab Nr. -239- （「カンプ番号239号」あるいは「カンプ墓239号」）などと呼ばれる。これは登録墓の略号の例：TT 239、Theban Tomb No. 239（テーベ岩窟墓239号）としばしば混同される。カンプが合計965基の岩窟墓をあげているが、本書の副題が示すように、新王国第18王朝から20王朝にかけての岩窟墓の概念の変化に関するものであるため、新王国時代以外の岩窟墓に関しては、しばしば平面プランさえも提示されていない場合が多い。

しかしながら、現在においても、このカンプの著書が、ネクロポリス・テーベの全容を把握する上では、最も有効なものであることも事実である。

ネクロポリス・テーベは、前述したように新王国時代

に大いに発展したが、それ以前の第２中間期・中王国時代・第１中間期・古王国時代にも、この地域には岩窟墓が造営されていた。

中でも、新王国時代の直前にあたる第２中間期と中王国時代の岩窟墓の構造や分布を検討することは、新王国時代のネクロポリスの展開と様相を考える上で非常に重要な要素となる。

本稿では、新王国時代以降に再利用された中王国時代に起源をもつと考えられる岩窟墓を検討することで、中王国時代に造営されていた岩窟墓の存在を明らかにすることを目的としている。

１．先行研究

新王国時代のいくつかの岩窟墓が、中王国時代の岩窟墓を再利用して造営されていることを最初に指摘したのは、ドイツ考古学研究所のジョベックであった。ジョベックは、テーベ西岸の第18王朝の岩窟墓の保護と報告書の刊行を目的として、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置する第18王朝のイネニ墓（TT 81）の発掘調査を実施した。イネニ墓は、第18王朝のアメンヘテプ１世の治世（在位：前1514～前1494年頃）からトトメス３世の治世（在位：前1479～前1425年頃）に造営されたものであった。この墓に記された自伝には、イネニが、王家の谷・東谷のトトメス１世（在位：前14903～前1483年頃）の王墓やカルナク・アメン大神殿の中心の部分を建造したことなどが記されていた。ジョベックは、イネニ墓の調査で、この墓のプラン（第２図）が新王国第18王朝の他の墓と相違していることに気づいた。

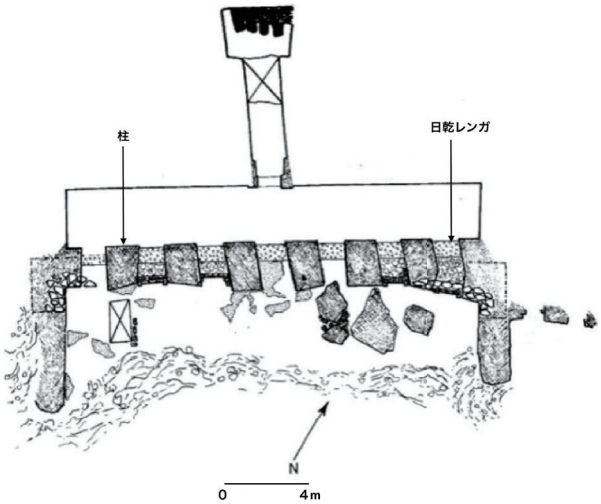
イネニ墓の前庭部の奥には、長方形の底面をもつ６本の柱があり、こうした柱の構造が第11王朝初期の所謂「サフ墓」の構造に類似している点をあげている。このイネニ墓の構造に関しては、ジョベックなどは第18王朝初期の岩窟墓が、中王国時代の岩窟墓を模倣して出来上がったものであるとした（Dziobek 1987: 79）。恐らく、その背景としては、アル＝ディール・アル＝バハリの第18王朝前期のハトシェプスト女王（在位：前1479～前1458年頃）が、第11王朝のメンチュヘテプ２世の神殿を模して彼女の葬祭殿を建造したのと同様に、新王国第18王朝時代の初期・前期の人々が、中王国時代の記念建造物にインスピレーションを得て、岩窟墓や神殿を建造したと推測できる。

ジョベックは、これら６本の柱の間に、日乾レンガ造の壁を築くことで、柱の間の隙間を塞いでいたことに注目し、６本の柱が最初に存在し、後にそれらの間の空間をレンガによって塞ぎ、上部に小窓を持つ構造に改変したことを明らかにした。このことから、イネニ墓が、中王国時代の墓を模倣して建造されたのではなく、中王国時代に造営された岩窟墓を第18王朝時代の前期に、再利用したものであると結論付けた。また、このイネニ墓（TT 81）の直後にセンエンムウト墓（TT 71）が、この影響を受けて小窓を持つ構造になったとしている（Dziobek 1987: 70）。

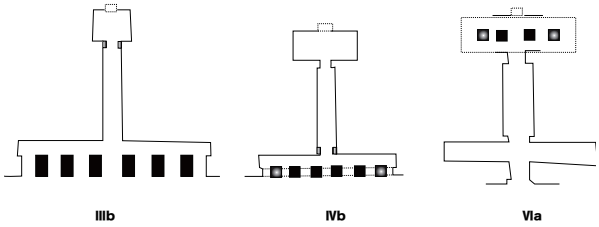
ジョベックは、中王国時代に起源をもつ岩窟墓として、TT 67、TT 83、TT 117、TT167などの岩窟墓も候補としてあげている。

カンプは、彼女の著書の中で、岩窟墓を平面プランのタイプに分類し、Ⅱ～Ⅶのタイプに関してはさらにⅡa, Ⅱb, Ⅲa, Ⅲb, Ⅳa, Ⅳb, ２Ⅴa, Ⅴb, Ⅴc, Ⅴd, Ⅴe, Ⅵa, Ⅵb, Ⅶa, Ⅶb, Ⅶcと細分している。これらのタイプの中でⅢbタイプ（TypeⅢb）が、イネニ墓（TT 81）に分類されるものである（第３図）。

また、カンプは、このタイプⅢbに関して第１表を示



第２図　イネニ墓（TT 81）の平面プラン



第３図　カンプのタイプⅢｂ、Ⅳｂ、Via

第１表　タイプⅢｂに分類される墓

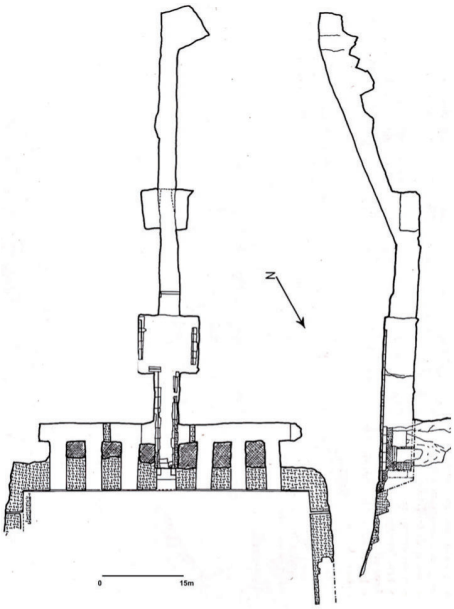
年代	関連する岩窟墓
中王国時代	-9-, -20-, -76-, -107-, -282-, -288-, -349-, -351-, -425-, -427-, -428-, -488-, -549-, -550-, TT81, TT103, TT117

し、このタイプの岩窟墓の年代を中王国時代とし、カンプ番号墓14基を含む、合計17基を示している。登録墓は、TT 81、TT 103 、TT 117の３基である。TT 103は、中王国第11王朝のダギ墓であり、TT 117も第11王朝時代の岩窟墓で、第3中間期に再利用されたものである（Kampp 1996: 19）。

しかしながら、ジョベックが中王国時代に起源をもつ岩窟墓の候補としているTT 67、TT 83、TT 167に関して（Dziobek 1987: 76~79）、カンプは、TT 67（ヘプウセネブ墓）をタイプVIaに分類し（Kampp 1996: 28）、その年代も被葬者でアメン大司祭のヘプウセネブの年代であるハトシェプスト／トトメス３世時代としており、再利用墓とはみなしていない。そして、トトメス３世治世初期のテーベ市長で宰相であったイアフメス墓（TT 83）は、タイプIVbに分類され（Kampp 1996: 21）、時期も第18王朝初期のイアフメス王（在位：前1539～前1515年頃）～トトメス３世時代としている。TT 167（被葬者名不詳）もまたタイプIVbに分類しており（Kampp 1996: 21）、墓の年代も第17王朝末期から第18王朝時代初期としている。このようにカンプは、これらの岩窟墓は、第17王朝末期から第18王朝前期の時期のものであるとしている（Kampp 1996: 21）。

２．岩窟墓再利用の事例と比較

本稿では、以下に事例としてあげる岩窟墓が、中王国時代に造営され、新王国時代に再利用されているという共通点を持っていることについてふれる。そして、中王国時代に造営され、新王国時代には再利用されていないダギ墓と比較する。



第４図　ダギ墓 (TT 103) 平面プラン

２－１．ダギ墓（TT 103）（第４図）

カンプが、タイプⅢbに分類した17基の岩窟墓（第１表）の中で、３基の登録墓が含まれているが、新王国時代以降に再利用されたイネニ墓（TT 81）とネスアメン墓（TT 117）とともに記載されているのが、中王国第11王朝のテーベ市長で宰相であったダギの墓（TT 103）である。

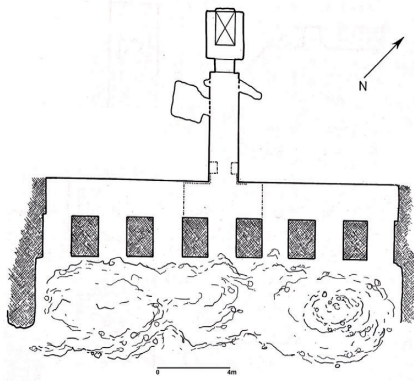
ダギ墓は、シェイク・アブド・アル＝クルナ地区にあり、第３図のような平面プランを持つ岩窟墓である。前庭部の奥に長方形の底面を持つ６本の柱がある構造をしている。この６本柱の構造は、前述したイネニ墓の構造に類似しているが、ダギ墓の場合は、柱の間を塞ぐ日乾レンガの壁体は存在していない。

２－２．TT 117（第５図）

カンプが、イネニ墓（TT 81）、ダギ墓（TT 103）とともにタイプⅢbに分類している岩窟墓にTT 117がある（第４図）。被葬者の名前や称号は不詳であるが、墓内には第11王朝時代の壁画が部分的に残存している（Porter and Moss 1960: 233）。この岩窟墓を再利用した人物に関し、カンプは墓内部の碑文を検討し、第３中間期・第22王朝のジェドムウトイウエフアンクとした（Kampp 1996: 19）。

第４図に示すようにTT 117も、前庭部の奥に６本の柱を持つ構造をしている。墓入口から真っすぐに通路が伸びて、シャフト（竪坑）を持つ奥室が位置している。シャフトを持つ奥室構造は、中王国時代に良く使用されたものである（Dziobek 1987: 76）。

第11王朝時代の壁面装飾が残存していること、そして再利用された時期が新王国第18王朝時代ではないことなどから、この岩窟墓は、中王国時代に未完成のままの状



第５図　ジェドムウトイウエフアンク墓（TT 117）の平面プラン

態で放棄されていたものを再利用したものではなく、第11王朝時代に完成されていた岩窟墓を第３中間期・第22王朝時代に再利用した可能性も大であることを指摘しておく。

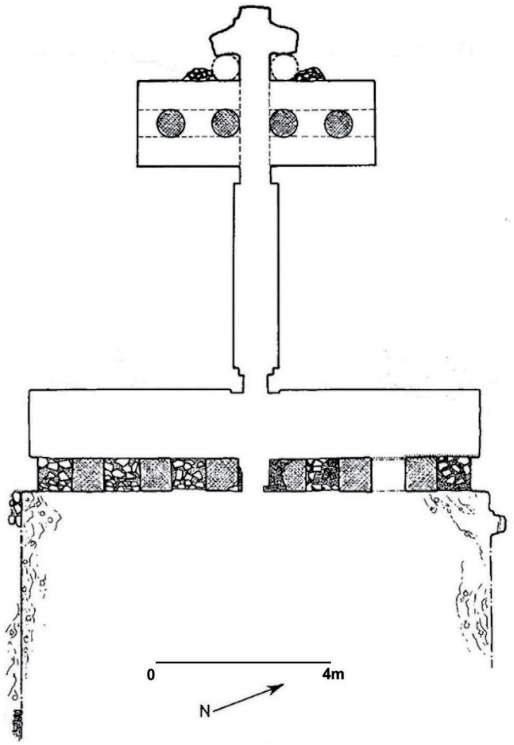
２－３．ヘプウセネブ墓（TT 67）（第６図）

ジョベックが、中王国時代起源の岩窟墓を新王国時代に再利用した墓としているヘプウセネブ墓（TT 67）に関して、カンプは、前述したように再利用墓としては考えていない。

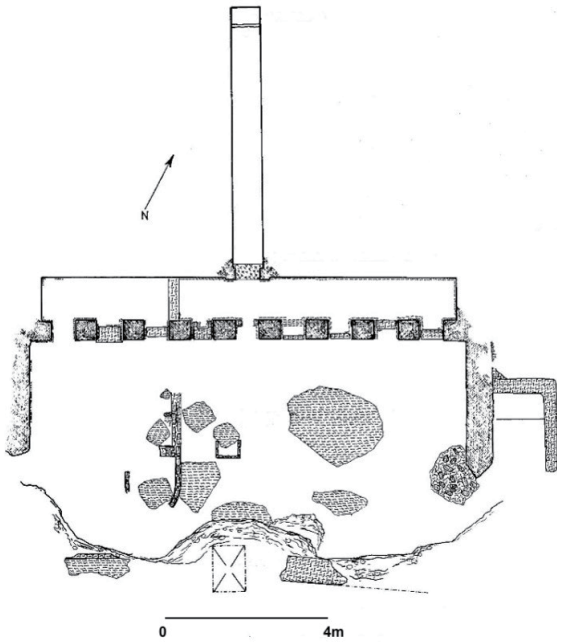
第５図に示すようにヘプウセネブ墓（TT 67）も前庭部の奥に６本の柱が位置しており、柱の間に礫を積んで泥プラスターで仕上げた痕跡が残存しており、イネニ墓（TT 81）と同様に上部を窓のようにあけて使用していることなどを考えると第11王朝の岩窟墓を再利用したものであると言える。しかし通路や４本の柱を持つ奥室の構造などは、第18王朝時代の岩窟墓のプランに改変したことがうかがえる。

２－４．イアフメス墓（TT 83）（第７図）

シェイク・アブド・アル＝クルナ地区に位置するトトメス３世治世初期のテーベ市長で宰相のイアフメス（アメチュウ）の墓（TT 83）は、前庭部の奥に８本の柱を持つ構造である。これらの柱の間には日乾レンガで塞がれている。また、墓内部には直線的な通路が存在している。カンプは、この墓をタイプⅣbに分類、時期を新王国第18王朝初期のイアフメス王（在位：前1539～前1515年頃）～トトメス3世（在位：前1479～前1425年頃）時代とした。



第６図　ヘプウセネブ墓（TT 67）の平面プラン



第７図　イアフメス墓（TT 83）の平面プラン

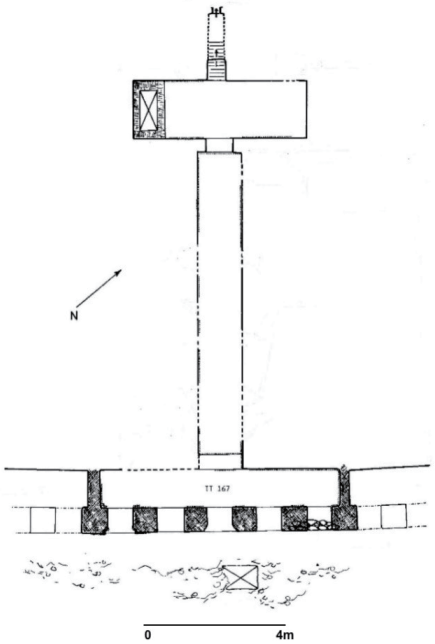
墓の被葬者であるイアフメス（アメチュウ）が、トトメス3世治世初期の人物であることを考えるとこの岩窟墓は、第18王朝初期に造営されたものをトトメス３世時代初期までに再利用されたものであると推定できる。

墓が造営された時代が、中王国第11王朝であるのか、第18王朝初期などであるのかは、今後の検討によるが、このプランを持つ墓がカンプが主張するように第18王朝初期であるとする積極的な理由もない。

２－５．TT 167（第８図）

前述したイアフメス（アメチュウ）墓と同じく、カンプにより、タイプⅣbに分類されている墓にTT 167がある。被葬者の名前は不詳であるが、カンプは、その時期を第17王朝末期～ハトシェプスト女王時代のものとしている。

前庭部の奥の柱は６本現存しているが、当初は８本の柱の構造にするよう計画されていたことが、平面プランからわかる。柱の間を塞いだ痕跡があるため、この岩窟墓もまた再利用と考えられるが、前述のイアフメス墓（TT 83）と同じように元来の岩窟墓の起源が中王国時代なのか、第17王朝末期から初期のものなのかは現時点では不明である。



第８図　名が不明な墓（TT 167）の平面プラン

おわりに

新王国第18王朝、トトメス１世からハトシェプスト女王の治世において、中王国時代に起源を持つ岩窟墓の幾つかのものが再利用されていたことが確認できたが、今後の課題として、「サフ墓」と類似した前庭部の奥に柱を持つ構造の岩窟墓が、中王国第11王朝時代のものなのか、あるいは、同じ構造の岩窟墓が第17王朝末か18王朝初期まで造営されていたかをカンプの分類方法をいかして詳細に各岩窟墓を明らかにする必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたって、早稲田大学学術院指導教授・近藤二郎先生にご指導、早稲田大学文学研究科考古学コース博士後期課程・福田莉紗氏にご助力を賜った。深く御礼申し上げたい。

註

（１）本稿では、Hornung 2006: 491~495の編年年代表使用

引用文献

Dziobek, Eberhard 1987, *"The Architectural Development of Theban Tombs in the Early Eighteenth Dynasty"*, in Problems and Priorities in Egyptian Archaeology ed. by Jan Assmann, G. Burkard and V, Davies, KPI Ltd, London and New York, p69-80.

Kampp, F. 1996, *Die thebanische Nekropole zum Wandel des Grabgedankens von der XVIII. bis zur XX.* Mainz am Rhein.

Porter, B. and Moss, R. L. B. 1960. *Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs and Paintings/1 :The Theban Necropolis/1 : Private Tombs,* Oxford.

図表出典一覧

第１図　Willock, S. 2011. p.9.をもとに筆者が作成
第２図　Kampp, F. 1996, p.325.をもとに筆者が作成
第３図　Kampp, F. 1996, p.19-20, p.28.をもとに筆者が作成
第４図　Kampp, F. 1996, p.377.をもとに筆者加筆
第５図　Kampp, F. 1996, p.405をもとに筆者加筆
第６図　Kampp, F. 1996, p.291をもとに筆者加筆
第７図　Kampp, F. 1996, p.333をもとに筆者加筆
第８図　Kampp, F. 1996, p.457をもとに筆者加筆

第１表　Kampp, F. 1996, Die thebanische Nekropole, 2, p.19をもとに筆者加筆

溯航　第39号　75-88頁　2021年２月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

2020年度神奈川県川崎市橘樹（たちばな）郡家跡の三次元測量・GPR調査

高橋　亘、関根有一朗、呉　心怡、李　承叡、宮崎澪菜、
横山未来、石井友菜、田邊凌基、伊藤結華、山内将輝

はじめに

橘樹郡家跡は、隣接する「影向寺（ようごうじ）遺跡」と共に「橘樹（たちばな）官衙遺跡群」として、2015年に国史跡に指定された遺跡である。当遺跡は、多摩川中流の沖積平野を望む多摩丘陵の舌状台地縁辺部に位置している（第１図）。周辺には古代駅路に遡る中原街道が通り、矢上川、多摩川が流れるなど、交通の要衝である。評家成立以前の方形周溝状遺構が発見されており、10世紀までの遺構が連綿と存在する。地方官衙の成立と変遷、終焉までを考究できる全国でも稀有な遺跡である。

本調査では、川崎市教育委員会の協力で、橘樹郡家跡の基礎的な情報の収集を目的とした三次元測量・GPR（Ground Penetrating Radar）探査を行った。本稿は、その概報である。

１．調査の経緯・体制・経過

１－１．調査の経緯

2019年度、川崎市教育委員会と早稲田大学文化財総合調査研究所（所長：田畑幸嗣）との間で「川崎市内所在遺跡の調査研究に関する覚書」を交わした。これを受け早稲田大学が2019/11/14～16の３日間で、橘樹官衙遺跡群のうち、影向寺遺跡の範囲でGPR探査を行った（2019年度調査）。

2020年度に、それを一部引き継ぎ、高橋が個人研究として橘樹郡家跡の範囲で調査を行うこととなった。なお、本調査では2019年度調査で取得しきれなかった影向寺遺跡範囲の一部追加調査を行っているが、2019年度調査と合わせて別稿にて報告予定である。

本稿では、今年度調査の範囲を２地区に分け、それぞれ「WA地区」、「WB地区」として報告する（第２図）。

１－２．調査の体制

【調査対象】国史跡：橘樹官衙遺跡群（橘樹郡家跡）。
【所在地】 神奈川県川崎市高津区千年字伊勢山台423-1
【調査期間】2020年11月９日（月）～13日（金）。計５日間。
【調査担当】高橋　亘（早稲田大学大学院文学研究科・修士課程）。
【調査指導】田畑幸嗣（早稲田大学文学学術院・教授）。
【調査参加者】石井友菜・呉　心怡・横山未来（早稲田大学大学院文学研究科・博士後期課程）、田邊凌基・伊藤結華・関根有一朗・宮崎澪菜・山内将輝・李　承叡（早稲田大学大学院文学研究科・修士課程）。

１－３．調査の経過

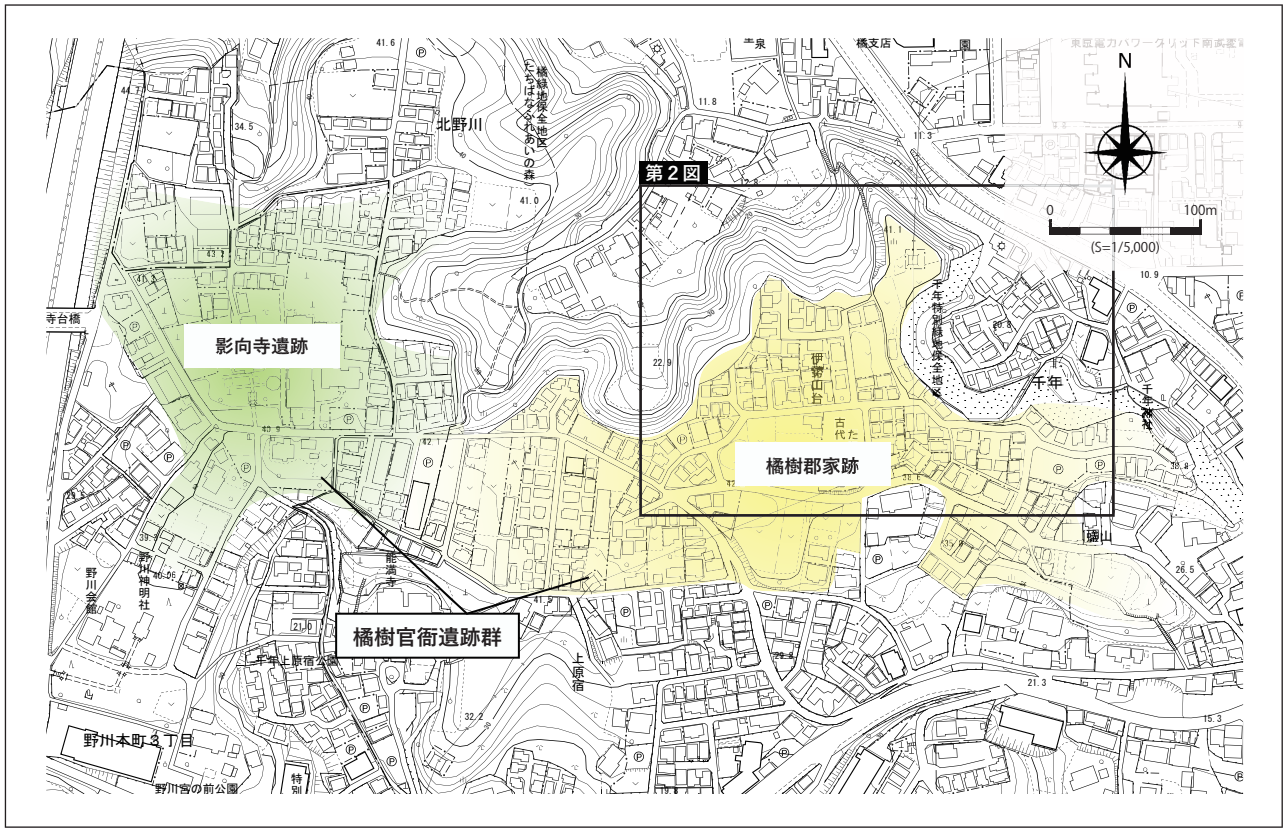
【2020/11/９】AM：水準移動、基準杭設置。R1区、R2区設定。PM：水準移動。基準杭設置完了。R3区～R5区設定。R1区、R2区走査。
【11/10】AM：水準移動完了。三次元測量。PM：三次元測量。ブルーシート、防草シート剥がし。
【11/11】AM：三次元測量。ブルーシート、防草シート剥がし完了。PM：三次元測量。R6区～R8区設定。R3区走査。
【11/12】AM：三次元測量。R4区、R6区走査。PM：三次元測量。R9区、R10区設定。R5区、R7区～R10区走査。杭抜き。ブルーシート、防草シート戻し。
【11/13】AM：ブルーシート、防草シート戻し。機材整備。撤収。

２．橘樹郡家跡の既往調査と課題

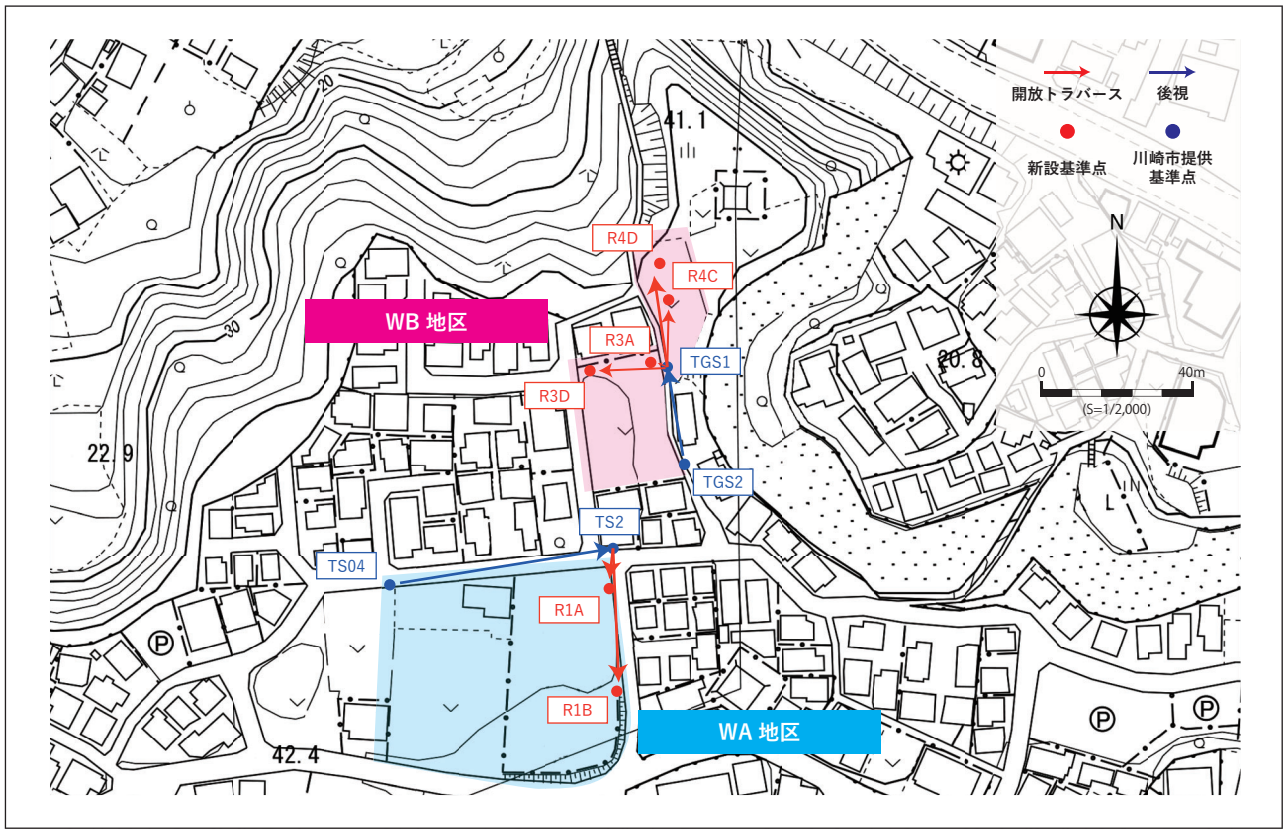
２－１．既往の調査

橘樹郡家が発見されるまで、当遺跡周辺は「千年伊勢山台遺跡」と称した複合遺跡として認識されていた。1980・81年に千年伊勢山台遺跡発掘調査団（団長：竹石健二）によって小規模のトレンチ調査が行われたが、この調査では橘樹郡家関連の遺構は発見されていない（竹石・野中1983）。

その後、1996年の宅地造成に伴う調査で、東西に並ぶ掘立柱が発見され、はじめて橘樹郡家の存在が推定された（千年伊勢山台北遺跡調査団2000）。更に、1998年から2003年にかけて川崎市教育委員会により、正倉院の性格や郡庁の所在を解明するための確認調査（第１次～第８次）が行われ、正倉院中枢部や区画溝などの郡家関連遺構が確認された（川崎市教育委員会2005・2004a・2004b）。2004・05年には、ガス管埋設工事に伴う調査



第１図　橘樹官衙遺跡群と周辺地形



第２図　本調査の対象範囲と基準点測量

（第９次・第10次）が行われ、公道下で郡家に関連する遺構を確認した。また、遺跡範囲の一部を橘樹郡衙推定地保存活用事業として公有地化（2008年に「たちばな古代の丘緑地」としてオープン）し、案内板やフェンス設置場所の確認調査（第11次）によって一部遺構が確認された（川崎市教育委員会2008）。2013年以降は、開発に伴う調査や、史跡の保存・活用に向けた範囲確認調査（第12次～）が断続的に行われ、掘立柱建物や区画溝などが確認されている（川崎市教育委員会2014・2018）。

2015年には「橘樹官衙遺跡群」として国史跡に指定された。これを受け、『国史跡橘樹官衙遺跡群保存活用計画』・『同整備基本計画』（川崎市教育委員会2018・2019）が策定され、現在短期計画第１期として史跡の調査・整備が進められている。

２－２．調査の課題

橘樹郡家跡は、既往の調査成果から、評成立以前、評家、郡家の順に、その変遷を連綿と追うことができる稀有な遺跡である。しかし、その中心的施設である郡庁の所在地が未だ分かっていない。また、隣接する影向寺遺跡も金堂・塔以外の主要建物（伽藍）の様相が明らかになっていない。そのため、文献の記述や他地域の官衙から推測せざるを得ないのが現状である。よって、本遺跡の全貌・歴史的位置づけを明確にするためにも非破壊的手法による基礎データの収集が重要である。

一方、住宅地に所在している橘樹郡家跡は、宅地開発の影響を受けており、非破壊調査の有効性が不明である。そこで本調査は、既往の発掘調査からある程度様相が把握できており、なおかつ調査環境の整っている範囲を重点的に調査し、都市部（住宅地）の遺跡に対する測量・GPR調査の有効性を確認することも目的とした。

３．基準点測量と三次元測量・GPR 探査の方法

３－１．基準点測量

本調査に当たって、川崎市教育委員会より発掘調査時に設置した基準杭座標データの提供をうけた。これらを用いて、開放トラバースにより測量基準点６点（R1A・R1B・R3A・R3D・R4C・R4D）を新設した（第１表）。使用したトータルステーションはTOPCON社FX-105、プリズムはAPS12である。TS2を機械点・TS04を後視点にし、R1AとR1Bを測距、TGS1を機械点・TGS2を後視点にし、R3A・R3D・R4C・R4Dをそれぞれ測距した（第２図）。

また、TS2の標高を用いて、レベルによる水準測量を行った。それぞれTS2を始点とする往復路線で、誤差は均等配分した。なお、これらの新設基準杭は全てGPR探査用の杭と共用している。

第１表　川崎市提供基準杭・新設基準杭座標一覧

属性	点名	X	Y	Z
川崎市提供基準杭	TS2	−46781.000	−19037.145	42.218
	TS04	−46790.569	−19095.628	42.521
	TGS1	−46733.297	−19022.789	41.022
	TGS2	−46759.055	−19018.143	41.433
新設基準杭	R1A	−46791.965	−19038.071	42.453
	R1B	−46818.898	−19036.046	41.934
	R3A	−46732.488	−19027.149	41.640
	R3D	−46734.465	−19043.037	41.956
	R4C	−46715.855	−19022.525	41.308
	R4D	−46706.137	−19024.809	40.847

３－２．三次元測量の方法

本調査では、定量的な地形情報を取得するため、TOPCON社Layout Navigator（以下、LN）を使用し、地形をランダムに測距する「間接測量」という方法を用いた。三次元スキャナーとは異なり、LNによる測量は作業者が地表面を選択しながら測距するため、ノイズが少ないというメリットがある。

取得した点群データ(CSVファイル)を、GISソフト（Esri社Arc-GIS）上で、TIN（不規則三角形網）→DEM（数値標高モデル）→Contour（等高線）の順に解析した。

３－３．GPR探査の方法

まず、トータルステーションでGPR探査用の区画（以下、レーダー区）を設定した。レーダー区の４隅にはプラスチック杭（以下、レーダー杭）を用い、それぞれLNにて測距した。レーダー杭は北東隅をAとし、時計回りにA～Dとした。

本調査ではMALA社GXの450MHzアンテナを使用した。また、目安として2m毎に水糸を貼り、50cm間隔で走査した。

取得したデータ（RD7ファイル）をGPR Sliceにて解析し、Time Slice平面図とProfile断面図を作成した。その後、描き出したTime Slice平面図を、Arc-GISでレーダー杭を基準にジオリファレンスした。なお、レーダー杭の座標は一覧で示した（第２表）。

第２表　レーダー杭座標一覧

レーダー区	レーダー杭	X	Y
R1区	R1A	-46791.965	-19038.071
	R1B	-46818.898	-19036.046
	R1C	-46820.544	-19057.986
	R1D	-46793.625	-19060.059
R2区	R2A	-46811.763	-19040.030
	R2B	-46823.048	-19035.909
	R2C	-46832.341	-19061.225
	R2D	-46821.080	-19065.363
R3区	R3A	-46732.488	-19027.149
	R3B	-46761.232	-19023.565
	R3C	-46763.224	-19039.433
	R3D	-46734.465	-19043.037
R4区	R4A	-46704.049	-19016.046
	R4B	-46713.791	-19013.742
	R4C	-46715.855	-19022.525
	R4D	-46706.137	-19024.809
R5区	R5A	-46714.936	-19018.620
	R5B	-46727.574	-19015.632
	R5C	-46728.499	-19019.518
	R5D	-46715.855	-19022.525

レーダー区	レーダー杭	X	Y
R6区	R6A	-46807.816	-19067.228
	R6B	-46833.758	-19068.952
	R6C	-46832.112	-19093.866
	R6D	-46806.162	-19092.176
R7区	R7A	-46820.229	-19039.977
	R7B	-46835.158	-19038.438
	R7C	-46837.640	-19062.255
	R7D	-46822.681	-19063.797
R8区	R8A	-46810.219	-19054.281
	R8B	-46838.174	-19056.093
	R8C	-46837.579	-19065.057
	R8D	-46809.652	-19063.187
R9区	R9A	-46799.478	-19042.789
	R9B	-46813.104	-19036.552
	R9C	-46815.218	-19041.099
	R9D	-46801.552	-19047.343
R10区	R10A	-46808.734	-19068.300
	R10B	-46819.677	-19069.212
	R10C	-46818.257	-19086.170
	R10D	-46807.353	-19085.266

４. 三次元測量の成果

４－1. 調査の範囲

今回の三次元測量の範囲は、史跡指定範囲のうち、「WA地区」とその北東に位置する「WB地区」である。その他の区画は現在、宅地や畑として利用されているため、調査環境の整っているこの２地区を選択した。いずれも正倉域に位置している。

４－２. 調査の成果

官衙や古代寺院の調査では、詳細な地形図による現地形の情報化が行われることは少ない。しかし、遺跡内の微地形を詳細に把握することは、今後精緻化していく遺構研究には重要であり、また、GPRのデータを解釈するにも必要不可欠である。

今回、LNにて取得した点群は、WA地区：24,739点とWB地区：2,297点の合計27,036点である。これを座標系・JGD2011-IXに設定してArc-GISに取り込み、TINの作成を行った。その後、DEM化し、Contourを描出した。

標高・Jenks・30クラスで設定したTINに0.1m Contourを重ね、地区ごとに表示した図が第３図・第４図、取得した点群を示した図が第５図である。

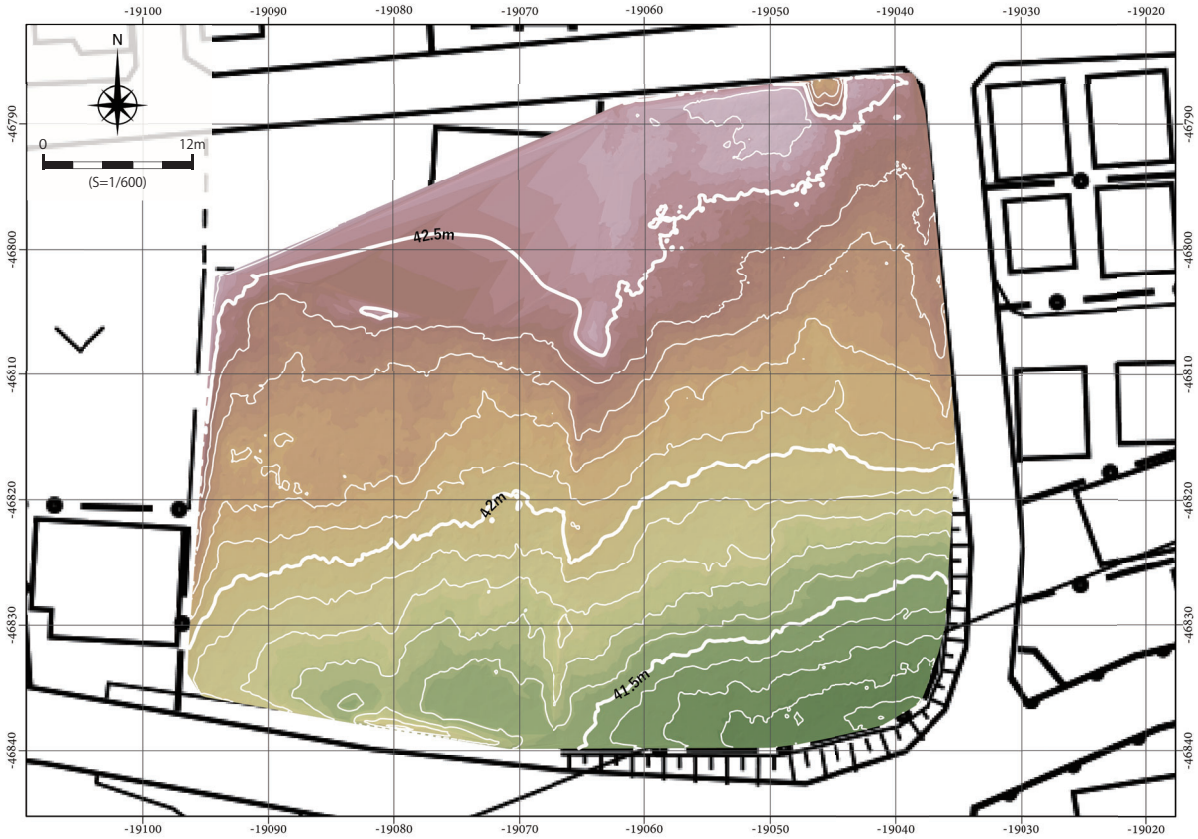
WA地区（第３図）

WA地区は、全体が北から南に向かって大きく傾斜していることが分かる。橘樹官衙遺跡群全体の地形の中で言及するのであれば、この地区は東に大きく張り出した舌状台地上の南隅に位置しているため、このような傾斜があらわれると考えられる。

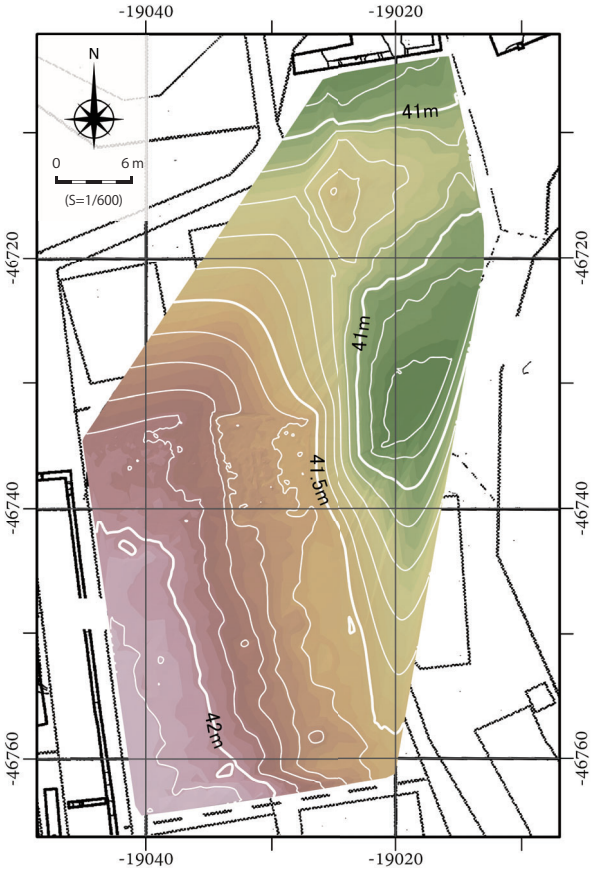
なお、地区中央にある南北に連続する高まりは公園を区切るフェンスによるもの、北東にある四角い凹みは緑地入口のアスファルトである。

WB地区（第４図）

WB地区は台地の北辺であるため、南西の高台から北東に向かって低く傾斜している様子が観察できる。区内東側にも大きな傾斜が見られ、明治・大正時代のいずれかで、がけ崩れがおきた可能性が指摘されている（村田 2010）が、詳細は不明である。

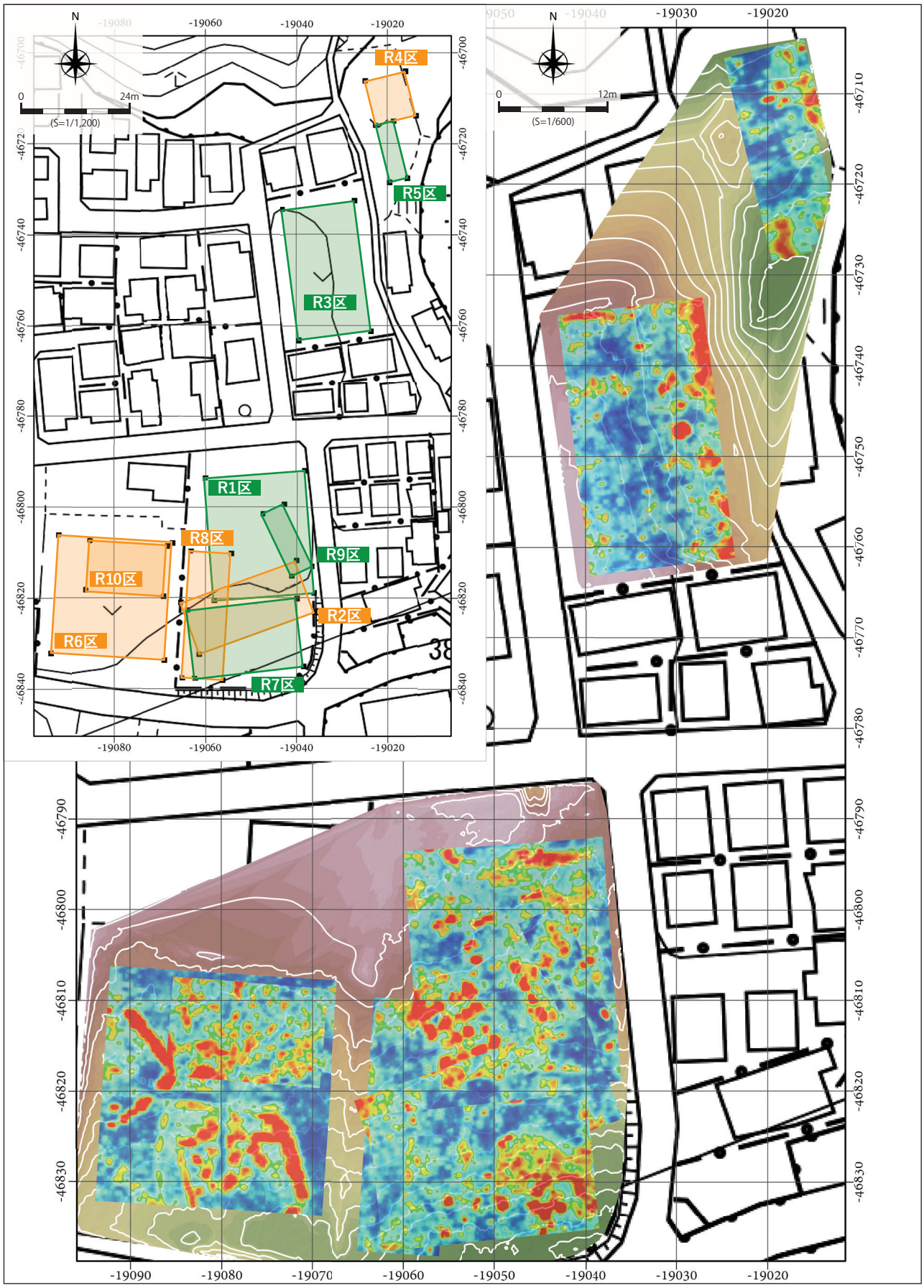


第３図　WA 地区の TIN と 0.1mContour



第４図　WB 地区の TIN と 0.1mContour

第５図　取得した点群（27,036 点）



第６図　設定したレーダー区の位置と GPR 成果

５．GPR の成果

５－１．調査の範囲

三次元測量と同様、WA地区・WB地区の２地区を対象に、合計10区（R1区～R10区）のレーダー区を設定・走査した。

５－２．調査の成果

レーダー区の位置と全10区のGPR成果を第６図、各レーダー区ごとの成果を第７図～第10図にそれぞれ示した。以下、各レーダー区の所見である。

【R1区（第７図）】22×27m・14.6–40.4ns。

WA地区内北側に、設定した。

①（x=10m, y=13m）から（x=8m, y=20m）の範囲で、南北に強く丸い反応が並んでいる。

②（x=12–19m, y=7–9m）の範囲で、東西に連続した反応が２つある。

③（x=17m, y=19m）を中心に10m四方程度の範囲に、一定の間隔で強く丸い反応がある。

④Y=17.5mのProfileでは、x=8–10m・14.5–16m・19–20.5m・21–22mの範囲で、強い反応がある。

①～③の３つの反応は、その規模・位置からそれぞれ川崎市による第２次調査３区で検出されたSB0032・SB0030・SB0031の柱掘方の反応である。いずれも既往調査から３間×３間の総柱建物であることが分かっている。①のSB0032の反応は遺構西端の１列のみ反応がある。発掘報告書を確認すると、この１列のみ完掘をしており、残りの３列の柱掘方は遺構確認面で平面プランを確認するに留めた様子が伺える。GPRは相対反応で可視化するため、完掘した１列の埋め戻し土の反応が強く、他の３列の反応が可視化されていない事が考えられる。同様の理由で、SB0030の反応も一部のみ反応が見えていると考えられる。なお、SB0032の反応していない３列は、その確認のため対象範囲にR9区を設定した。

【R2区（第８図）】27×12m・10.7–21.7ns。

R1区南側に、電線を避けて設定した。

①（x=7–15m, y=9–12m）の範囲で、強い反応があるが、詳細は不明である。

【R3区（第８図）】16×29m・26.2–41.0ns。

当調査でWB地区とした区画のうち、南西の１区画に設定した。

①（x=0–7m, y=27–29m）の範囲に、強い反応がある。

②（x=9–13m, y=9–22m）の範囲で、いくつか丸い反応がある。

③（x=14–16m, y=16–29m）の範囲で、反応がある。

④その他、区内で、いくつかまばらな丸い反応がある。

①は川崎市第２次調査２区のトレンチ北壁が反応したものだと考えられる。②～④は性格不明だが、既往の調査で当レーダー区西側に３間×３間の総柱建物が東西に並んで検出されており、当区も推定正倉域に位置することから、正倉に関連する遺構の可能性もある。

【R4区（第８図）】9×10m・18.4–29.5ns。

R3区の北東、北側に設定した。

①x=7–9mの範囲で、強い反応がある。

②区内全域で、反応がいくつかある。

①は、調査区東側に設置されている鉄柵の反応と考えられる。②は関連遺構とも推測できるが、川崎市第20次調査で検出された区画溝の外であるため、その可能性は低い。

【R5区（第８図）】4×13m（一部走査側線延長）・3.7–10.9ns。

R4区南側に、設定した。

①（x=0–3, y=0–5m）に、強い反応がある。

①は、川崎市第20次調査にて検出された正倉院外周区画溝SD0057の反応である。

【R6区（第９図）】25×26m・3.7–18.2ns。

WA地区内、西側に設定した。

①（x=5–8m, y=3–6m）の範囲で南東から北西に連続した反応がある。

②（x=1m, y=8–15m）の範囲に、強く丸い反応が南北に３つ並んでいる。

③（x=2–8m, y=8–22m）の範囲で、逆くの字状の反応がある。

④（x=8–11m, y=13–16m）の範囲で強い反応がある。

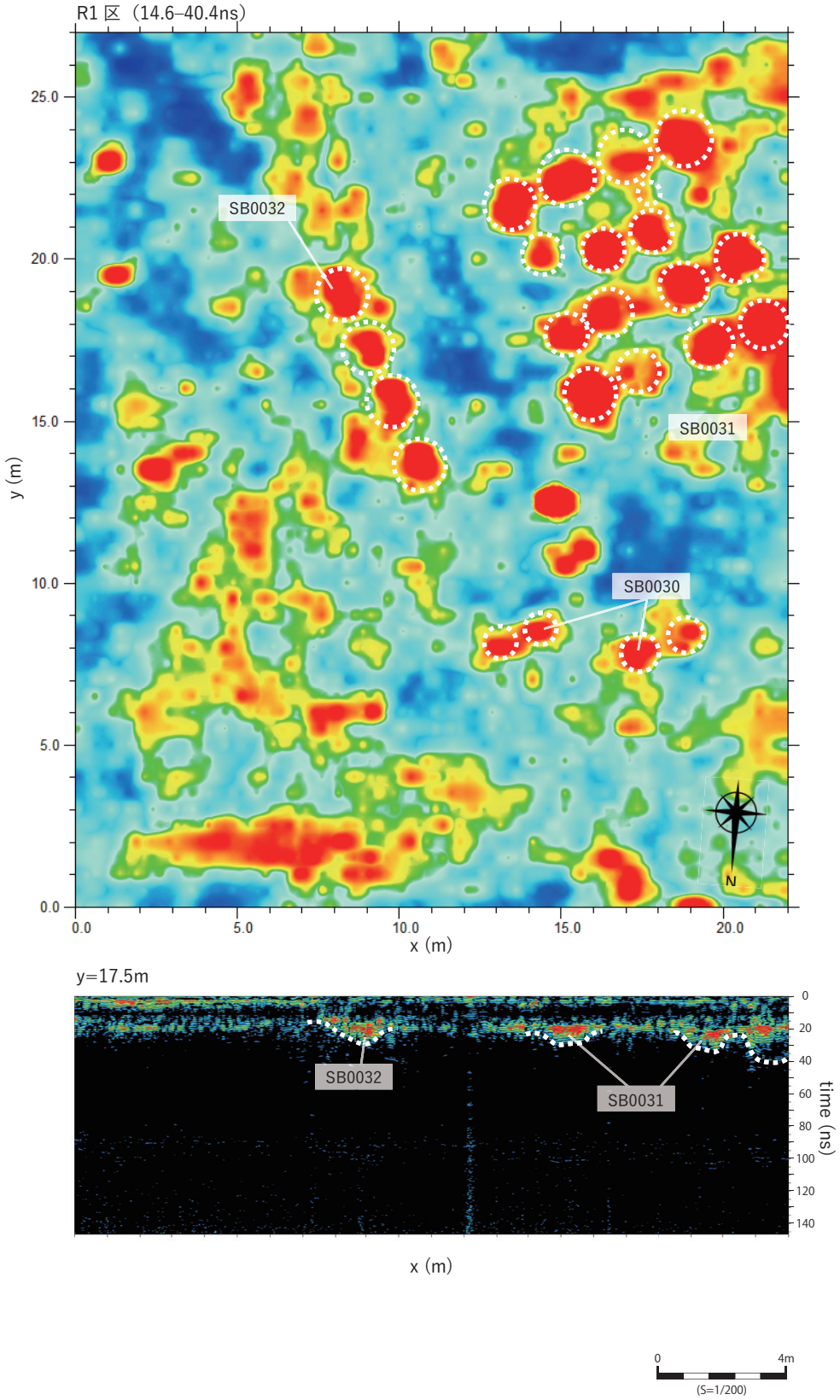
⑤（x=9–11 m, y=0– 6 m）・（x=16–24m, y=0–11m）の範囲で太い連続した反応がある。

⑥（x=9–19m, y=2–11m）の範囲（⑤の内側の範囲）で強い反応が丸く連続している。

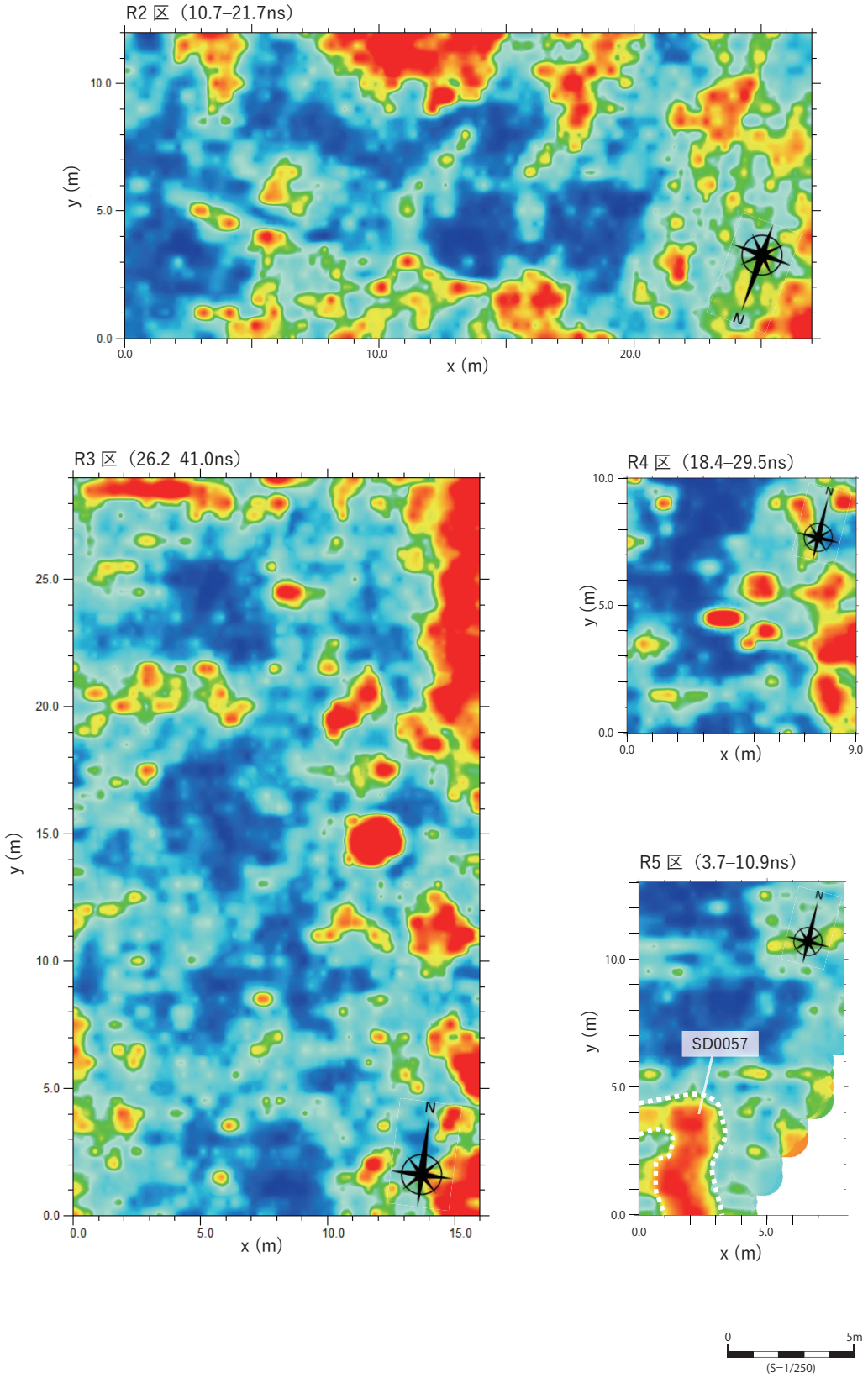
⑦（x=12m, y=17m）に丸い反応がある。

⑧x=13mとy=12mに青く直線的な反応がある。

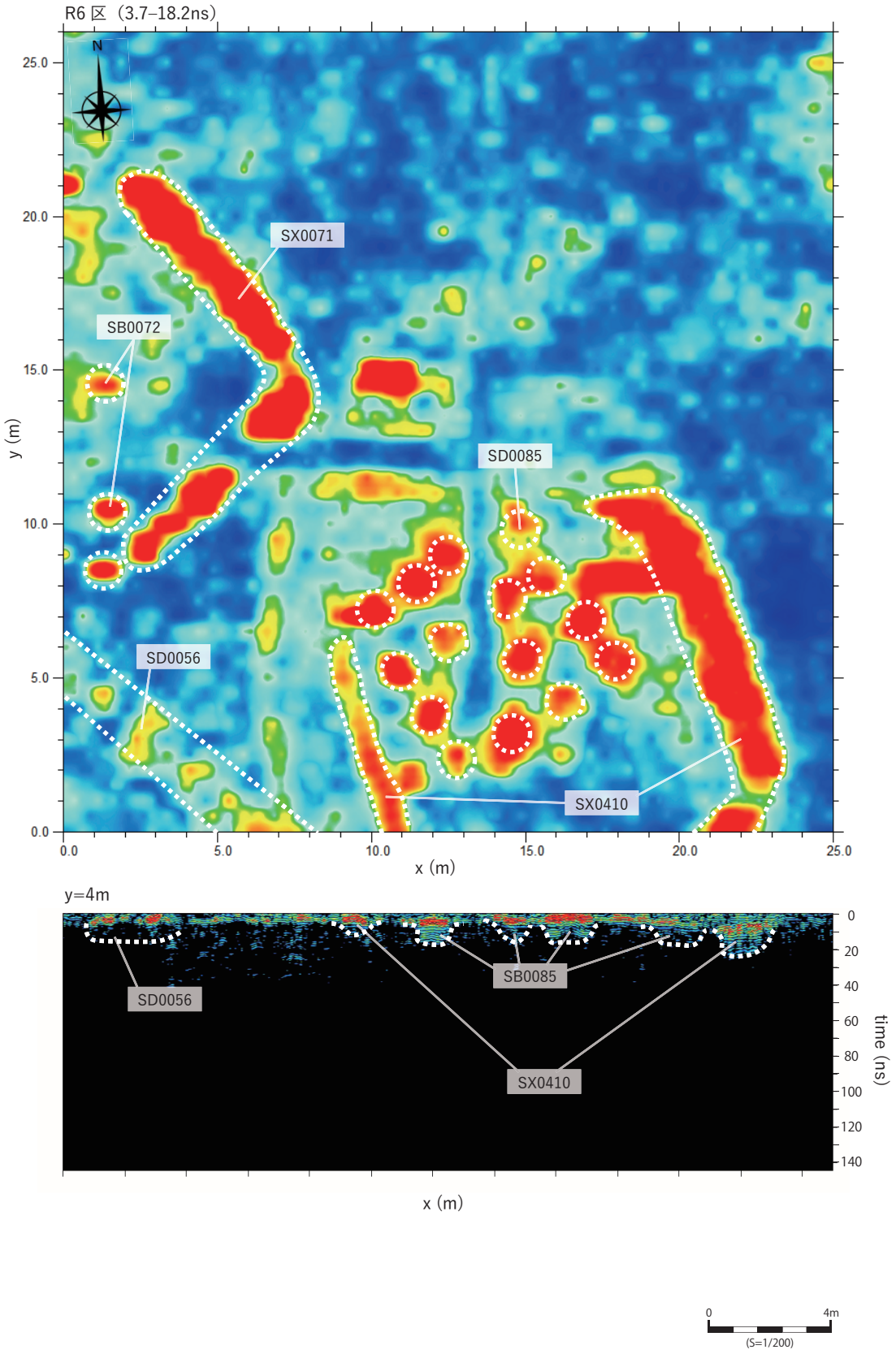
⑨y=4mのProfileではx=1–3m・9–10m・11–13m・14–15m・15–17m・21–21mで強い反応がある。



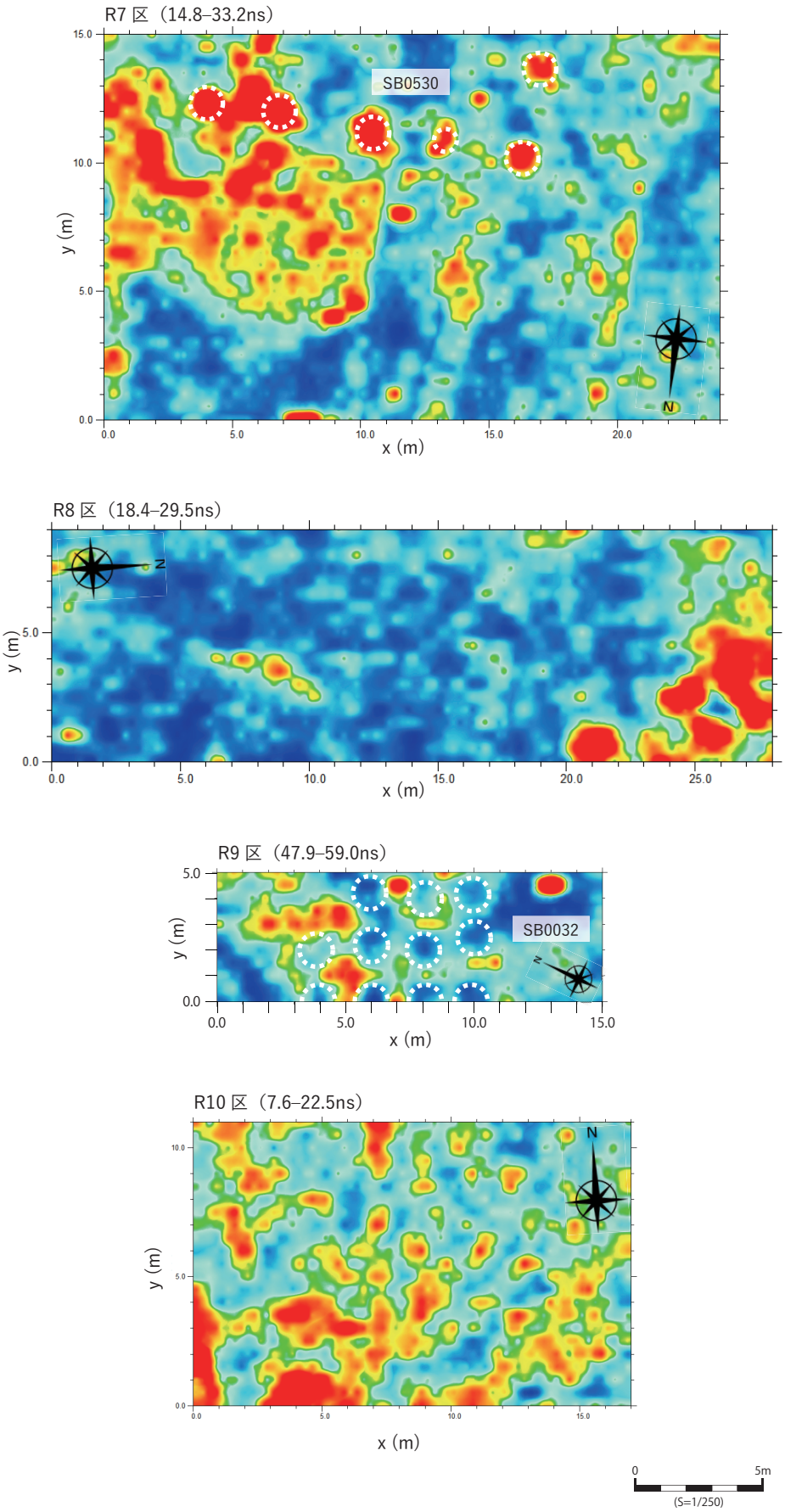
第７図　各レーダー区の GPR 成果①



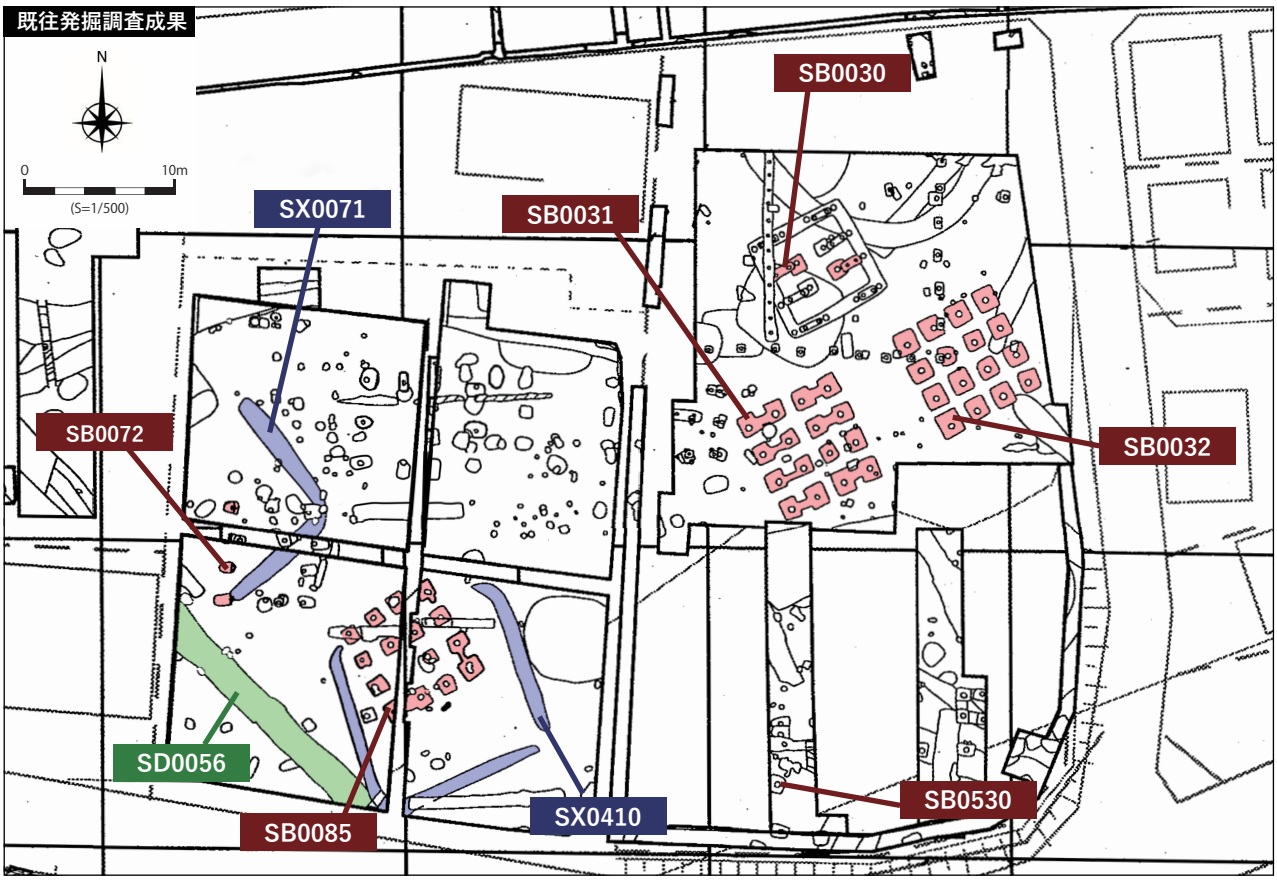
第８図　各レーダー区の GPR 成果②

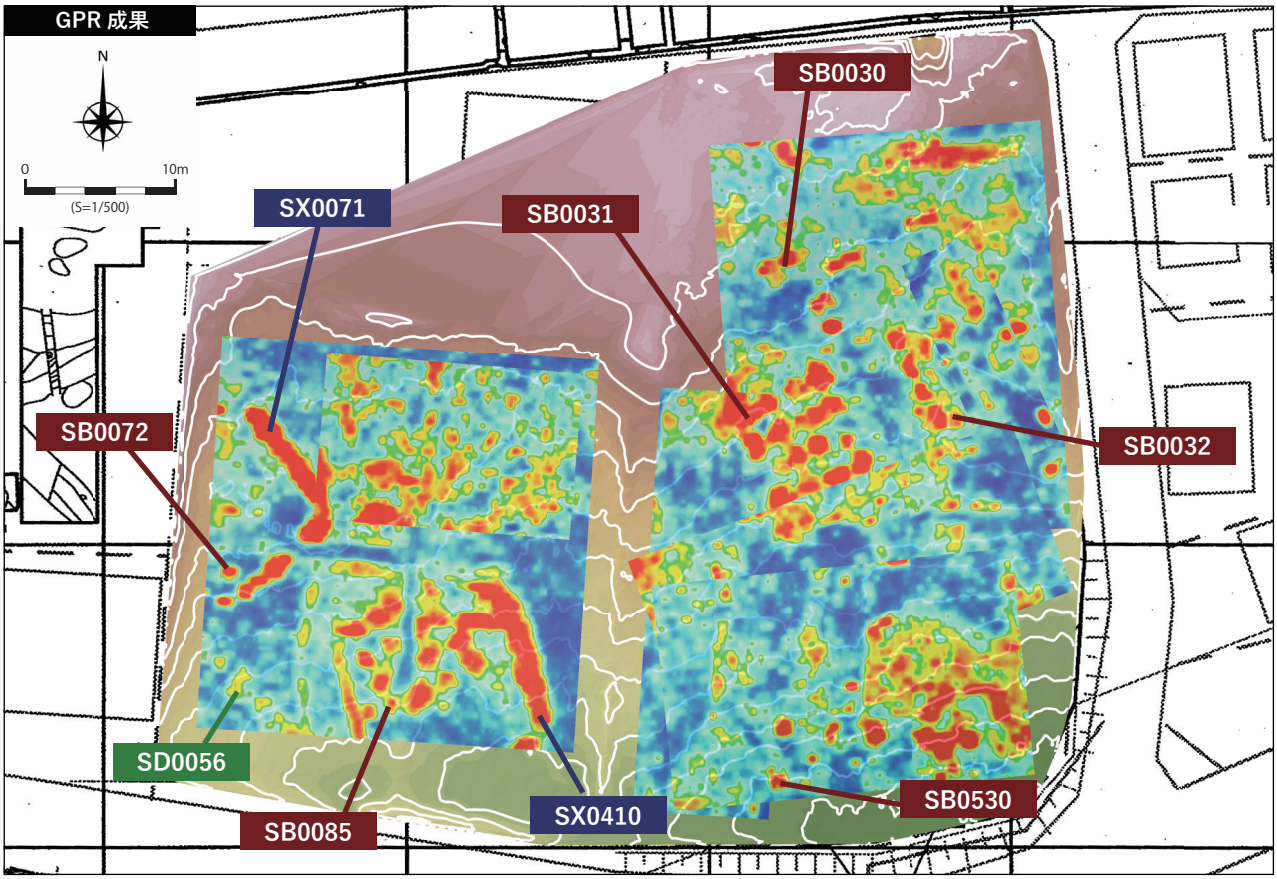


第 9 図　各レーダー区の GPR 成果③

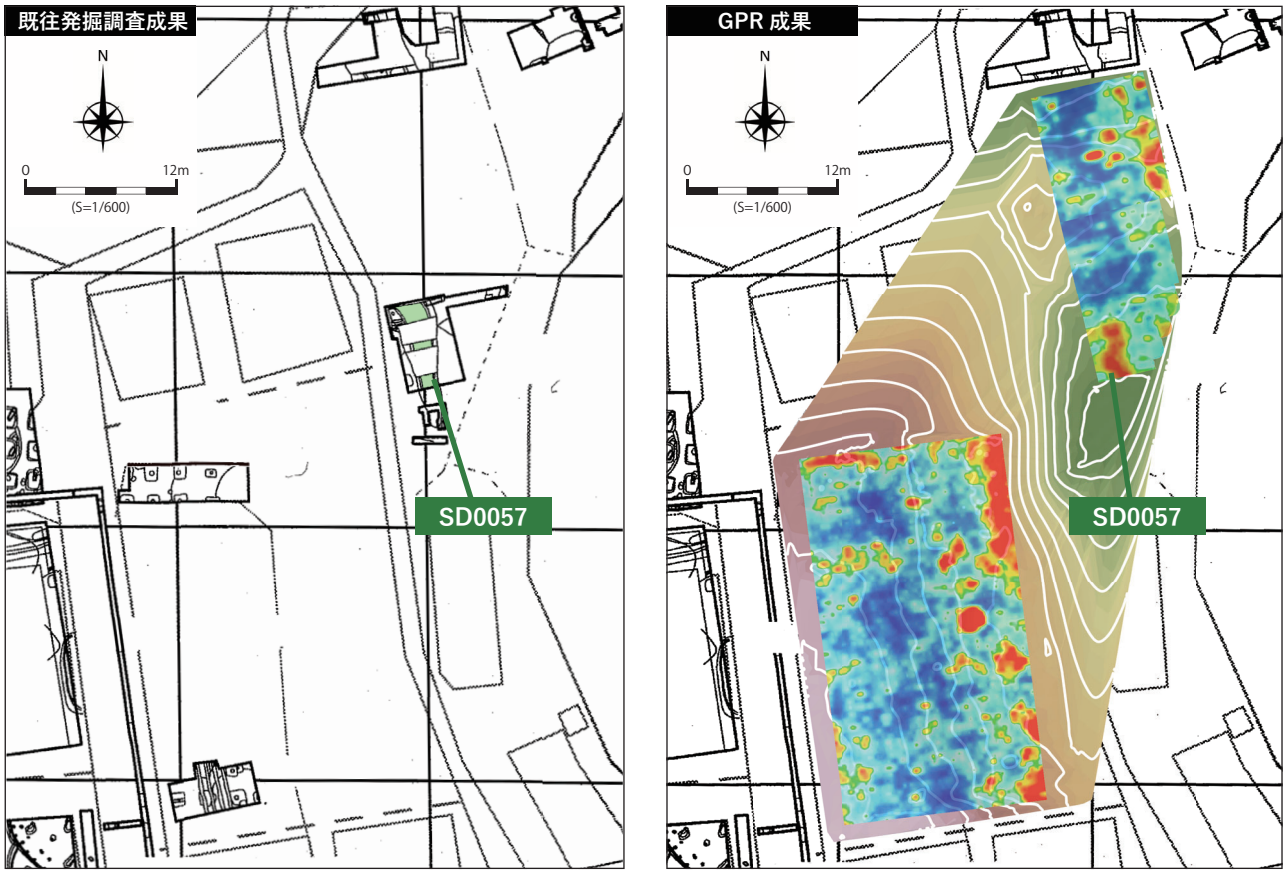


第 10 図　各レーダー区の GPR 成果④





第 11 図　WA 地区の既往発掘調査成果と GPR 成果



第 12 図　WB 地区の既往発掘調査成果と GPR 成果

①～⑦・⑨の反応は、川崎市による第３次調査D区、第５次調査２区、第21次調査で確認された遺構である。それぞれ、①の反応はSD0056、②の反応はSB0072、③の反応はSX0071、④の反応はSX0411、⑤の反応はSX0410、⑥の反応はSB0085、⑦の反応はSB0150である。⑧は、第21次調査のトレンチ壁だと推測できる。なお、R1区と同様に、相対反応によりR6区の北側の反応が薄くなっている可能性が考えられたため、該当箇所にR10区を設定した。

【R7区（第10図）】25×15m・14.8–33.2ns。

WA地区内、R1区の南側に設定した。

①（x=0–10m, y=4–14m）の範囲で、強い反応がある。

②（x=0–18 m, y=10–15m）の範囲で、L字型に丸い反応の連続がある。

①の性格は不明である。②は、川崎市第30次調査にて確認されたSB0530の反応と考えられる。

【R8区（第10図）】28×9m・18.4–29.5ns。

WA地区、南西に設定した。

①（x=20–28 m, y=0–8m）の範囲で、反応がある。

①は、R1区でも確認されたSB0031の反応と考えられる。

【R9区（第10図）】15×5m・47.9–59.0ns。

R1区の成果をうけ、R1区内にSB0032の東側柱列（３列）が存在すると思われる場所に設定した。

①（x=3–11m, y=0–5m）に丸い反応の連続がある。

①は、R1区で確認されたSB0032の反応と考えられる。完掘されている１列は埋め戻し土に水分が多く含まれていることから、赤く反応したが、東側３列はそれよりも水分が少なく、堅い土であるため、青い反応になっていると推測される。

【R10区（第10図）】17×11m・7.6–22.5ns。

R6区の成果を受けて、R6区内北側に設定した。

①区内全体で、川崎市第21次調査などで確認された遺構と思われる反応がある。

①は、発掘成果などを参照しても遺構の切り合いが激しく、反応を現段階で解釈するのは困難である。

６．調査成果の総括

本調査では、WA地区・WB地区において、現地形の情報と、その地下の情報を得ることができた。

三次元測量の成果は以下のとおりである。

①WA地区は、全体が北から南に向かって傾斜している。

②WB地区は、区内南から北・西から東に向かって傾斜している。

③WA地区・WB地区の範囲は、既往の発掘成果から正倉域と推測されている。よって①と②を総合すると、正倉院は舌状台地の東端に位置していることを、定量的に示せた。

また、以下にGPR調査の成果を記述する。なお、既往の発掘調査成果と本調査のGPR成果図を、第11図・第12図に並べて示した。

④本調査で再確認した遺構は次のとおりである。SB0030・SB0031・SB0032・SB0072・SB0085・SB0530・SD0056・SD0507・SX0071・SX0410。

⑤Time Slice図をジオリファレンスし、調査図面に重ねた結果、遺構の位置にわずかなズレが見られた。今後、整合性も含め検討課題である。

以上、①～⑤まで、本調査成果を列挙した。

おわりに

本稿は、2020年度に行った橘樹郡家跡における非破壊調査の概報である（今後、前年度調査の概報・両年度の成果を総合的に検討した本報告の２稿を発表予定）。本調査では、遺跡の微地形や遺構に関する基礎データを収集することができた。しかし、発掘調査図面とずれが生じていることなどから、遺構の規模や軸線の傾きなどを再計算し、比較・検討をしていく必要がある。また今回は、古代官衙遺跡における非破壊調査の有効性を確認するという点でも非常に貴重な調査であったといえる。現在進んでいる発掘調査の成果等も考慮しつつ、より詳細な検討を行うことを、今後の課題としたい。

謝辞

最後に、調査をご指導くださった田畑幸嗣先生をはじめとする早稲田大学考古学コースの先生方、調査をご許可いただいた川崎市教育委員会文化財課の新井悟氏、栗田一生氏、調査機材をお貸しいただいた近藤二郎先生・馬場匡浩先生、調査準備をお手伝い頂いた長﨑潤一先生・伝田郁夫氏に、末筆ながら深謝いたします。

※本報告に際して、各解析・図版作成・文章執筆は高橋が担当した。関根・呉・李・宮崎・横山・石井・田邊・伊藤・山内は、調査データの取得・整理・解析補助を担当した。

引用文献

川崎市教育委員会 2004a『武蔵国橘樹郡衙推定地　千年伊勢山台遺跡 第７次調査報告書』

川崎市教育委員会 2004b『武蔵国橘樹郡衙推定地　千年伊勢山台遺跡 第８次調査報告書』

川崎市教育委員会 2005『武蔵国橘樹郡衙推定地　千年伊勢山台遺跡 第１～８次調査報告書』

川崎市教育委員会 2008『武蔵国橘樹郡衙推定地　千年伊勢山台遺跡 第９・10・11次調査報告書』

川崎市教育委員会 2014『橘樹官衙遺跡群の調―橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書［古代編］―』

川崎市教育委員会 2018『国史跡橘樹官衙遺跡群保存活用計画』

川崎市教育委員会 2018『橘樹官衙遺跡群の調査―橘樹郡家（郡衙）跡［千年伊勢山台遺跡］第14次～第25次調査・影向寺遺跡第16次～第19次調査報告書―』

川崎市教育委員会 2019『国史跡橘樹官衙遺跡群整備基本計画』

竹石健二・野中和夫 1983「千年伊勢山台遺跡発掘調査報告書」『川崎市文化財集録』第19集 川崎市教育委員会

千年伊勢山台北遺跡調査団 2000『千年伊勢山台北遺跡発掘調査報告書』

村田文夫 2010『川崎・たちばなの古代史 ―寺院・郡衙・古墳から探る』有隣新書

図表出典一覧

第１・２図　川崎市提供の都市計画図を用いて高橋作成。

第３～５図　本調査データを基にArc-GISにて高橋作成。

第６図　本調査データをGPR Sliceで解析したのち、Arc-GISにてジオリファレンスして、高橋作成。

第７～10図　本調査データを基にGPR Sliceにて高橋作成。

第11・12図　川崎市教育委員会 2018を一部改変し、Arc-GISにて高橋作成。

第１・２表　本調査データを基にMicrosoft Excelにて高橋作成。

文研考古談話会2020年度活動報告

2020年

５月18日　2020年度運営委員会議

７月８日　文研考古談話会　第187回例会
（第１回新人発表会）
伊藤結華「エジプト・ナカダ文化の波状把手付土器について」
岡本　樹「縄文時代後晩期における土器製塩研究」
下田麻里子「カンボジアポスト・アンコール期王都の都市構造研究―中世カンボジアの国家構造変革の解明にむけて―」
関根有一朗「縄文時代晩期後葉の浮線文土器群に関する一考察―千葉県域における浮線文土器群の変遷―」
宮崎澪菜「古代エジプトにおける木製模型について」

12月７日　文研考古談話会　第188回例会
（第１回溯航執筆者発表会）
飯塚真人「縄文時代中期前葉の北陸の土器編年に関する考察」
伊藤結華「エジプト先王朝時代における硬質土器の流通―上エジプト出土の波状把手付土器と彩文土器の再検討―」

12月14日　文研考古談話会　第189回例会
（第２回溯航執筆者発表会）
関根有一朗「千葉県における浮線文モチーフの分類と系統」
アブデルアール・アハメド「第11王朝時代におけるネクロポリス・テーベの展開」

12月21日　文研考古談話会　第190回例会
（第３回溯航執筆者発表会）
宮崎澪菜「エジプト第１中間期から中王国時代における木製模型の象徴的機能の再考察」

※新型コロナウイルス感染対策の為、2020年度は全てオンラインで実施。

編集後記

今年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行による影響が各所に及んでおり、高橋先生より頂戴しました巻頭言にもありますように、我々学生も研究活動の大幅な制限を受けました。そうした状況にありながら、本年も『溯航』の発刊に至ったことをうれしく思います。

研究を論文にまとめて発表するということは、一方向的な発信に留まるものではなく、学術的な手続きに基づいて他者に意見を投げかけることでもあります。感染症流行の影響により直接顔を合わせて議論する機会が減少している今日だからこそ、私たちはこれに委縮するばかりでなく今までに増して学術的な発信力を高めていく必要があります。その意味では、この『溯航』39号は考古学コースの学生にとって、先行きが見えない中で研究活動を進める一つの重要な指標であるように思います。

今号は、研究地域、時代の枠を超え、前号にも増して多くの学生から原稿が集まりました。発行に至るまでのオンラインを中心としたやりとりは、初めての試みで試行錯誤の連続でしたが、諮問会などでもたくさんのコメントが寄せられ、今まで以上に内容の濃い意見交換ができたのではないかと感じています。また、『溯航』が初めての単著論文となる学生も多いため、専門性の高い論文となるよう各ゼミの先輩方にもサポートしていただきました。今号に掲載されている6本の原稿が、今後の研究に寄与することを願います。

末筆になりますが、巻頭言を頂きました高橋先生をはじめ、刊行に際してご協力頂きました研究室の方々に御礼申し上げます。

（編集：横山未来・田邊凌基　編集補助：伊藤結華・李　承叡・高橋　亘）

『溯航』　第39号　2021年2月

発　　行　　2021年2月25日

編集・発行　　早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
〒162-0052　東京都新宿区戸山1-24-1　早稲田大学文学部考古学研究室
Tel. 03-5286-3646 / (内線)72-3111

印 刷 所　　冊子印刷社（有限会社　アイシー製本印刷）
〒263-0004　千葉県千葉市稲毛区六方町114-3
Tel. 0120-41-3425